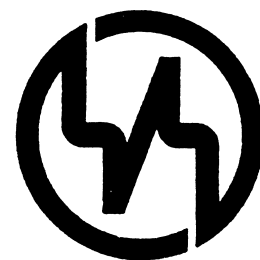


町民参加の町史づくり



# 竹富町史づくり

第57号



## 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1  
TEL (0980) 87-6257

# 目 次

2025年度 竹富町のシمامニ（島言葉）保存・継承のとりくみ……………	1
〈方言サミット〉ポスター「竹富町の島じまのコトバ」……………米盛恭子… 3 — 『竹富町誌』「第三節 島々の方言」を基にして—	
〈島々の踊り・狂言〉 品取狂言（祖納村）……………	8
テードゥムニ（竹富言葉）一口メモ……………狩俣恵一…	14
唱歌《ふるさと》をテードゥムニで歌おう！……………	15
〈資料1〉「第4回シمامニ発表会」in 波照間島〈パンフレット〉……………	17
〈資料2〉戦後80年 波照間島から考える「平和への模索」……………仲底善章…	40
〈資料3〉「危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会」リレーエッセイ ……	44
1. 八重山毎日新聞	
(1) 島の宝「すまむに」を次世代に（黒島健）／(2) 危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会に向けて（長田秀一）／(3) ハンガマ石の伝説（飯田あかね）／(4) 第46回テードゥムニ大会（石垣久雄）／(5) ふるさと（大竹芳典）／(6) 二番座の記憶（白保椋之）／(7) 「言語・方言サミット」へオーリ・トーリ（しゅまむに伝承研究会）／(8) 『鳩間方言辞典』の未来（中川奈津子）／(9) 昔話をスマムニで（花城正美）／(10) 『西表方言集』の背景と意義（前大用裕）／(11) 方言への苦手意識（宮城光平）／(12) タラマフツは南琉球をつなぐ（下地賀代子）／(13) 私とスマムニの軌跡（真久田絹代）／(14) 島をカタチツクルもの（那根真）	
2. 八重山日報	
(1) 汝の立つところを深く掘れ、そこに泉あり（吉村安史）／(2) ベスマの響き（白保椋之）／(3) 琉球のワールドワークを開始したころ（松森晶子）／(4) 石垣方言の丁寧語（西岡敏）／(5) 八重山合衆国（大竹芳典）／(6) スマムニ継承の工夫（花城正美）／(7) 82歳の義母はトライリングル!?（奥平崇史）／(8) 三線の勘所と「葉指」の方言（新田哲夫）／(9) 「南風」を何と読む？（米盛恭子）／(10) バガドゥンでい ばがいわるな。（村松稔）／(11) 先島地方で発達した「カギ」「カイ」〈影〉（仲原穰）／(12) どうなんむぬいし はなしきんだぎ（与那原マリサ）／(13) 与那国島の多言語社会（小池康仁）／(14) ある郷土研究者の人生（石垣直）／(15) 危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会に向けて（浦内克雄）／(16) 私とスマムニの絆（荻堂久子）／(17) ザーファイシーチャンラー（佐藤仁）／(18) シمامニと記憶と記録と（占部由子）／(19) 『竹富方言辞典』の思い出（上江洲儀正）	
編集後記……………	71

## 〈表紙の写真〉祖納公民館「品取狂言」

危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会（2025年10月25日、於・石垣市民会館大ホール 提供・米盛恭子）

# 2025年度 竹富町のシマムニ保存・継承のとりくみ

## ◆シマムニ普及推進部会

シマムニ（島言葉）は、歌謡・芸能の基盤であることはもちろん、私たちのアイデンティティーにも直結する貴重な文化遺産です。しかし2009年、ユネスコ（国連教育科学文化機関）は、消滅の危機にある8言語のうち、竹富町の島々のシマムニを含む八重山語が、「重大な危機」であることを発表しました。

現代は、社会・暮らしの変化や、移住者の増加に伴い、シマムニを使用される機会が失われつつあります。方言を自在に使うことができる先輩も限られてきました。こうしたことから、シマムニは今や消滅の危機に瀕しているといえます。

こういった状況を鑑みて、2019年、竹富町の島々村々のシマムニ（島言葉）を保存のみならず、普及と推進をも視野に入れ、「シマムニ普及推進部会」が発足されました。このシマムニ普及推進部会が中心となって、部会の発足以降、毎年「竹富町シマムニ発表会」を開催しています。発表会も会場を地域持ち回りの形式で既に4回の会を重ねています。第1回（2019年）は竹富島、第2回（2023年）は小浜島、第3回（2024年）は黒島、第4回（2025年）は波照間島で開催されました。第5回は鳩間島での開催が決まっています。

## ◆第4回シマムニ発表会

2025年7月6日、波照間島農村集落センターにて、第4回シマムニ発表会が開催されました。今回は、竹富町全域（波照間島、西表島祖納、西表島古見、鳩間島、小浜島）から7組計37人が出演しました。

発表会は毎回、「島言葉を忘れたら島を忘れ 島を忘れたら親をも忘れる」という内容を、各会場地域のシマムニで表わし、それを標語として会場に大きく貼りだすのが恒例です。第4回は波照間言葉で「シマムニ バスシャチャ シマ バシルン シマバシチャ ウヤ バシルン」と掲げられました。

プログラムは次の七つの発表が行なわれました。

- ①「東村のコンギ」（波照間公民館東組）
- ②「イユファイダーぬ話」（西表島祖納・那良伊隼人）
- ③「バーヌ ウムイル クモー村」（小浜島・入羽一成）
- ④「波中の一 日 ベスマー 波中 ヌ ガク ヌ スカマー」（波照間中学校1年生）
- ⑤「十二支のおはなしーネズミとネコのおはなしー」（西表島古見・古見公民館）
- ⑥「ヤキヌ デンテン ファムレうた」（鳩間島・田代馨）
- ⑦「西村のコンギ」（波照間公民館西組）。

本号には〈資料1〉としてパンフレットを収録しましたが、①⑦は『竹富町史だより』（第56号）に収録したので割愛することにします。

当日は、仲底善章氏の波照間方言による司会進行でスムーズに進められました。この模様はYouTubeでも配信され、遠隔地からの視聴もありました。

発表の形式はお話や、演劇など自由です。お話に歌やハーモニカの演奏を挿入したり、それぞれ工夫してシマムニを発表しました。満場の観客は、各地似ているようで、また独特の味わいのあるシマムニを堪能し、大いに盛りあがりました。

講評では、シマムニを話せる世代の高齢化とともに、継承が難しくなっているが、島の宝であるシマム

ニを積極的に使っていこうという呼び掛けがありました。

## ◆令和7年度危機的な状況にある方言サミット八重山大会

2025年10月25日（第1日目）・26日（第2日目）、石垣市民会館大にて「令和7年度危機的な状況にある方言サミット八重山大会」が開催されました。趣旨はパンフレットに「日本には消滅の危機にある言語・方言がいくつもあります。アイヌ語、八丈方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言、そして東日本大震災被災地方言などです。『危機的な状況にある方言サミット』は、これらの言語・方言の状況や地域の取組事例の紹介、聞き比べや講演などを通して、文化の多様性を支える言葉の役割や価値について共に考え、危機的な状況を改善するきっかけとしようとするものです」とあります。主催・共催は文化庁、沖縄県、石垣市、石垣市教育委員会、竹富町、竹富町教育委員会、国立国語研究所、琉球大学。

第1日目のプログラムは、①アトラクション、②開会式、③基調講演 セリック・ケナン氏「八重山語の現状とその行方について—歴史的な視点を踏まえて考える—」、④危機言語・方言の聞き比べ、⑤危機言語・方言による表現披露1、⑥ブースアピール・ブース発表。

第2日目は、①開会、②危機方言の現況報告、③石原昌英氏「八重山地方における取組報告」、④深澤美香氏「アイヌ語の現況報告」、⑤危機言語・方言による表現披露2、⑥すまむに（方言）を話す大会、⑦閉会。

竹富町からの参加について、第1日目④に、竹富島から石垣久雄氏、黒島から宮良哲行氏が登壇しました。⑤では祖納公民館が「品取狂言」を披露しました（本号に台本を収録・8-13頁）。⑥について、36ブースのうち、「方言辞典を作る 波照間方言辞典・宮古大神方言辞典」（金田章宏、大嶺高安、伊佐照雄）、「小浜島絵本の紹介」（花城正美、白保椋之、クリス・デイビス）、「竹富町での活動報告」の三つが竹富町から出展されました。なお、「竹富町での活動報告」については、本号収録の「ポスター『竹富町の島じまのコトバ』作成」（米盛恭子）に詳細が報告されています。

第2日目の⑥「第13回 すまむに（方言）を話す大会」（石垣市文化協会主催）には、竹富町から仲底善章氏（波照間島）、野底忠氏（石垣市登野城在、小浜島出身）がそれぞれ「戦後80年 島から考える『平和への模索』」、「スمامニ ヌ イルイル」と題して発表しました。前者については、〈資料2〉として本号に収録しました。

その他、地元紙（『八重山毎日新聞』2025年10月3日-10月25日・全14回、『八重山日報』2025年10月5日-10月26日・全19回）では「危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会リレーエッセイ」が連載されました。本号にすべてのエッセイを〈資料3〉として収録できました。両紙からの転載について、趣旨を理解くださり、こころよく転載を許可していただきました八重山毎日新聞社・八重山日報社両社に感謝申し上げます。

# 〈方言サミット〉

## ポスター「竹富町の島じまのコトバ」作成

『竹富町誌』「第三節 島々の方言」を基にして



### ■ポスター制作のきっかけ

このたび、竹富町教育委員会からポスター『竹富町の島々のコトバ』を作成し、町内児童生徒の皆さんに配布しています。

制作のきっかけは、令和7年10月25、26日に開催された「令和7年度危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会」（以下「方言サミット」）での取り組みでした。

方言サミットへの参加が初めてとなる私たち教育委員会のスタッフは、どうしたものかと日々悩みながらの取り組みとなりました。

2日間に及ぶ大会では、日本各地から来島した関係者を交え、報告会、舞台発表、方言の聞き比べ、ブース展示など多彩なプログラムが編成されました。

竹富町からも西表島祖納公民館による「実践発表・品取狂言」、方言の聞き比べでは宮良哲行（黒島）、石垣久雄（竹富島）の両氏にご登壇いただき、危機に直面している言語「アイヌ語・八丈方言・奄美方言・国頭方言・沖縄方言・宮古方言・八重山方言・与那国方言・被災地方言」について

考える機会となりました。



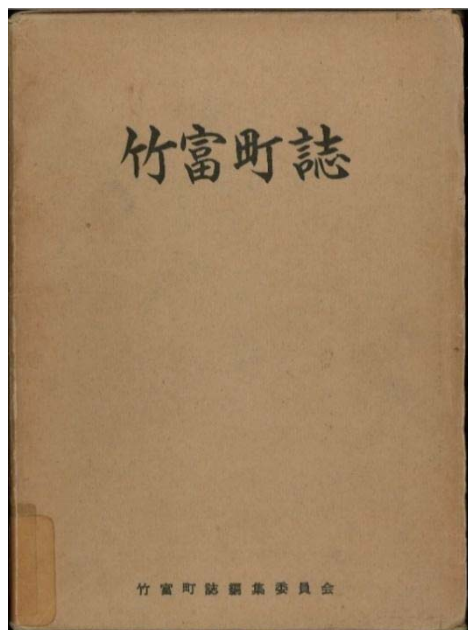
「方言サミット」での竹富町の展示ブース。町の観光パンフレットやしおり、うちわなど、観光協会からも提供いただき大好評。

さて、私たち竹富町担当者は、与えられたブース展示の内容についてどのようにした方が良いか、過去の取り組みがどのようなものだったのか、かねてより方言サミットに参加している与那国町の与那原マリサ氏に問い合わせ、発表やブース展示の写真を拝見させていただいたり、お話を伺ったりしながら準備を進めていきました。

方言に関しては、これまで多くの先輩諸氏により編纂された、『西表方言集』（2002）、

『竹富方言辞典』（2011年）、『鳩間方言辞典』（2020年）、『波照間方言』（2023年）、『黒島事典』（2024年）、竹富島の「テードゥンムニ大会」の原稿集、また実践的な活動や報告に関しては写真や報告書など、多くの現物展示を準備することができました。一方で、パネル掲示できるものが少なく、工夫の必要があると感じていました。

そんな時、『竹富町誌』（竹富町役場、1974年）の中に、方言の表が掲載されていたことを思い出し、使えるのではないかと相談。時間的に余裕がなかったこともありましたが、掲載されたままの方言を、そのまま表にして掲示しようということになりました。この時に作成した表が、今回配布したポスターの制作につながりました。



### ■『竹富町誌』について

各島の方言比較表が掲載されている『竹富町誌』は、復帰から2年が経過した激動の1974年（昭和49）に竹富町役場から発刊されました。

登野城ルリ子氏は「この町誌は二つの側面、行政の面からの要覧的側面と、民俗誌的側面を併せ持ち、その結果はからずも〈詩の島・民芸の島〉竹富と云われる竹富町のユニークさが生き々と描き出されており興味深いものがある。」（『八重山文化』〈第二号〉東京・八重山文化研究会、1974年）と記しています。

また、三木健氏は「行政当局による初の町誌」との見出しで、「これまで町全体の総合的な観点からする町誌編纂が期待された。一九七四年に初の町誌が世に出されたことはそういう意味でも意義があった」（『八重山を読むー島々の本の事典ー』〈シリーズ・八重山に立つI, 2〉南山舎、2000年）と紹介しています。さらに三木氏は「島々は文字通りそれらが島であることによって、そこ（各章や年表）にあらわれた事象も決して一様であるはずはない。〈中略〉各島の島民性、方言の差異、民謡のあらわれかたなどがあげられるが、このように島々を相互比較の上で見ると点でも本書は便利である。」と述べています。（※登野城、三木両氏による書評は、『竹富町史だより合冊1』の巻末附録「竹富町史刊行物書評集」にも収録されています。）

『竹富町誌』の「編集後記」には、1971年（昭和46）12月12日初の竹富町誌編集会議が開催され、翌年の新春から資料蒐集活動がスタートし、約1年半かけて原稿を集め、整理編集して仕上げることができたとあります。これほどまで多岐にわたる情報を蒐集、整理、編集、発刊された編集委員の努力と情熱に感銘を受けます。

現在、私たちは我が町や我が島を紹介するとき、概要、統計、町勢、行政機構、沿革史などの情報を容易に検索したり、アクセスしたりすることができますが、『竹富町誌』を開くにつけ、これらの情報の一つ一つがその時々丁寧かつ確実に記録されてきたからだというように改めて気付かされます。そして、約50年前に発刊された『竹富町誌』の中から、このように比較された方言の表を活用して、新しいものをつくり出すことの面白みを感じることができました。

## ■ポスター制作について

さて、『竹富町誌』「第三節 島々の方言」から、各島々の方言の主な単語の表を利用し、島の子どもたちに方言に興味を持ってもらいたい、おもしろそうだと思うてもらいたいとの思いから、竹富島にあるデザインワーク Yell（市瀬健治代表）の協力のもと、編集を行い素敵なポスターに仕上げることができました。

元々の表は縦書き左綴じの様式で、竹富、黒島、新城、小浜、古見、波照間、西表、鳩間の8地域の言語、祖父、祖母、父、母など29の単語が掲載されています。よく似た方言もあれば、全く違う方言もあり、比較表で見るとそのバラエティーに富んだ言葉の数々に興味をそそられます。

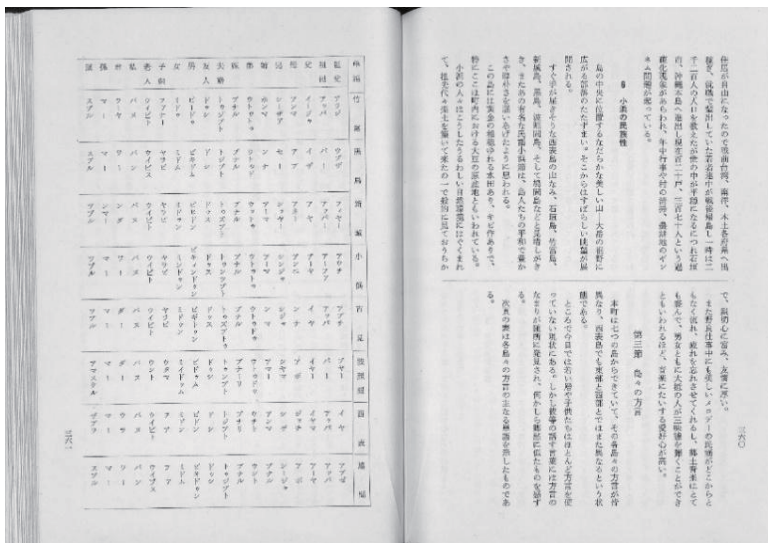
また、竹富町史編集事業では島ごとにまとめたシリーズを『竹富町史 島じま編』（以下『島じま編』）と表記していることから、表題を「竹富町の島じまのコトバ」にしました。イラストを入れ、文字を横書きに変更、「現在はこのように言わない」などがあっても、そのまま載せるようにしました。また、「西表」と「古見」は西表島にある2つの古い集落のコトバであることから、続けて表記、カラー表記に関しても『島じま編』の島ごとの基本色を基調とするなど、1974年（昭和49）当時の表記を基本にしつつ、現在の竹富町史の要素を盛り込んで構成してもらいました。

制作の過程で、「きびは、サトウキビもあるけど、モチキビもあるよ。」「芋は、サツマイモもあるけどジャガイモもあるよ。」などの声も聞かれましたが、そこは素敵なイラストと「きびはさとうきびのこと」という最小限の注意書きに留めることにしました。

後日、庁舎内でポスターを掲示したところ、職員の反応も良く、ポスターの威力に驚かされました。

## ■「第三節 島々の方言」『竹富町誌』(360～362頁)

「第三節 島々の方言」の本文には、次のようにあります。



### 第三節 島々の方言

本町は七つの島からできていて、その各島々の方言が皆異なり、西表島でも東部と西部とではまた異なるという状態である。

ところで今日では若い層や子供たちはほとんど方言を使っていない現状にある。しかし彼等の話す言葉には方言のなまりが随所に発見され、何かしら郷愁に似たものを感じる。

次頁の表は各島々の方言の主な単語を示したものである。

約50年前の島じまの様子がわかると同時に、資料が乏しいなかで作り上げてきた苦勞が感じられる一文だと思います。発刊から50年後の今日、シマのコトバは過渡期を迎え、「危機的な状況にある言語・方言」と言われています。消滅の危機に立たされながらも、次の世代に受け継いで行こうと試行錯誤しています。

『竹富町誌』発刊当時の瀬戸弘町長は、町誌編さんにあたって「常日頃の記録ということが、大事になってくる。日常些細な出来事でも、記録として残すことは、後になってくると、実に有意義なものとして感じるものがある。又、これらの一寸した記録が、後の人生に大きく役立つことがある。」また「後世に正確な記録を残すことは、当然の義務であり、大きな課題」と述べています。(瀬戸弘『竹富町の島々と共に』1982年)

過去の事柄を学び直し、そこから新たな知識や道理を見出すことを温故知新と言いますが、「竹富町の歴史は、教科書には載っていない」からこそ今を生きる者の務めとして、後の人たちに役立つ記録を残していけたらと思います。

方言表については、今後は単語の数を増やししながら新たな表の作成に取り組んでいくことを目標にしていますが、できなかつたときは、後の人たちに引き継いでもらえるように、記録しておくことにします。  
(町史編集係・米盛 恭子)

鶏 猫 犬 き 芋 米 畑 田 夜 屋 朝 び	頭 孫 君 私 老 子 女 男 友 夫 妹 弟 姉 兄 母 父 祖 祖 母 父	単語
トウイ マヤ イン シンサ ン マイ ハテイ タ ユル ピロ ン ヒトムテ	スブル マ ワ バ ウイ フ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	竹 富
トウル マヤ イン シンザ ン マイ パタキ タ ユナイ ビス マ シトムテ	スブル マ ワ バ ウイ ヤ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	黒 島
トウル マヤ イン キザ ン マス パ タ ユル ビス メ ストウン テイ	ツブル マ ワ バ ウイ ヤ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	新 城
トウル マヤ イン シン ア マ パ タ ユル ビス マ ストウン デ	ツブル マ ワ バ ウイ ヤ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	小 浜
トウル マヤ イン シン ア マ パ タ ユル ビス マ ストウン デ	ツブル マ ワ バ ウイ ヤ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	古 見
ゴツカ マヤ イン アマ ア メ ビ タ ユル ビス マリ ストウン テ	アマ マ ダ バ ウ ウ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	波 照 間
グ マヤ イン キ ウ マ パ タ ユル ピ サン シト ン タ	ザ マ ウ バ ウ フ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	西 表
トウル マヤ イン シン ウ マ パ タ ユル ビス マ シトム テ	スブル マ ワ バ ウ フ ミ ビ ド ト ブ ウ ホ シ ア ン イ ア ア ア	鳩 間

竹富町役場『竹富町誌』1974年、361～362頁より

## 竹富町の島じまのことば

	祖父	祖母	父	母	兄	姉	弟	妹	夫婦	友人	男	女	子供	老人	私	君	孫	頭	朝	昼	夜	田	畑	米	芋	きび※1	犬	猫	鶏
竹富	アウジ	アツバ	イージャ	アンマ	シーザア	ホンマ	ウトウトウ	ブナル	トゥジブト	ドウシ	ビードウ	ミドム	ファナー	ウイピト	バナ	ワーヤ	マー	スブル	ヒトムテ	ピローン	ユル	タ	ハテイ	マイ	ン	シンサ	イン	マヤ	トウイ
黒島	ウブザ	パー	イザ	アブ	セー	ンナ	ウトウド	ブナル	トジブト	ドシ	ビキドム	ミドム	ヤラビ	ウイピス	バン	ワー	マー	スブル	シトムテ	ビスマ	ユナイ	タ	パタキ	マイ	ウン	シンザ	イン	マヤ	トウル
新城	フイヤー	アツパー	アヤ	アネー	シツヤー	アーマ	ウツトウ	ブナル	トウスブト	ドウス	ビヒドン	ミドム	ヤラビ	ウイピト	バナ	ンダ	ンマー	ツブル	ストウンテイ	ビスメ	ユール	タ	パタイ	マスウ	ン	キザ	イン	マユ	トウル
小浜	アウチ	アーファ	アーヤ	アンニ	シンジャ	アーマ	ウトウトウ	ブナル	トウンツブト	ドウス	ビキインドウン	ミンドウン	ヤラビ	ウイピト	バナ	ワー	マー	ツブル	ストウンテイ	ビスマ	ユール	タ	パタキ	マイ	アコン	シンジャ	イヌ	マヤ	トウル
古見	アブチ	アツバ	イヤ	ンナ	シジャ	ンマ	ウトウドウ	ブナル	トウスブトウ	ドウス	ビギトウン	ミドム	ヤラビ	ウイピト	バナ	ダー	マー	ツブル	ストウムデ	ビスマ	ユル	タ	パタギ	マイ	アツコン	シンザ	イヌ	マヤ	トウル
波照間	ブヤー	パー	イヤ	アポ	シヤマ	アマ	ウトウドウ	ブナーリ	トウンブト	ドウシ	ビドウム	ミドウム	ウタマ	ウシト	バナ	ダー	マー	アマスクール	ストウムテ	ビスマリ	ユル	タナ	パイテー	メー	アガン	アマシイナ	イン	マユ	ゴツカ
西表	イヤ	アツバ	イヤマ	ジツチ	シザ	アンマ	ウチト	ブナリ	トジブト	ドシ	ピドン	ミドン	ファ	ウイピト	バナ	ウラ	マー	ザブラ	シトインタ	ピサン	ユル	タ	パテ	マイ	ウム	キツツア	イヌ	マヤ	ググ
鳩間	アブゼ	アツバ	アーヤ	アポ	シージャ	ブナル	ウシト	ブナル	トゥジブト	ドウシ	ビキドウン	ミドム	ファ	ウイプス	バン	ワー	マー	スブル	シトムテ	ビスマ	ユール	タ	パタキ	マイ	ウン	シンザ	イン	マヤ	トウル

作成:竹富町教育委員会(2025) 転載:竹富町史編集委員会編『竹富町誌』1974年(昭和49)

※1「きび」は「さとうきび」のこと

「令和7年度危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会」で掲示した「竹富町の島じまのことば」の表。『竹富町誌』からの転載とし、調査当時(1974年)の表記や発音を掲載することにした。

「品取狂言」は、西表祖納の笑し狂言の一つで、生年祝いやお正月、その他の祝宴の席などで余興として演じられます。本筋は、祝宴の座に供される料理に用いる材料を調達する場面（品取り）が演じられますが、祝いの主題によって毎回、台詞や演出に工夫が凝らされます。

ここに収録する台本は、「令和7年度 危機的な状況にある言語・方言サミット」（10月25日、石垣市民会館大ホール）で演じられたものです。祖納屋のお婆さんの97歳のマインダナー祝における品取りという設定で、「バラビ倒し」「魚巻ひ」「キゾ搔き」「カマイ捕り」「うなぎ掴み」の場面が演じられます。

御主前は村人を呼び集め、祖納屋のお婆さんのマインダナー祝に供される料理の材料をとってくるように指示し、村人は分担された品々を山や海から調達します。

それぞれのユーモラスな演技に、会場から大きな喝采が湧きあがりました。

当日の配役、地謡は次のとおり。

**出演者** 御主前●那良伊隼人

バラビ倒し●古見将司、大城千英

魚巻ひ●星光、屋正美、隅田賢

キゾ搔き●星しず、荒木凜子、星洗人、古見茉莉

山猪捕り●荒木和友、金城孝、古見天（カマイ役）

鰻掴み●東浜正、松山忠明、崎原朝光、上亀直人（オー二役）

**地 謡** 三線●曾根田真、下地周平

太鼓●黒島みほ

拍子木●荒木みさ

笛●大城茂智

御主前 ハイッハイッ シサリ シサリ シサレー。

西表ヌー 山ヌ後ラ トウビィ インディタル、成屋ヌ子ユー。

バヌメ祖納村ラ来ヤンユー。

明日メ 我島シ

祖納屋ヌ アッパーヌ 九十七歳ヌ マインダナー祝ヤリキ、

ミナラ 山ディヤー 川ディヤー 海ッティ ンギリ、

ムールバーシ 品取りスニュー。

トウトウ、カシェーブラルン。

パイサ ンゴチェ。

（はいはい、申します申し上げます）

（西表山の後から飛び出でたる、成屋の子です。）

（私は祖納村から来ましたよ）

（明日は我らの島で）

（祖納屋のお婆さんの97歳のマインダナー祝だから）

（今から山やら川やら海へ出て）

（私達皆で品取りをしますよ）

（よしよし、こうしてはいられない）

（早く出よう）



## 〔バラピ倒し〕

将 志 トウトウ、カイサル バラピメ ダンドウ アルッカヤアー。  
千 英 アットウ、アットウ。  
ヘエー、ラーサル バラピ アットウヨ。  
将 志 モーヒラ、ピトゥメ ヤマナナ ペーリッティ  
ヤマナヌキー ヒダリルバショ、  
願イス ナーレヤリキ、  
カシ願イ シサリルンユー。

〈ムニカザリ〉 ウートードウ。  
アツアヌ ヨイスタミナ パーミー パキシトリーヨ。  
カシューシサリ。

《歌》 あんだぎ清らさるヤマワラビ 枝持ちぬ清らさ  
ミドツリさしすい ハンジヨ  
緑 差し添い 繁盛すっさみ  
ウヤ バヌ シマ  
親をはじめ我までいん 島ぬあるまでいん  
なが フウヤガナシ  
長らくみしより 我親加那志  
ウニゲー  
御願いだやびる

将 志 トーウ、コビュー アッカラ ヨイサリル。  
バヌ オイダリメ オービユー。

## 〔魚巻ひ〕

光 トウトウ、パンキヤー ミナラ イユマヒスンドー。  
クワーヤッカラ オービヌイユ トウリルドウラー!!  
全 員 おおー!!  
光 トウ、ヒヤー。パイサ イユ ミチキリヨ。  
正 美 ウレウレウレ、イユ!!  
光 マチヨ、ミヤー クンチャン マチ。 トウ、ミナ!  
光 フェーフーフーフー、ヌードウ シブリヤー?  
ピトゥムトゥシ マタ アンマヒ!  
イユヌウギ ミリヨ、イユ。  
正 美 タンディ、タンディ。  
光 トウミナ、 マヒ!  
光 トウ、ウレー ボーダイユ。 ウレー シチイユ。  
正 美 マイサル アカジンドー!!  
光 トウ、コビュー アッカラ ヨイサリル。

《歌》 あねるイラブチャさぎどう 大波荒波逆走りてい  
インヌシク ハンジヨ  
海ぬ底とってい 繁盛すっさみ  
ウヤ バヌ シマ  
親をはじめ我までいん 島ぬあるまでいん

(よしよし、美しいバラピは何処に有るかねえ)  
(あるある。)  
(ほう、素晴らしいバラピ有るよ)  
(昔から、人は山に入って)  
(山の木を頂く時〈場合〉は)  
(祈願する習わしだから、)  
(このような祈願をいたします)



(恐れ多くも)  
(明日のお祝いの為に、私の分を分けて下さい)  
(このように申し上げます)  
(あれだけ美しいヒカゲヘゴ 枝ぶりの美しいこと)  
(緑を差し添えて繁盛するように)  
(親をはじめに私までも 島のあるまでいつまでも)  
(長生きなさって下さい 我が親さまよ)  
(お願い申し上げます)

(よーし、こんなにもあればお祝いできる)  
(私の任務はおしまいですよ)

(よしよし、おれたち今から魚巻きするよー)  
(ここだったら沢山の魚獲れるだろう!!)  
(おう!!)

(よし、すぐ。早く魚見つけよー)  
(そこそこそこ、魚!!)  
(待てよーもう少し待て。よし今!)  
(あれあれあれ、何しているか?)  
(もう一度、網巻け。)  
(魚の動き見れよー、魚)  
(ごめん、ごめん)  
(よし今、巻け)



(よし、これはボーダ魚。これはシチ魚。)  
(大きなアカジン魚だよー!!)  
(よし、こんなにもあればお祝いできる)

(あのブダイ魚さえもが 大波や荒波にも逆走って)  
(海の底だとしても 繁盛するように)  
(親をはじめに私までも 島のあるまでいつまでも)

なが  
長らくみしより 我親加那志  
ウニダ  
御願いだやびる

(長生きなさせて下さい 我が親さまよ)  
(お願い申し上げます)

光 トウトウ、スーンピサヌキヤー ヤーッティカイリヤ。  
ハイ、カタミリンニ。  
正 美 シュイッシュイッ。

(はいはい、潮も引かない内に家に帰ろう。)  
(はい、担いでござん)  
(さあさあっ)

〔キゾ掻き〕

し ず ウリラ キゾ掻きスニュー。  
バシマヌ ファンキヤー パイサ クーヨー。  
トウ、マジ、会場ヌ ケーラッティ 自己紹介シーヨー。  
パイサ、パイサ イダシヨー。

(これからキゾ掻きするよ)  
(我島の子ども達、早く来いよー)  
(よし、まず、会場の皆さんへ自己紹介しなさいね)  
(早く、早く出しなさいよ)

凜 子 バヌメ荒木ヌ凜子ユー。

(私は荒木の凜子です)

洗 人 バヌメ星屋ぬ洗人ユー。

(私は星屋の洗人です)

茉 子 バヌメ古見ヌ茉子ユー。

(私は古見の茉子です)

し ず バー キゾ掻キシリキ  
ウサダン ファンキヤー キゾ アチミリヨー。

(私はキゾ掻きするから、)  
(あなた達子どもらはキゾ集めれよー)。

凜 子 キゾッティ ヌーリヤ?

(キゾって何か?)

洗 人 バー シサンヨー。

(おれは知らないよー)

茉 子 キゾッティ ヌーリヤ?

(キゾって何か?)

洗 人 バー シサンヨー。

(おれは知らないよー)

し ず ウリウリウリ、キゾ!!

(それぞれ、キゾ!!)

全 員 ウレー キゾ!!!

(これはキゾ!!!)

し ず トウトウ、パイサ アチミリヨー。  
トウトウ、キミッサイ キミッサイ。

(よしよしよし、早く集めろよー)  
(よしよし、素晴らしい素晴らしい)

コーベアッカラ タリスヨー。  
品取りヌ歌シ ヤーッティ カイリスヨー。

(これだけあれば足りるよ)  
(品取りの歌をして家に帰るよ)

全 員 オォー!!!

(おおー!!!)



《歌》プシキぬ下らぬキゾガマ 大湊から這い下りて  
海ぬ底落ち 大ギーラ成るまでい 繁盛すっさみ  
親はじめに私までも 島ぬあるまでいん  
長らくみしより 我親加那志  
御願いだやびる

(マングローブの下方のヒルギ貝 大湊から這い下りて)  
(海の底に落ちて 大きなシャコ貝になるまで 繁盛するように)  
(親をはじめに私までも 島のあるまでいつまでも)  
(長生きなさせて下さい 我が親さまよ)  
(お願い申し上げます)

し ず スーン ミチヌキヤー キゾカタミ  
ウリラ ヤーッティ カイルルベー。

(潮も満ちない内にキゾ担げ)  
(これから家に帰れるだろうね)

〔カマイ捕り〕

館 長 ミサリオルンネーラー。

(お元気でられますか?)

バヌメ祖納公民館ヌ館長ユー。  
チクラ山<sup>ヤン シク</sup>ぬ底マディナン  
カマイ トウリッティ キーシタスヌ、  
ムットウ ミヌサッスヌラー。  
トウ、バキサラムヌ ギバリオーリヨー。

琉球犬 ワンッ!!! (ナラン!!!)  
館長 トウ、マジ、パナミマーリセー ンギリヤ。  
青年 オウ。  
館長 イェッ、ウラメマイナリ。  
バヌマイナリ。  
イヌ、ウランマイナリ。  
琉球犬 ワンッ!! (アブナッサダル!!)  
館長 アァー、ミンサッスヌラー。  
青年 アイ、カマイミラルル! ウリ!  
館長 ンダー、ダンドウ プリリヤー!?  
青年 ウリ! ウラ シンタナドゥ ブットウ!!  
館長 グイヤー!! グシ! パイサ グサンナー!!  
琉球犬 ワンッ!!!  
館長 アァー、バータマシ トウビンギリヤン。  
ヘェーエ、ボ、ボボボボボボ、ポーリヤー!  
ボボボボボ、ポーリヤー!!  
館長 マイッサル カマイドゥラー。  
ヤアァー、コビエー アッカラ マタ  
ウブヨイ マーヨイ ナリスドー。

《歌》 あねるヤマシシさぎど<sup>ムカシフルギ</sup>う 昔古着<sup>むい かぶり</sup>ば生え被り  
島ぬあるまでい 繁盛すっさみ  
親<sup>ウヤ</sup>はじめ<sup>バヌ</sup>我<sup>シマ</sup>までいん 島ぬあるまでいん  
長<sup>なが</sup>らくみしより 我親<sup>ワウヤガナシ</sup>加那志  
御願<sup>ウニグー</sup>いだやびる

館長 ウラ グサリキドゥ ウラドゥ カタミ。  
ヘッ、パイサ カタミリッ。  
ホーミヤン ホーミヤン。  
パイサ カイラナツカラ ナランドー。トウトウ。

オーニチカミ  
(うなぎ掴み)

シザカタ ウラチカーラヌ ウフオーニ、ダナドゥ プリスツカヤー?  
長男 七<sup>ナナヒロ</sup>尋バレー アリシッティ、  
ミンチ アイスツカラ ピキソーラリ シーチキ スンディソウ。  
次男 ウレー ミヌサーキヤー マイサイラー。ミンサッスヌラー。

(私は祖納公民館の館長です)  
(チクラ山の奥底までも)  
(山猪を捕りに来てるけど)  
(ほんと恐ろしいなあ)  
(さあ、若者ががんばりなさいよ)  
(ワンッ!!! (できない!!!))  
(さあ、まず畏の見廻りをしに出よう)  
(はい。)  
(おいっ、お前は前になれ。)  
(私の前になれ。)  
(犬、お前も前になれ。)  
(ワンッ!! (危ないっ!!!))  
(あああ〜、恐ろしいねえ〜)  
(あれ、カマイ見える。ほら。)  
(どれ、何処にが居るか!?)  
(そこ! 貴方の後ろにが居る!!)  
(うわあー!! 殺せ! 早く殺さんかー!!)  
(ワンッ!!!) \* (がぶっと噛み付いて仕留める)  
(ああ〜、私の魂飛んで行ってしまった)  
(ほーう、ごごごごごご苦勞!  
(ごごごごごご苦勞さん!!)  
(大っきなカマイだなあー)  
(ひええー、こんなにあったらまた)  
(大祝真祝できるぞー)



(あの山猪さえもが 昔古着 (のような古毛) を生え着けて)  
(島のあるまで 繁盛するように)  
(親をはじめに私までも 島のあるまでいつまでも)  
(長生きなさって下さい 我が親さまよ)  
(お願い申し上げます)

(お前が殺したからお前が担げ)  
(へっ、早く担げ)  
(日が暮れる日が暮れる)  
(早く帰らないといけないよー。さあさあ)

(浦内川の大ウナギ、どこにおるのかねえ?)  
(七尋くらいあって、)  
(目が合ったら引きずられ沈められるってよ)  
(それは恐ろしいほど大きいね。恐ろしいなあ)

シザカタ ウリッ、 マーナ ヌッカー ブリドウル！  
ウフオーニ！ チカミ！

長男 ギンニ プリヤン！ トウ、チカミヤー。

シザカタ ミンサッスヌラ〜。

マイサルイシ、ザブラッティ ナンギリ！

長男・次男 アーシラー、シサロ！

全員 ヒヤマッタン…ハイッ！！

ウナギ アガヤー、ヌードウ シブリヤー！

マイマイラ カサマッサヌ！

カントッティ ンギリ！ ムットウ ナーランミヤー。

次男 シーザ、ヌーシ シャー!?

シザカタ マチオーリ。

ウチキッティ チカムツカラ ナランドウラー？

シタリ ニンガイシ、ウリラ チカミ シミリンニ。

シザカタ 浦内川ヌ主ヌ ウフオーニヌ前、

明日メ 大祝ヌ アルチケンナドウ、

ドウディツカラ マタ バイダッティ チカマエ サシミトリー。

ウラヌミー アールカカラ チカイシリキ ヒリオトリュー。

バーミーン バキシトーリリ 願ひシサリルンユー シサリ。

ウナギ アーシャツカラ ショーヌ ミヤン。

トウ、パイサ チカイシ。

ディー、ンゴー。 パイマリヨー。

シザカタ トウヒャー！ ベヌウムイ トウーリヤン。

トウ、パイサ カイリスド。

ウヌマイナ ヨイヌウタ カザリシ。

〔歌〕川底座りおる 大ウナギ 海の底までい 帰りとうてい  
又んおーりり 繁盛すつきみ  
親はじめい我までいん 島ぬあるまでいん  
長らくみしより 我親加那志  
御願いだやびる

〔終幕〕

御主前 シサリ シサリ シサレー。

トウトウトウ、ミナドウ品バムリキタス。

ケーラ パイサ アチマリヨー。

御主前 ダーダー、ウサダン、トゥリヌムヌ イダシミリ。

バラピ、キゾ…ウーヘー、オービヌイユ！

アイッ、マイサルカマイ！！

御主前 クリドウ…、ウラマタコーサヌバラピチキッタナー。

(ほら、あそこに何かいる！)

(大ウナギだ！掴め！)

(本当にいる。よし掴まえる)

(恐ろしいなあ)

(大きな石、頭へ投げれ！)

(そうだな、やろう！)

(一斉の、それっ!!)

(あーもう、何しているか！)

(前々から騒がしい！)

(あっちに行け！本当にならんねえ)

(兄貴、どうしようか!?)

(待ちなさい)

(むりやり捕まえるからできないだろう?)

(先に祈願して、それから捕まえてごらん)

(浦内川の主の大ウナギ様)

(明日は大祝があることから、)

(どうか私たちに捕まえさせて下さい)

(あなたの身、あるものすべてを使うからいただかせてください)

(私の分も分けてくださるよう、お願い申し上げます)

(そうであったら仕様がな)

(とう、早く案内しろ)

(さあ、行こう。 急げよー)

(やったー！ うちの想いが通じた)

(とう、早く帰るぞ)

(その前にお祝いの歌を飾れ)

(川底に座り佇む大ウナギ 海の底まで帰るとしても)

(再び来ていただくよう 繁盛するように)

(親をはじめに私までも 島のあるまでいつまでも)

(長生きなさって下さい 我が親さまよ)

(お願い申し上げます)

(申します申し上げます)

(さあさあさあ、今が品を盛るほど取って帰って来たよ)

(皆さん早く集まれよー)

(どれどれ、お前たち、取って来た物出してみれ)

(バラピ、キゾ、ウーヘー、いっぱい魚!)

(大きなカマイ!!)

(これは…、お前はまた硬いバラピを用意したのかー)



御主前 イーユ!!  
ホォー、コビエー アッカラムタ オービヌナマシ キサリスドー。  
御主前 ウレーキゾ搔き。タカッチャ アットゥペー?  
御主前 ハイトウ、カマイ!! 館長、ギバリオットアンナー!?  
館長 ハアーミヤー、バーカステンティカタミ  
パイナンギナランサーー!!  
御主前 トウトウトウ、オービヌ品バ トゥリキャン。  
ポーリヤー ポーリヤードー。  
オーベ チキッカラムミヤー、  
ムールシウブヨイマーヨイサリスドー。  
ウヌシマナ ヨイヌウタバ カザリシ。  
ハイ、シサロシサロ。ヤアツ、ハイ!!

《歌》<sup>キユヒ</sup>今日ぬ日ぬさにしゃ <sup>ヒ</sup>ゆかる日ぬいそしゃ  
<sup>とつむ うどろ</sup>共に踊てい <sup>うた あし</sup>唄い遊ば  
<sup>ウヤ</sup>親はじめ我までいん <sup>シマ</sup>島ぬあるまでいん  
<sup>なが</sup>長らくみしより我親加那志  
<sup>ウニゲー</sup>御願いだやびる

御主前 トウ、ウヌバシヨー 行事セー ムドゥリドー。  
ケーラ ナリオーリ、  
ケーラ ウリアシビ ニハイユー。  
バハ パナシメ オーベユー。

(魚!!)  
(ほおー、これだけあつたらまたいっぱい刺身が切れるよ)  
(この人はキゾ搔き。たくさんあつたんだなあ)  
(はいよし、カマイ!! 館長、がんばっておられたか!?)  
(はあーもう、俺が加勢して担ぎ、)  
(足が不自由でならんよー!!)  
(よしよしよし、いっぱいの品を取って来ている。)  
(ご苦労ご苦労さまだよ)  
(それだけ用意できたらもう、)  
(皆で大祝真祝されるよ)  
(この島に祝の歌を飾れ。)  
(はい、申し申そう。さあ、はい)

(今日の日の嬉しさよ ゆかる日の喜ばしさよ)  
(共に踊って 唄い遊ぼう)  
(親をはじめに私までも 島のあるまでいつまでも)  
(長生きなさって下さい 我が親さまよ)  
(お願い申し上げます)

(よし、この時は行事しに戻るよ)  
(皆さんおいでいただいて、)  
(皆さんそれと遊んでいただいて、ありがとう)  
(私たちの話はお終いです)

(祖納公民館提供)



## テードウムニ（竹富言葉）一口メモ

狩 俣 恵 一

- ① 竹富島でよく使われ、相手に決定的なダメージを与える言葉に「イーシ」があります。この「イーシ」は、「イーーン」と、力強く長く伸ばして言えば言うほど「これはまったく話にもならないくだらないことだ」という強い否定になり、相手に大きなダメージを与えます。それとは逆に、「イシ」と軽く言えば、「つまらない」程度の弱い否定になります。

この「イシ」は、古語のエセ（似非）で、「つまらない」「見苦しい」の意味でした。例えば、エセウタ（似非歌）は「つまらない歌」、エセモノ（似非者）は「軽薄な人」「くだらない人」の意味です。よって、竹富島の「イーシ」「イシ」は、古語のエセ（似非）と同じ語源であることがわかります。

- ② 竹富島の言葉には、音の強弱で敬意を示したり、相手を軽んじたりすることもあります。例えば、低く重々しく、イージャ（父）・アンマ（母）・アウジ（祖父）・アッパ（祖母）と発音すると、敬意を表することになりますが、やや高い音でイージャー・アンマー・アウジェー・アーパーと伸ばして言うと、相手を見下げた意味になります。同じく高い音で、タカシ・ヤスノブ・トモコ・カオルを、タカチャー・ヤスノバー・トモカー・カオラーと伸ばして言うと、相手を蔑んだ言い方になります。

上記①は音声の強弱で意味の強弱を示し、②は音声の高低で敬称と蔑称を示す言い方になります。ところが、次の③④は和語（漢語）を逆の意味に変え、すり替えた意味で使っています。

- ③ 竹富島のクンジョーンジルは、「怒る・怒っている」という意味ですが、共通語に訳すると「根性出る」です。共通語の「根性」は、「あいつはいい根性している」とか「根性のある男」などのように比較的よい意味で使われます。ところが、竹富島ではヤナクンジョー（嫌な根性）という言葉に代表されるように、クンジョー（根性）は、悪い意味で使うことが一般的です。それで、クンジョーンジル（根性出る）は、「怒る・怒っている」という意味に変わったと推測されます。

- ④ 竹富島の挨拶言葉は、クヤーナラーです。共通語に直訳しますと、「クヤミますよ」で、クヤミは「悔み」です。つまり、葬式の挨拶言葉の「お悔やみ申し上げます」の「悔み」が、日常の挨拶言葉に変化したようです。クヤーナラーのクヤミは「悔み」の意ではなく「頭を下げます」「ご挨拶します」という意味で使っているからです。変化した理由は、「挨拶言葉は改まった場や大勢の前で生まれ、日常語へと展開した」からだろうと推察しています。

ちなみに、「おはようございます」は〈ヒトウーティ（朝）、クヤーナラー〉で、「こんにちは」は〈ピロー（昼）、クヤーナラー〉、「こんばんは」は〈ユネン（夜）、クヤーナラー〉であるという方もおられますが、これはあり得ない俗説です。祭りや集会の場などの改まった場や大勢の前で、〈ヒトウーティ、クヤーナラー〉〈ピロー、クヤーナラー〉〈ユネン、クヤーナラー〉などの挨拶言葉を使うことはないからです。竹富島では、朝・昼・夜関係なく、改まった場でも「クヤーナラー」で通しているからです。

# 唱歌《ふるさと》をテードゥムニで歌おう！

誰もが知ってる唱歌や歌謡曲など、懐かしのメロディーをシمامニ（島言葉）で歌う試みを、YouTubeをはじめ、さまざまなメディアで知ることができます。例えば、NHK 沖縄の番組「うちなーであそぼ」のなかで、沖縄出身の歌手たちが童謡や唱歌を沖縄方言に訳して歌うのも同様の趣向です。同じ歌曲であっても地域や訳者によって多数のバリエーションが見受けられ、まったく飽きることがありません。

昨年（2025年）、八重山方言の保存継承を实践する「スمامニ広め隊」（代表・大濱剛）の主催する「スمامニ替え歌コンサート」（9月27日、於・大浜公民館）では、《大浜小学校校歌》のシمامニ版や、中島みゆきの《糸》、BEGINの《島人の宝》などを八重山方言に訳してうたい、大盛況だったようです（『八重山毎日新聞』2025年9月28日付、仲間清隆「不連続線」『八重山毎日新聞』10月12日付参照）。このとき歌詞の共通語がすべて八重山語に置換することができたのか、またどのように表現されたのか、たいへん気になるところです。

かつて竹富島では、テードゥムニ（竹富言葉）に翻訳した流行歌の替え歌がたくさん作られたようです。大山正夫氏の著書『続・昭和の竹富—誰か故郷を想わざる—』（1991年）には、味わい深いテードゥムニに翻訳された《ふるさと》《船頭小唄》《赤城の子守唄》《二人は若い》《満州娘》《旅の夜風》《誰か故郷を想わざる》《リングの唄》《啼くな小鳩》《お座敷小唄》の10曲が、「竹富の愛唱歌」として収録されています（事例の一つとして、文末に《リングの唄》の原曲とテードゥムニ版を並べておきました）。

ところで、《ふるさと》は1914年（大正3）に、作詞・高野辰之、作曲・岡野貞一によって生み出された唱歌です。《ふるさと》を聞かたびに、誰しも故郷へのノスタルジアがかきたてられることでしょう。「第46回テードゥムニ大会」（2025年）では、《ふるさと》のテードゥムニ版をみんなで斉唱しましたが、その歌詞と「竹富の愛唱歌」収録の歌詞には異同がみられました（石垣久雄「第46回テードゥムニ大会」本号46頁参照）。

これらを比較するため、次に作表してみました。

	①原曲	②大山正夫「竹富の愛唱歌」 『続・昭和の竹富』収録歌詞(1991年)	③第46回テードゥムニ大会 (2025年)
1番	菟追いし かの山 小鮎釣りし かの川 夢は今もめぐりて 忘れがたき ふるさと	うしゃう 兎ぎ追いたるあぬむい いじょう 小漁つるたる タッシぬピー いみ なま 夢や今ん みらーりってい ばつ 忘きらるぬ ばやテードゥン	びーざ そか むい 山羊ぬ草苅りし あぬ丘 う スルゆ追いし コンドイぬ浜 いみ まな 夢や今ん みぐりてい うむ だ テードゥンしま 思い出し 竹富 島
2番	如何にいます父母 つつがなしや友垣 に風につけても 思い出ずる ふるさと	のしど 如何おーるかや ばな親 がんじゅし ぶんかや ばなどうし 雨の、風の日、のーんていねなてい うむ 思いんざさりる ばやテードゥン	のーしどう おりる ば うや 我な親 がんじゅう ぶんかや ば どうし 我な友達 あみ かじ 雨ん風ん すびていん うむ ばつ ば しま いじり忘きららん 我や島
3番	志を果たして いつの日にか帰らん 山はあおき ふるさと 水は清き ふるさと	うむ 思たくとうゆかなしてい いち かい 何時ぬ日にか帰りおーり 島や昔とうかわらぬ なさ かわ 情きん変らぬ ばやテードゥン	うむ くとう かな 思た事ん 叶してい また かい 又んいちか 帰りおり しま かわ ば テードゥン 島や変らん 我や竹富 なさ かわ テードゥンしま 情きん変らん 竹富 島

上の事例を挙げるまでもなく、翻訳者によって描きだされる世界が異なってくるのも理解できます。①原曲の1番の歌詞をみると、山・川のない隆起サンゴ礁の平坦な島では、「あの山」は「あぬ丘<sup>むい</sup>」で、「かの川」は②「タッシぬピー」、③「コンドイぬ浜」になっています。

ちなみに「タッシぬピー」は、『竹富方言辞典』には「タッシピー」（固有名詞）で立項され、「高干瀬。竹富島西方の海にある干瀬の名。タッシはタカヒセ（高干瀬）の変化。ピーは干瀬」と説明され、例文に「キューヤ タッシピーヌ マーイドウ、イシュ シナ ハリツタラ（今日は高干瀬の辺りに、潮干狩りに行っていたね）」とあります。

また、3番の①「志を果たして」が、②「思たくとうゆかなしてい」、③「思た事ん<sup>うむ</sup> 叶<sup>くとう</sup>してい<sup>かな</sup>」であるのも、竹富島の古謡にならった伝統的な表現を援用していることが分かります。

このように翻訳は、訳者の素養も問われるものです。原曲のイメージを大切にしつつ、想像の翼を広げることによって、原曲以上に共感を呼ぶ翻訳ができれば、それは一つの文芸作品ともいえるでしょう。また、翻訳の多様性を思うと、複数の訳を比べてみるのも一興です。

ところで以前、古堅節氏（1926生まれ）に唱歌《赤とんぼ》のテードゥンム二版をリクエストしたことがあります。冒頭の「夕焼け小焼けの赤とんぼ」をどのように訳すのか、少し意地悪なお願いでしたが、節氏は「赤<sup>ていん</sup>さる<sup>あか</sup>天ぬ赤あーけーじ」と豊かな声量で歌われました。詩人のような古堅節氏の感性に、竹富島の夕景が目に浮かび感動しました。このように翻訳は単なる逐語訳だけでなく、自由な発想でもって取り組むことも考えたいものです。

言語学者・かりまたしげひさ氏は、誰もが知る歌曲の島言葉への翻訳に、カラオケを活用することを一手段として推奨しています。原曲を下敷きにしつつ、島言葉に翻訳していく作業は、言語継承の観点からも効果的であるとのこと。同時に、一芸としても立派に成立することも強調されていました（方言サミットのプレ・イベントでの講演）。いろいろな歌の翻訳を楽しみながら取り組んでみてはいかがでしょうか。

（飯田泰彦）

## 〈資料〉《リンゴの唄》（作詞／サトーハチロー、作曲／万城目正）

\*左に原曲の歌詞、右にテードゥンム二訳（『竹富の愛唱歌』収録）を並べました。訳は()で括りました。

\*原曲は4番までありますが、テードゥンム二訳のついた1番、3番のみ抽出しました。

赤いリンゴに くちびるよせて	(赤さるリンゴに <sup>ふち</sup> 口ぬすばゆしいてい)
だまってみている 青い空	(だまりってい見どうすんが おおいるていん)
リンゴはなんにも いわないけれど	(リンゴや何ん <sup>のう</sup> あんざんすがどう)
リンゴの気持ちは よくわかる	(リンゴぬ肝心や、ひごさら知っどうるちょう)
リンゴ可愛いや 可愛いやリンゴ	(リンゴかぬしゃいや かぬしゃるリンゴ)
朝のあいさつ 夕べの別れ	(しとうむていぬあいさつ <sup>ゆ</sup> 夕ねんやばーりてい)
いとしいリンゴに ささやけば	(かぬしーやるリンゴに 相談しいりーば)
言葉は出さずに 小くびをまげて	(言葉んあんざな <sup>む</sup> ってい <sup>に</sup> ぬぶいゆまぎてい)
あすも又ねと 夢見がお	(明日んならぬていどう <sup>あちや</sup> 夢 <sup>いみ</sup> どみしる)
リンゴ可愛いや 可愛いやリンゴ	(リンゴかぬしゃいや かぬしゃるリンゴ)

〈資料1〉



第4回シマムニ発表会  
は、こちらのQRコード  
からご覧いただけます。

## 第4回 竹富町シマムニ発表会プログラム

日時：令和7年6月21日（土）

午前10時～午前12時

会場：波照間島農村集落センター

司会：仲底善章

『シマムニ バスシャ チャ シマ バシイルン  
シマ バシィチャ ウヤ バシイルン』

（島言葉を忘れたら島を忘れ、島を忘れると親を忘れる）

- 1 開会のあいさつ ..... 竹富町教育委員会教育長 佐事安弘
- 2 町長あいさつ ..... 竹富町長 前泊正人
- 3 開催地区公民館長あいさつ ..... 波照間公民館長 浦仲浩一
- 4 発表
  - ① 東村のコンギ ..... 波照間公民館 東組
  - ② イユファイダーぬ話 ..... 祖納 那良伊隼人
  - ③ バーヌ ウムイル クモー村 ..... 小浜小学校5年 入羽一成
  - ④ 波中的一天 ベスマー 波中ヌ ガクヌ スカマー ..... 波照間中学校1年生
  - ⑤ 十二支のおはなし（ネズミとネコのおはなし） ..... 古見公民館
  - ⑥ ヤキヌ デンテン ファムレうた ..... 鳩間 田代 馨
  - ⑦ 西村のコンギ ..... 波照間公民館 西組
- 5 講評 ..... 大嶺高安
- 6 閉会のあいさつ ..... 竹富町シマムニ普及推進部会長 石垣長健

# イユファイダー<sup>パナシ</sup>ぬ話



祖納 那良伊 隼人

コイナラー。  
ケーラ ナリオーリトーリ シカトゥ ニハイ  
ディ ウマリルンユー。  
バヌメ スネ村ハラ キシタ 成屋ヌ隼人ユウ。  
ドーディン ミシティトーラナラー。  
キュウメ シمامニ大会ドウ アリキ ムルムル  
ヌ島ラ パティランヌ島ッティ  
オービヌピトゥヌ アチマリシッティ、バヌ  
ミン サニサシブンユー。  
ミナラ <sup>イユファイダー</sup>魚喰い田ヌ話バ シサリルンユウ シサ  
リ。

モーヒモーヒ、バハーシマナ イヒナヌナヒ  
ト ディ オールピトゥヌ オリダディン。  
ナーラヌター ウビル ナイバ パマザシナッス  
ラ ナイバトゥリ フニナヌシ  
ピーサルピシヌ シトゥンタ クイ シトゥッタ  
ディン。

ウヌバショー、ダンチコディユウ ググヌドウ  
イユバ フィ ブダヌヌ、  
スナヌナカッティ ピキソーラリ シーチキン  
ギダディソウ。  
イユメ シニ ググミン シニカキ ブダヌヌ、  
ウリバミッタル ナヘトメ イユン ググン カ  
チミトゥリ  
パモナーナ サーリムドゥリ ピーバモーシ グ  
グバ アチクマシ  
イユバ ヤーヒ ググッティ ファーシタディソ  
ウ。

こんにちは。  
皆さん、おなり下さいましてとてもありがた  
く思っています。  
私は祖納から来ました成屋の隼人です。  
どうぞお見知りおきください。  
今日は島の物言いの大会があるので、諸々の  
島々から波照間島へ  
多くの人が集まって、私も嬉しくしておりま  
す。  
今から<sup>イユファイダー</sup>魚喰い田(魚を食う田んぼ)の話を書  
き上げます。

昔々、我々の島にイヒナのナヘトとおっしゃ  
る人がおられました。  
仲良の田を植える苗を、浜崎(現白浜集落)  
の苗代から苗を取り舟に乗せ、  
冷える日の早朝にクイ(舟漕ぎ)していたと。

その時はダンチコ(ミサゴ)という鳥が魚を  
啜っていたけれど、  
海の中へ引き摺られ沈んで行ったそうです。

魚は死に鳥も死にかけていたけれど、  
それを見たナヘトは魚も鳥も掴み取り

浜に連れて戻り火を燃し鳥を暖めて

魚を焼き鳥へ食べさせたそうです。

アシブキヤ、ググメ イヌチヒチ トウピン  
ギダディソウ。

クヌググメ ウヌバショウヌブンギ バシキラ  
ルナキ

トウシドゥシヌ ナヘトヌ ナーラヌ ターウビ  
ルバショー

ヤーディン イユバ ミーハラ ヨーハラ チカ  
ミ

ターッティ ウッチィ ンギダディソウ。

ウリハラ マーファーヌ ダイマディ チヂキ  
ブダディソウ。

ウリハラ クヌターヌ ユビナーメ イユファイ  
ダー ディ

ヤーリブンディユー パナシユー シサリ。

バーパナシメ オービユー。

ニハイユー。



そうしていると、鳥は命を引き戻し飛び行っ  
たそうです。

この鳥はその時の恩義を忘れられることがで  
きず

年々のナヘトの仲良の田を植える時は

必ず魚を3匹4匹捕まえて

田んぼへ落として行ったそうです。

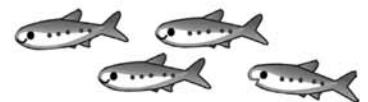
それから子々孫々の代まで続いていたそうで  
す。

それからこの田の呼び名は魚喰い田と

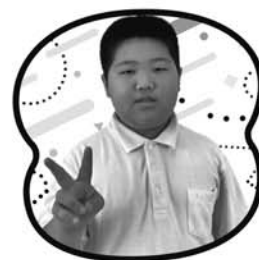
云われているという話です。

私の話はおしまいです。

ありがとう。



# バーヌ ウムイル クモー村



小浜 入羽一成

キューヤー ケーラ ワーリタポーリ ミー  
ハイユー

バーヤ クモムラカラキール 入羽一成ユー

小学校5年生ユー

ドーティン ミシュワリタポーナナー

バー ヤーニンズーヤー ウトゥトゥヌ フ  
タール ウルンユー

ピトゥラー コトスゥー 小学校1年生ユー

メー ピトゥラー 保育所ンゲー イキル  
ウトゥトゥ ウルユー

ブネー ブケーヤー メーマー トゥスヌ  
サガ アルユー

クモームラヌ 人口ヤー 約800人バカ  
ラー ワリルユー

学校生徒ヤー 57人ユー

学校ヌ 部活動ヤー 小学生ヤー バスケッ  
トボール

中学生ヤー ソフトテニス部 アルユー

バーヤ 部活動ヤー ハイウラノーノ

今日は 皆さん おいでくださり ありがと  
うございます

ぼくは 小浜から来ました 入羽一成です

小学校5年生です

どうぞ お見知りおきくださいね

ぼくの 家族は 妹が 2人 います

1人は 今年 小学1年生です

もう 1人は 保育所に 通う 妹が いま  
す

お母さん お父さんは 少し 年の 差が  
あります

小浜村の 人口は 約800人ばかり います

学校生徒は 57人です

学校の 部活動は 小学生は バスケット  
ボール

中学生は ソフトテニス部が あります

ぼくは 部活は やっていないけど

毎週土曜日ンガー イサキンガー イキー

空手ドゥ ナライウルユー

マタ コトウサー サツタル 6月1日ンガー

小浜小学校130周年ンゲー アタリウルユー

バーノ スマンガー ウフダキティヌ ヤマアルユー

ヤマヌ タケヤー 海バツ99メートル アルユー

ヤマヌ ウインガー ノーリミッター

タケトミチョウヌ ナーチヌ スマ ムールミラレルユー

ワーツクヌ カイハールバシヨ ハテルマズマン ミラリルユー

クモームランガー クモーブシティヌ 有名な歌 アルユー

クモーブシティヌ 歌ヤー ウフダキカラミラリル ケシキヌ 歌ユー

バーノ スマンガー ホテルヌ 2カ所 アルユー

ピトゥクヤー ハイムルブシユー

メー ピトゥクヤー ゴルフ場 アリヌ 星野リゾートユー

マタ ムランガー 居酒屋 ウッソー アルユー

毎週土曜日に 石垣に 行って

空手を習っています

また 今年は 去る 6月1日に

小浜小学校130周年に あたっています

ぼくの 島には 大たけという 山が あります

山の 高さは 海ばつ99メートル あります

山の てっぺんにのぼって見たら

竹富町の 七つの 島が 全部 見えます

天気の よいときには 波照間島も 見ることが出来ます

小浜島には 「小浜節」という 有名な 歌が あります

小浜節という 歌は 大たけから 見える 景色の 歌です

ぼくの 島には ホテルが 2カ所 あります

一つは 「はいむるぶし」です

一つは ゴルフ場の ある 星野リゾートです

また 村には 居酒屋が いくつか あります

ウヌ インナカンガー バー ブネー ブケン  
ヤー 居酒屋 経営ハイルユー

マッチャヌ ナーヤ 居酒屋アージュティ  
トゥ ハンズユー

ドーディン ピトゥケーラヤ ワーリタポー  
ナナー

マタ バーヌ オバサンヌ ツクルワーリル  
クァイムヌン スカイツウ マータルユー

マタ クモーヌ セイトウ工場ヌ スターン  
スカイトゥ マータルユー

ドウティン ピトゥケーラ ングワーリタ  
ポーリ

カンコウキャクン ウッソー ワールユー

マタ バノー スマヤー ムカスカラ 大事  
ナ キンザルヌ ウッソー アルユー

バーヤー キンザルワー 将来ヤー 守リイ  
クンディドゥ ウムイルユー

バガ クモームラヌ ウュストゥキヌマモリ  
ワーリル ウカンギユー

カンコウキャク ウッソー ワーリウロン  
ノー 「スマー スマー ナライ」ティ ス  
クトゥバヌ アーリワー ウヌクトゥバユ  
マモリクポッタリ リョコウ ヤーサネーサ  
ネーハイワーリティトゥ ウヌイルユ

バーヤ 高校マーキィ イキシティ

高校卒業ハ スタラー パタラクンディトゥ  
ウムイルユー

その なかには ぼくの お母さん お父さ  
んが 居酒屋を 経営する店もあります

お店の 名前は 居酒屋「アージュ」と 言  
います

どうぞ みなさん いらっしゃってください  
ね

また ぼくの おばさんが 作ってらっしゃ  
る 島料理は とっても おいしいです

また 小浜精糖工場で作られている 黒糖も  
とってもおいしいです

どうぞ 一度は 食べてみてください

観光客も たくさん いらっしゃいます

また ぼくの島は 昔から 大事な行事が  
たくさん あります

ぼくは 行事は 将来は 守っていこうと  
思っています

この島が あるのは 祖先の守ってきた お  
かげです

観光客が たくさん 来ますが「郷に入っ  
ては郷に従え」と 言葉があるように こ  
の言葉を守って 楽しく旅行をして 帰っ  
てほしいと 思います

ぼくは 高校まで 行って

高校卒業を したら 働らこうと 思ってい  
ます

ピトゥケーラヤー ヤマトウンガー イキー

2、3年 パタラキシシティ スマンゲ  
ムンドリ キーシティ

スマヌ 伝統芸能 マタ キンザルワー

ウツソー ナライシティ マモリイクンディ  
トゥ ウムイルユー

ウリカティ バーヌ スマヌ パヌサー ス  
マーシタポーナナー

キューヤ スカイトゥ ミーハイユー

マタ ハテルマピトゥヌ キンコー アラー  
シミタポッター イイクトゥタンガームカー  
シミ タポーナナー

ミーハイユー

1回は ヤマトウ 〈本土〉に 行き

2、3年 働いて 島に 戻って きて

島の 伝統芸能 また 行事を

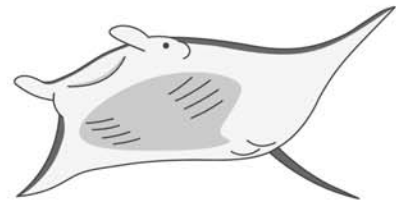
たくさん 習って 守っていこうと 思っ  
ています

そういうわけで ぼくの 島の 話を させ  
ていただきました

今日は たいへん ありがとうございます

また 波照間島の方の健康を 良いこと  
をたくさんありますよう 願っています

ありがとうございました



# 波中の一 日 (劇)

ベスマー 波中 ヌ ガクヌ スカマー

波照間中学校 1 年生

ナレーション……………波照間 和  
朝……………親盛 功暉・石野 結海士  
授業……………みんな  
休み時間……………西波照間 琉那  
午後 / 給食……………仲間 栄純  
放課後・日直……………勝見 夕希

波照間 和



親盛 功暉



仲間 栄純



石野 結海士



西波照間 琉那



勝見 夕希

【ナレーション】キイトウ ナリー、ミシャーリ  
オーリ

【結海士】シサレエ、バーナー、波照間中学  
ヌ、イッシ ヌ 結海士 ヌー、シサレー

【功暉】シサレエ、バーナー、波照間中学 ヌ、  
ウヤマシ ヌ 功暉 ヌー、シサレー

【夕希】シサレエ、バーヌヤ、波照間中学 ヌ、  
カツミ ヌ 夕希 ヌー、シサレー

【栄純】シサレエ、バーヤ、波照間中学 ヌ、ナ  
カマ ヌ 栄純 ヌー、シサレー

【琉那】シサレエ、バーナー、波照間中学 ヌ、  
ブスコイ ヌ 琉那 ヌー、シサレー

【和】シサレエ、バーヌヤ、波照間中学 ヌ、パ  
チメー ヌ 和 ヌー、シサレー

【ナレーション】クリガラ バイマー 波中生 ヌ、  
ガクヌ ヌーシー、コンギ シィ オス ガラ、  
ミリオリィ タボリィー

皆さん、こんにちは。

波照間中学校の 石野 結海士 です。

親盛 功暉 です。

勝見 夕希 です。

仲間 栄純 です。

西波照間 琉那 です。

波照間 和 です。

これから僕たちの波中生の一日を 劇で見せま  
す。

パチマリィ、パチマリィ

## シトムチィ

【ナレーション】ガク チィ、イング バァシュ、シトムチィ ヌ、コウトウ ヤスカ

【功暉/結海士】アーリィヌ 校長 シンシー、ミシャリ オー リィー

【ナレーション】シィトウムチィ、学ガースク チャラー、教室 トウ、イッパー ヌ ヤードゥ アガ フカ ヌ、フウチャ トリィ<sup>+</sup> シィ、ウリィ、ウワラー シタ、シトムチィ ヌ ユレー バスン

【タ希】クリガラ、シトムチィ ヌ ユレーパー、パチィ ミルン

【ナレーション】タンニンヌ、シンシー ヌ、ナーハーシィ トゥシィキグトウ、ナリーネーヌ、ハガイヤーベーピナ、ヨゴヘ マアドゥヌ、アトヤ、ムッサハル シカマー (授業) ヌ、パチ マルン

## ピトゥチィ、メヌ、シカマー 数学

【タ希】タチィ、ミン フウサアリィ、フチン フウサアリィ

【亮先生】ミン フウサアリィ、フチン フウサアリィ、スングウ、ヤミリィ

【タ希】タチィ、クリガラ、ピトゥチィ メヌ、スカマー、スーガラ、シカイトゥ シィ ヨー

【ナレーション】ピトゥチィ メヌ、シカマーパチマリィ

始まり 始まり～

## 朝

学校に向かう 朝の風景です。

「校長先生 おはようございます。」

朝は、学校に着いたら 教室と廊下の窓を開けて、外の清掃をします。それが終わると 朝の会です。

「これから 朝の会を 始めます。」

先生の長い連絡事項の報告が始まってしまいました。

休憩時間のあとは楽しい授業が始まります。

## 1 時間目 数学

姿勢、黙想。

黙想 やめ。

姿勢、これから 一校時目の授業を 始めます。

授業が始まりました。

【亮先生】キュウヌ シカマヤ、サンカクヌ パ  
カリィヌ、シカマ、ワ、スンドラー

【みんな】オー

【ナレーション】30フンヌ、アトヌー、コウ  
トゥヤル

【亮先生】シンシーヌ、パナシィ、バガリヤ  
ピトゥ？

【みんな】バイマーヤ、シンシヌ パナシィ、  
ムトゥバガラヌ、(ムールシィバルン)

【亮先生】ヌンドゥ、ケールムヌンター、バ  
ガラヌクットゥンド、アバー、ミザシィム  
ヌ

【タ希】クリシィ、ピトゥチィメヌ、シカ  
マー、ウワラスンドラ

【みんな】亮 シンシィー、ニハイユー

【ナレーション】ヌーヤン、クーヤン、アッタ  
スカー、ピトゥチィメヌ、シカマーヤ、  
ナーリヤン

### フタチィメヌ、シカマー 理科

【タ希】タチィ、ミンフツァリィ、フチン  
フツァリィ

【丈志先生】ミンフサリィ、フチンフサリィ、  
スクトゥラー、ヤミリィ

【タ希】タチィ、クリガラー、フタチィメヌ、  
シカマー、パチィミィルンドー

【丈志先生】キュウヌ、シカマーヤ、ユー、バ  
ズラス、クトゥ、ヤスカー

今日の授業では 三角測量の授業をしていきたく  
と思います。

はい！

30分後・・・

説明終わり、分かった人～？

分かんない (みんなでコケる)。

なんでわかんねーんだよ～ (がっかり)。

これで、1校時目の勉強を終わります。

ありがとうございました。

なんかんやあって 授業は無事終わりました。

### 2時間目 理科教科

姿勢、黙想。

黙想 やめ。

姿勢 これから二校時目の授業を始めます。

今日は魚の解剖をしていきたいと思います。

【功暉・栄純】ヤッサー

【丈志先生】ハガイヤー、カァチャマーヌー、  
マナガラ、ユーバズラ スンドー

【丈志先生】オー、エーヤチャラ、バジィ  
ラス、パーアンドゥ スルウムヌ、ミィリ  
ヨー、ユー、バズラ スンドオー

【みんな】アガイヤー！ ムウスカーハーヌー、  
ベマーヌ、ナルンクトゥカーヤー

【タ希】アイー、マハシャンカーヤー？  
丈志シンシー、ヘバー、ミシャナー

【丈志先生】マダマダ、ホークウトゥヤ、ナ  
ランドオー

【タ希】丈志シンシー、ヘバーミシャハク  
トゥナア、ヤッサー、トォ、タボライルン、

【みんな】ヌンドゥ、ケールクトンドゥ、アー  
カヤー

【ナレーション】ヤブスナリィターカーヤ、  
バガラヌスカー、フタチィメヌ、シカマー  
ヤ、ナーリャン

### ピスマー ムヌ、給食、ピスマリ

【ナレーション】ピスマー ムヌ、給食ヌ、  
マアドゥ、ナリィピリャン

【栄純】タチィ、キュウヌ、ピスマー ムヌ  
バー、スカスガラー、シキヨー  
ウシヌジィ、ゴヤーヌ アンダーヌ イ、  
ピィミィザン スー、サーターヌ ウンブシ  
パン  
キュウヌ、ピィミィザーヌ、スーヤ、バイ  
マーガクヌ、ピィミィザーンドゥ、ドウガラ

いえー————い。

はい 静かにしてください。 いまから魚の  
解剖します。

はい。では解剖していきます。

難しいなー！

おいしそう！ 食べていい？

こらこら、食べるなよ？

食べていいってことですね、やったー、いた  
だきます！

こらこらこら！

無事にかどうかわかりませんが、2時間目の  
授業も終わりました。

### 給食・午後

給食の時間になりました

姿勢、今日の献立を紹介します。

牛乳、ゴーヤチャーハン、ヤギ汁、黒糖蒸しパ  
ンです。

今日のヤギ汁は 学校のヤギが自ら食べられに  
来てくれました。

ハンター インダヤー キャン

【ナレーション】ムトゥ ムトゥ ヤ、学ヌ ピイ  
スマ ムヌ ナガ、ピイミザーヌ、スン ドウ、  
アルクトゥ ヤネヌ

【栄純】キイトゥ ナリィ、シィ アヘ オリィ！  
ピスマ ムヌ、マーハムン、タボラロー

【みんな】オー マハムン、タボラロー

【ナレーション】ムール、マハンター、ンゲー  
オーリャル ヨー シィ、ピスマー ムヌ ヌ、  
バスヤ、メーニチィ シマムニ シィ、シサ  
ラ、ピィリャン

【栄純】タチィ、マハヌ ピスマ ムヌ、ゴー  
ビィ タボラ ラ、ニハイユー

【みんな】ゴービィ、タボラ ラ、ニハイユー

## ピマリ

【ナレーション】ピシマリ ヌ ヨゴハー ヌ、  
トゥキン ナリピリャン

【琉那】ヨシャー、ピスマリ ヨゴヘ マァー  
ドゥ、ナリピリャン、アリィ、ヌー スー  
カヤー？ キイトゥナイ ヤ ヌーワル、  
シィー、ピリャン カーヤー

【夕希、栄純】ミザシィ ムン、ポー ヌ、メェー  
ブリ バー、シィビリャル

【栄純】オリャー

【琉那】アガー！

【栄純】爆笑

本当は、学校の給食にヤギ汁は出ません。

手を合わせてください。おいしい給食を「マー  
ハムン、タボラロー」。

マーハー ムン タボラロー いただきます！

みんなおいしく食べてくれたようです。給食  
の時は毎回、シマムニであいさつをしていま  
す。

姿勢、おいしい給食を「ゴービ タボラ タン」。

ゴービ タボラ タン ごちそうさまでした！

## 昼休み時間

昼休みが始まりました。

よーし、昼休みだ！でも何をしようかなあ？  
みんなは何をしているんだろう？

(派手に チャンバラをしている。)

おりゃ〜 (栄純がいやがるのに背中を叩く。)

痛い！

爆笑

【琉那】ハー、ヌンドゥ、ウリガラ、ゆうと  
ヤー、ヌウ シビリヤル？

【ゆうと】ネー エシバ、ゴチィ ボンボン、ナ  
ルン カー ヤー ター、シビリヤル  
(ゆうと倒れる)

【琉那】アギジャ ビョオー、ゆうと！ シケー  
ネンナー

【ゆうと】ミンドゥ ミングリィ、アガイヤー、  
スム ワッサーハヌ

【琉那】ウリガラ、モウヌウ フタリ ヤ、ヌウ、  
シビリヤ カー ヤー

【和・功暉】パソコンバ、ダビ ビリヤル

【和】アガイヤー、キーボード バー、ヤブリ  
シタ ネーヌ

【功暉】オー、ヤブスナ リヤンドゥー

【るな】アギジャビヨウ、ネー エシバー、  
ヌウー シィバル、ミシャー ハル

【ナレーション】ウヌママ、トゥキィ ナリィ、  
ピスマリィ ヨゴへ、ウワリ シター ネーヌ、  
ウリガラ ミィン ウチ スウー、カミナー、  
学ヌ シカマヤ、オワーリヤーン

### 放課後 (ヤギ)

【先輩】オー、ムルシィ、ピミザアーン ヌ  
フツァ、カルン ドラー、シカイトウ ギバ  
ルン ドオー

【みんな】オー

【栄純】クヌ、ナーン、ヌンドゥ、ケー アンザ

もう～なんだよ～！それで、ゆうとは何して  
るの？

(ぐるぐる回っている) どうやったら 目が 回  
らないのか 実験してるの～

わー！ゆうと！大丈夫！？

目がまわって気持ち悪い～

で、こっちの二人は何してるの？

パソコンでタイピングしてるの～

あ、キーボード 壊れた。

あ、終わったね。

もう 結局何したらいいんだよ～

そのまま時間がすぎ 昼休みが終わってしま  
いました。

そして あっという間に放課後です。

### 放課後

お～し みんなヤギ草行くぞ！頑張るぞ～

お ~~~~~

(紐をほどいてるが) なかなかほどけないな～

リ ビリヤ カーヤー、アガイヤー

【みんな】栄純、ミシャ ナー

【栄純】アガー

【先輩】ムルーシィ、プトギィ ミラ！

【みんな】オー

【みんな】ホー、ヤットシィ、プトウ ギャー  
ン

【ゆうと】（ヤギに引っ張られる）

【みんな】爆笑

【みんな】ミシャンナー

【みんな】キュウヌ ピィン ヤー、ヌーヤン  
クーヤン アーリィー、ケッター、ウガン  
チュ ミリ シタ ネーヌー

【先輩】バー、ウトウ トンダー、ケッター、  
ポッターン、サー

【みんな】オー、ニハイユー

## 終わり

【ナレーション】クリンドゥ、バイマー、ベ  
スマー学、波中生 ヌ、メガーメチ ヌ クト  
ヤシ  
クリシィ、バイマー ヌ、プスプー コンギ  
（劇）バー、ウワルン  
シカイトウ、 ミリオリィ、タボリィ、ニハ  
イユー

（ヤギが栄純に突進！）

栄純 大丈夫??

痛って～（泣）

みんなで ほどこう。

はい！

やっと ほどけた～

大丈夫か～

今日は 散々な 目にあったね～

みんな お疲れ～

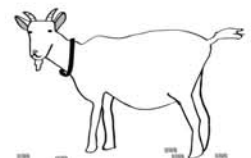
お疲れ様です！！（おじぎ）

## 終わり

これが僕たち波中生の毎日です。

これで、劇を終わります。

見ていただき、ありがとうございました。



# 十二支のおはなし

(ネズミとネコのおはなし)

古見公民館

〈方言指導〉 新盛基代

〈方言指導サポート〉 親盛ヒロ子

〈出演者〉

ね、後良川の神様……………奥原 洋  
うし……………今村陽月  
とら……………高松凜武  
う、ねこ……………奥原有紀子  
たつ……………山内まり  
み……………今村 愛  
うま……………山内里恵

ひつじ、前良川の神様……………亀井康一  
さる……………永露芳子  
とり……………奥原 悠  
いぬ、ナレーター……………高松由美  
い……………今村陽風  
古見岳の神様……………石原和義



新盛基代



親盛ヒロ子



奥原 洋



今村陽月



高松凜武



奥原有紀子



山内まり



今村 愛



山内里恵



亀井康一



永露芳子



奥原 悠



高松由美



今村陽風



石原和義

【由美】 ムカスムカス カーマムカス クン  
ムラヌ カンガンヤ イキムスユ アッ  
タラハーシ ブリダルユ  
ウマナー クンヌ カンヌマイヌ ワーリ  
スマナー ウッスハル イキムスヌ ブ  
ルケー 12ヌ マリユ キミラナ ナラ  
ヌディ パナスバ シイダルユ

【亀井】 マイラヌ カンヤ ウッスハル イ  
キムス ヤリバー キミルンディ デー  
ツナ ムンナー

【奥原】 アイディラ シーラヌ カンヤ  
バーヌ スマヌ イキムスユ ユビ ス

昔々その昔 古見村の神々は  
動物を大事にしていたそうです

そこで村の神々が集まって  
島には沢山の生き物があるので  
十二支をここで決めようと話し合いました。

前良の神さまはこんなに沢山の生き物の中  
から 決めるのは大変な事だと困りました

それでは 後良の神さまは  
私が島の動物を呼び集めると話しました。

リ クーケーヨー

【由美】 ヤスンガ ウッスハル イキムスユ  
ツマナー スリキーダラドゥ マスガ  
ヤーディ  
マイラヌカントゥ シーラヌカンヤ  
ザーファイ ナリダルユー

【石原】 ウマナー クンダギヌ カンヌマイ  
ヤ マイラー シーラヌ カンユ ユビ  
パナスバン  
マイヤル スマヤリキー ムールンガイ  
ヤ イイヤナラヌケー スマヌ マイヤ  
ルキーナー フダバ タティ ウキ  
クトゥスヌ トゥスヌユーナ クンヌマイ  
ヌ ウガンナー アツマリクーヨーディ  
ナリダル

【由美】 ウッスハル イキムスキャーヤ  
パイシャパイシャディ トゥバンパッタツ  
ユー

【ひづき】 スバナーウリダル ウスヌドゥ  
バーヌ | トゥナリシター

【りんむ】 トウラン イスギパツタルケ  
2 トウナリシタ

【ゆきこ】 ウサンギャヤ ピャンピヤントゥ  
ビキ 3 トウナリシタ

【まり】 タツヤ クムヌ ウイカラ ミリ  
ウリキ 4 トウナリシタ

【愛】 ミーヤ シュルシュルディ アブカラ  
ンディキ 5 トウナリシタ

【里穂】 シマヤ キーヌ ミーユ フキ  
キー 6 トウナリシタ

しかしこんな沢山の動物を  
何処に集めたら良いのか

前良の神さまと 後良の神さまは困りました

一番高い所の古見岳の神さまは前良の神さまと  
後良の神さまを呼んで話しました

大きな島だから皆に知らせるのは大変な事だ  
から 島中の大きな木に立札を立てて知らせ  
なさいと言われ 立札を立てました  
今年の大晦日に古見の前の  
御嶽に 集まる事と 決められました

近くに居た沢山の生き物たちは  
立札を見て一目散に走りだしました。

近くに居たうしは わたしが1番!

とらは 急いで行ったので2番

うさぎ ピャンピャンとんで来て3番

たつは 雲の上から見て 下りて来て4番目

みは によろによろと穴から出てきて5番目

うまは 木の隙間を抜けて来て6番目

【亀井】 ピツヤ フサバ ファイキ 7トウ  
ナリシタ

【永露】 サールヤ キーヌユダユ ユッサ  
ユッサ バタリキ 8トウナリシタ

【はる】 トウルヤ ユンナリバ ミーヌミ  
ラルヌケ ユーヌアキカラ トゥビキー  
9トウナリシタ！

【由美】 インナーヤ アマングマン カザバ  
カギ キーシティ 10トウナリシタ！

【ハルカゼ（愛）】 カマイヤー インナー  
ヌ マイナブリバー カマリドゥスーユ  
ンカラ インナーヌ クスナリ カマイ  
ヤ11トウ！

【ゆきこ】 12トウナ キーダルムヌヤ マ  
ヤーヌ キー イキムスヤ ムール ム  
ユリシタナー

【石原】 トウ トーウ  
ディラ 1トウ ナリダルムヌカラ ムー  
ル ナラビー

【奥原】 ムールヌ ナラビブルケー ウヤン  
チュヌ  
シュルシュルーディ ウスヌツヌナー  
フツカリブリ  
ウスヌマイナー ピャンディ トゥビウ  
リ バーヌ1トウディ ナリブルユー カ  
ンヌマイ

【石原】 ディラ ムール ナラビー

【各々】 ネ ウス トウラ ウタツ ミー ン  
マ ピツ サル トウル イン ビー

トート トート ムール キミラリシタ

ひつじは 草を食みながら7番目

さるは 木の枝を渡りながら8番目

とりは 夜になると目が見えなくなるので  
明るくなって飛んできて9番目

いぬは あちこちと匂いを嗅ぎながら来たの  
で 10番目

いのししは 犬の前にいると咬まれるからと  
犬の後ろで11番目

12番目に来たのがねこで、十二支は全部そ  
ろいました。

それでは  
一番から整列する様に神さまに告げられ

皆が並んでいる間にネズミは

チョロチョロ素早く牛の角につかまってて

牛の前にピョンと飛び降り  
自分が一番乗りだと神さまに話した

それでは

ね うし とら う たつ み  
うま ひつじ さる とり いぬ い

やったー やったー 決まった 決まった

キミマリシタ

【由美】 ウリシ マヤーヤ 13トウナ ナ  
リ 12シナ ピーラルナブリ  
マヤーヤ クンジョーフキ キーバタ  
ティ ウヤンチュユ ウイミングラシ  
ブルディヌ パナスユー  
アイ ナリダルディ アブジートウ  
アッパーナーカラ スキダル パナス  
ユー

ディユサリー

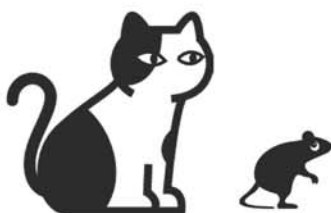
【由美】 ムカスヌユーヤ ズマヌヤーン マ  
ヤーバ ツカナイブツタル スンガ  
ミナヤ マヤーン ヤーニンジュヌ ピ  
トゥルナリ  
ウヤンチュヌ クトゥユ バスキ ミー  
ヌナー？  
ムカスヌ マヤートウ ミナヌマヤーヌ  
ツカナイヌ カーリブリ ッサヌナー  
ディ ウムイブルスンガ ヌーガヤー？

それで猫は13番目で十二支には入れません  
でした

猫は 怒って 毛を逆立て ネズミを嫌い追  
い回す様になったとの お話です  
こうなると じいさん ばあさん達から  
聞いた お話です

おしまい

昔は何処の家にも  
猫を飼ってネズミ退治をしていましたが  
現在では 猫はかわいいペットして家族の一  
員で  
ネズミの事など一切知らない猫の暮らしです  
よね  
昔の猫と現代の猫の違いを知っている方も  
数少なくなってきたと思いますが どうで  
しょうか？



# ヤキぬ デンテン ファムしうた

(マラリアの デンテン 子守歌)



鳩間 田代 馨

ショウワ 20 ネンぬ ナチ マリジマ イ  
ルンティ 「ウイバル」ン ウぬ イクサヤ  
ウワリオッタ

バーヌ 「ユウチ」グルぬ ウぬ ピンぬ  
「バナシ」ユ

「パトゥマ」ムニ シ イジバ シキ フォー  
リヨウ

ウぬ ピンヤ 「シキ」ぬ カイヤ 「ユール」  
ティ ウブイブル

「ウシト」ぬ 「ナキグイ」ぬ シカリ

ヤーぬ ナカーラ 「オカ」ぬ 「ウシト」ユ  
ダキティ ヤーヌ 「フカナ」ンジオッタ

「ウシト」ヤ 「ヤキ マラリア」ナ カカリ

「ウフニチ」トゥ 「ピーサ」シ 「オカ」ナ  
「ダカリ」ナキブタ

イメーマぬ 「トキ」ぬ パリ

「オカ」「オトゥ」ナ 「カール」「ガール」ダ  
カリ ナキ 「オトゥ」ナ 「ンカイ」

「デンテン、デンテン」ティ イジ  
ナキブル

昭和 20 年の 夏 生り島 西表島の  
上原も あの 戦争は 終わりました

私の 4 才ころの あの 日の はなしを

鳩間島の方言で はなしますので 聞いて下さ  
い

あの 日は 月の ととも きれいな 夜だったと  
おぼえています

弟の 泣き声が 聞こえ

家の中から 母が 弟を  
抱いて 家の 外へ 出てきた

弟は ヤキ マラリアに かかり

高熱と 寒さで 母に 抱かれて 泣いていた

少しの 時間が すぎて

母と 父に かわるがわる だかれ  
泣いて 父に向かって

デンテン、デンテンと 泣いて  
泣いている

「オトウ」ヤ ピージ 「ウシト」ナ 「サン  
シン」ユ 「ピキ」 「シカシ」 ベーティ

「サンシン」ぬ クトユ 「デンテン」ティ  
イジブタル

「オトウ」ヤ 「オカ」ぬ 「マール」ユ  
「ブドゥルン」ターナ 「ティ」ユ 「アギ」

「デンテン、デンテン」ティ イジ マーリ  
ブタ

「フタルぬウヤヤ」 「ウシト」ユ 「ダキテ」  
ヤーぬ 「ナカーナ」 ベーリオッタ

「イメーマ」ぬ 「トキ」ぬ 「パリ」

ヤーぬ ナカーラ 「フタルぬウヤ」ぬ  
「ナキグイ」ぬ 「シカリ」

「ぬーティヤー ぬーティヤー」ティ  
「ナキグイ」ぬ 「シカリ」

「オトウ」ぬ 「デンテン、デンテン」ヤ  
「ウシト」トぬ 「バカリ」ぬ  
「ファミレウタ」ティ ナリ

「ウシト」ヤ テンぬ 「ブシ」ティ ナレー  
ン

「ウぬアト」ぬ 「ショウワ 23 ネン」グルラ

「ヤキ」ぬ 「フシル」ティ

「イルンティ」プスヤ 「フシル」ぬ クト  
ユ 「キナイ」「キナイン」「アテプリン」ティ  
イジブタ

ウぬ 「ヤキ」ぬ 「ヨボウヤク」ティ 「フ  
シル」ヤ 「イルンティ」「プスンケーン」ユ

父は日頃 弟に 三味線を  
ひいて 聞かせていたので

三味線の ことを デンテンと  
いていた

父は 母の まわりを  
踊るように 手を あげて

デンテン、デンテンと 言って まわっていた

二人の 親は 弟を だいて  
家の中へ 入っていった

少しの 時間が たち

家の中から 二人の親の  
泣き声が 聞こえ

ぬーんていやー ぬーんていやー(どおして)  
の 泣き声が 聞こえ

父の デンテン デンテンは  
弟との 別れの  
子守歌となり

弟は 天の星と なりました

あの子の 昭和 23 年ころ

マラリアの 薬として

西表島の みなさんは くすりの 事を キナイ、  
キナイン、アテプリンと いていた

この マラリアの 予防薬という 薬は  
西表島の みなさんを

「タシキル」 クトンテ ナルン

「ウぬ」「キンキン」ぬ 「フシルヤ」 キュー  
ヌ 「カイジョウ」 ナ オールン 「シザン  
ケン」「スソーレン」トゥ ウムイブル

キューヤ 「パティロウ」ぬ 「カイジョウ」  
シ 「パナシ」 シイブルンぬ

「パティロウ」ティ 「イズカ」

イルンティ トーブぬ 「ハイミダー」ナ  
「イジュウ」ティ ムヌユ 「シミラリティ」

ウヌ 「シキナ シンショウ」 シンシぬ  
「ヌクシオッタ」「クトバ」ユ イシナ 「キ  
ザミ」

「ワスレナイシ」ヤ 「ヤキ」トぬ 「タタカイ」  
ヤ 「ケーラン」 「スソーレン」

「ヤキ」「マラリア」ぬ 「レキシ」ティ  
「ヌクリブル」

マナマ 「ユウジ」ティ クトバぬ 「シカリ」  
ブルぬ 「プス」ヤ 「クトバ」ティ 「ムヌ」  
ユ ムテオール

「クトバぬ ガイコウ」ティ ムヌン アルン

ケーラン スソーレン 「イシジマ エイブ  
ン」 シンシぬ スクローレン 「アーラユ  
ウ」 ウタぬ ナカーナ

「イクサユーン フケオーリ ミリクユーン  
ンカイオーリ」

「ナマカラぬ」「ユウヤ」 ティトリオーラ

バガケーラ ティトリオーラ ユスケーラ

助ける 事となりました

この 黄色い 葉は 今日の 会場に いらっしゃ  
る 先輩の みなさんも 知っていると思いま  
す

今日は 波照間島の 会場で  
はなしをしています

波照間島と いえば

西表島 東部の はいみだに  
移住というものを させられて

あの 識名信升 先生の  
残した 言葉を 石に きざみ

忘勿石は マラリアとの 戦いは みなさんも  
知っています

「ヤキ、マラリア」の 歴史として  
残っています

いま 有事という 言葉が かけられますが  
人は 言葉という ものを 持っています

言葉の 外交という ものも あります

みなさんも 知っている 石島英文 先生の 作  
りました「あーら世」歌の中に

いくさ ゆうん ふけオーリ ミリク世ん んか  
いオーリ

なまからぬ 世や 手取りおーら

ばがけーら 手とりおうら ゆすけーら

「キューヤ」 ケーラン 「スマムニン」 「マ  
リジマン」 「アタラサ」 シ

「ウキナー」 ぬ 「ゲンキムラ」 ティ 「スク  
リオーリ」 ヨウ

キューヤ 「バーぬ」 「パトゥマ」 ムニン  
「シキ」 フォーリー フコラサユウ

「イメーマ」 「ジカン」 イーリティ

「ハーモニカ」 シ ケーラン スソレーン  
「フルサト」 ユ 「フキバ」 カイジョウぬ  
ケーラン 「マーズン」 イジオーリヨウ

今日は みなさんも 「すまむに」 方言 生れ島  
(ふるさと) 大事にして

沖縄の「元気村」を作ってくださいね!!

今日は 私の「鳩間島の方言」を聞いて下さ  
いましてありがとうございました

少し時間をもらって

ハーモニカで みなさんも知っている「ふる  
さと」を ふきますので 会場の みなさん 一  
緒に 歌ってください



## 〈資料2〉

# 戦後80年 波照間島から考える「平和への模索」

仲 底 善 章

ベースマ ハテルマ マーリ スミビリヤル ナカソコ ヨシアキ ヤル

(波照間島生まれ、在住の 仲底善章と 申します)

クトゥーシヤ ウチナーヌ イクサユーガラ 80ニン

(今年は 沖縄の 戦さ世から〈終戦から〉 80年)

イクサヌ ネヌ ユーバー ニゲール プスプーバー

(戦争の ない 時代〈平和〉を 希求する 様々な取り組みが)

ウスナー ザーカマ シー アッタン。

(沖縄 県内各地で 行われてきました)

クリガラ バーヌ ヘイワティ カンゲール クトゥーパー

(これから 私自身の 平和に 関わる ことがらを)

ウムイリシター ナービラヤル ムールシィ ヘイワヌ ムトーパー

(振り返り 皆様方と いっしょに 「平和への 礎」を)

カンゲルンター パナシパー スン。

(共有ができることを願いつつ 話を 進めます)

バヤー 1956ニン ショウワ 31ニン 7ガツ 21ニチ マアーリス

(私は 1956年、昭和31年 7月 21日 生まれの)

イクサ ユー バガラヌ マーリィ ヤル。

(戦世〈戦争〉を 知らない 生まれの世代 です)

ブヤパー イヤアブガラヤ イクサ マラリアヌ クトゥヤ

(祖父母 両親からは 戦争 マラリアの ことについて)

ムチンミリシター パナシーバ シケーター クトゥーヤ ネナタン。

(向き合って〈対面〉で 話を 聞いた ことは ありませんでした)

80ニン メーヌ アッタン シマヌ イクサヌ パナシィ

(80年 前に あった 島での 戦争の 話は)

ウストウ ウィピトィヌ パナシィパー シキシタ バガリヤン。

(年寄り 老人たちの 世間話の中で 聞き知り 得ました。)

パー ヒィヌ ヤーニンズウ ピトウヒィ シマピトウ マアジィ

(私の 家の 家族も 他の多くの島民と 同じように)

イリムチィ ハイミィダーガ ンガター イイビヤル ピトウバギン

(西表島の 南風見田に 行きたくない 人までも)

ピキンダシィ ソウララキィ マラリアガ ハカラ ネルン。

(引き出して 連れられて〈強制的に非難させられ〉 マラリアに 罹って しまいました)

コミ ヤッサナガ ヒナン シィビリヤル ヒィヌ ピトウヤ

(古見 ヤッサに 避難 した 家の 人〈家族〉は)

マラリア ナガ ハカララリヤル ピトウヤ モナタアチュー。

(マラリアに かかる 人は いなかったそうです)

ヒナン シィビリヤル パー ヒィヌ ピトウヤ ムール マラリアナガ ハカララ

(避難 させられた 私の 家の 人〈家族〉は 全員が マラリアに かかり)

ムトウシィピィヌ ブィファヌ 秀ヤ ミザシィムヌ ヤッタチュ。

(一番末下の 叔母さんの 秀は ひどかった そうです)

バー ブヤヌ 善祥ガラヤ コクミンガクヌ シンター キィビリヤル

(私の 祖父の 善祥からは 国民学校の 先生として 赴任してきた)

リクグンナカヌガク ヌギヤル グンソ ヤマシタ トラオ サカイ キヨシヌ  
 (陸軍中野学校 出身の 軍曹、「山下虎雄：酒井喜代輔」の)

キョウソカイメーヌ コトゥ ヒナン シイビヒヤル バスヌ コトゥ  
 (強制疎開前の 言動、避難 している 時の 言動)

イクサユウ ウワリシタァ シマガ ムドリイキヤル ヤマシタ トラオガァ  
 (戦争を終わらせた時〈戦後〉、島に 戻ってきた〈来島した〉 山下虎雄に)

ムンドウ シイビリヤル クトパー ミルクトウンドウ アツタン。  
 (対する問責 していた 事を見聞きする ことが ありました)

ウリガラ アトゥ バヌヤ ダイガク ノゴリ シタ ショウガクヌ シンシイタァ  
 (それから 後、私は 大学 卒業後、小学校の 教師として)

ヤイマーヌ ガク ウスナーヌ ショウガツコウバ マーリイ ビリヤタン。  
 (八重山地区の 学校 沖縄本島内の 小学校を 赴任して 周りました)

ウヌ バス シャカイカヌ シンシイタァ 6月 23日ヌ イレイノ ヒヌ  
 (その 間、社会科の 教師として、6月 23日の 慰霊の 日に関わる)

ヘイワキョウイク 4月 28日ヌ 日本ヌ 主権回復トゥ 奄美・沖縄分離ヌ 歴史教育  
 (平和教育、4月 28日の 日本の 主権回復と 奄美・沖縄分離の 歴史教育。)

沖縄の 歴史 通史12時間、石垣市ヌ 水道事業ヌ 牧志市長、石垣港ヌ 開発等ヌ  
 (沖縄の 歴史を 12時間〈で学ぶ学習〉、石垣市の 水道事業の 牧志市長、石垣港の 開発等の)

島ヌ タミン ギバーリヤン ピトゥパー ナラスン クト シイキャン。  
 (地域〈島〉の ために がんばった 人材の 教材化の こと〈実践研究〉を 継続してきました)

ヘイワティル ムヌバ カンゲール クトン ナーリヤル ムンヤ  
 (「平和」という ものを 深く考える こと〈大きな転機〉に なった わけは)

平成22年 4月 ガクヌ コウチョウター ベスマー ガクガ キアバス ヤル。  
 (平成22年 4月 学校の 校長として 〈母校の〉波照間 小学校に 赴任して からです)

昭和50年 小中ヌ ガクガ バガラレ 平成23年 小中ヌ ガクガ マージイ ナタン。  
 (昭和50年 小中の 学校が 分けられ〈分離後〉 平成23年に 小中の 学校が いっしょ〈並置校〉になりました)

ウリバギイ ショウガク ガシ シイビリヤル ガクドウイレイサイバ 小中 マージイ ナリイ  
 (それまで 小学校 単独で 行っていた 「学童碑慰霊祭」を 小中 一緒に 行いました)

コウチョウターシイ 8月 15日 イリムチ ハイミィダーガ  
 (校長として、8月 15日 西表島 南風見田での)

ワスレナイシ イレイサイガ ンギイ 忘勿石修復・波照間の碑設立期成会ヌ ヤクイン  
 (「忘勿石 慰霊祭」への 参加、「忘勿石修復・波照間の碑設立期成会」の役員)

波照間公民館ヌ 館長 ナリガラ 台湾有事ター エシター 南西諸島防衛計画ヌ アリイ  
 (波照間公民館の 館長に 就任してからは 「台湾有事」想定 そして 南西諸島防衛計画が あり)

陸上自衛隊ヌ ユヌンスマ ビリイ イサイスマーバギン ビリイ  
 (陸上自衛隊の 与那国島 配備、石垣島への 配備)

ミヤグヌ スマァーバギイ ビリイ ビリヤル 国民保護法ター  
 (宮古の 島まで ミサイル部隊の配備、国民保護法の名のもと)

エシタ 宮古・八重山ヌ ピトゥ パムール 山口・九州ヌ ヤマトウガ ソールンター。  
 (そして 宮古・八重山諸島の 住民を 山口・九州への 大和〈本土〉へ 避難させる計画)

イクサーユウ ナルンカァタータァ メガメチイ シワシイ シナヌ グンタイヌ  
 (戦争を 意識した出来事が 日々日に 心配し〈高まり〉、中国の 軍隊による)

台湾ヌ アリヌ イナナガ ミサイルドウ トウピイキア バスヤ

(台湾の 東の 沖への ミサイルが 着弾の 際には)  
ベスマー 波照間ヌ 公民館長ター エシタ インタビューヌ パナシイ イクドウ アタン。  
(〈マスメディアから〉波照間の 公民館長としての インタビューの話〈意見を求められることも〉幾度もありました)  
40年メエ シンシィター エシター ンギヤル ユヌヌヌ スマヤ  
(40年前に 教員として 赴任した 与那国の 島は)  
平成ヌ 市町村合併バ コトワリイ ドウシキナァ ンギルンター シター シキンドウ  
(平成の 市町村合併を 断り、自己責任〈単独の道〉を選択した わけで)  
ピトウヌ モーナーサルクトウー トミナラヌ ナリイ 自衛隊バ ブサターシキン シター  
(過疎化の波は 止められなくなり、自衛隊基地を 誘致することによる)  
ノーリィユウ メーリィユウヌ スマ ナスンター ムイター シキンドウ  
(稔り世・実入り世〈振興・発展〉の島にしようとして 期待 したけれども)  
ヒィ ニンズウ ソーリィ シター クウ 自衛隊員ヤ ベェビィー  
(家族 同伴 して 来た 自衛隊員は 少なく)  
「年にお米が2度取れる」ター ウタァシビリアル タナヤァ フチャン ヤマ ナリィチィ  
(「年にお米が2度取れる」と 唄われていた 水田は 荒れて 叢に なって)  
土地改良ヌ ピティヤ フチャン ヤマナリィチィ ミィン ミラルヌ クトウー  
(土地改良された 農地は 荒れて 叢になって 見るに 見られぬこと〈状況〉を)  
ミィチィヌ メエヌ トシィ ミリシキヤン。  
(3年 前の 年 〈この目で〉見ました)  
自衛隊ドウ ブンドウ ピコハンター シキィシタ スマーナガァ ペエリィクウ ピトウヤ ピナリィ  
(「自衛隊〈誘致〉は 危ない〈平和が脅かされる〉」と聞いて 島への 新規参入する 者が 減り)  
スマアガラ ンヅルン ピトウンドウ ブサナリィター シキィビリヤル。  
(〈逆に〉島から 去る 島民が いるとさえ 聞きました)  
メエヌ 1月 22日 中谷元防衛大臣ドウ、学童慰霊碑・波照間の碑バァ  
(去った1月 22日、中谷元防衛大臣が、学童慰霊碑・波照間の碑への)  
パナァ ンギルンター ベースマガ キヤン バスニィ 役場ガラ  
(花を 献ずるといって 波照間島に来島の際に、竹富町役場から)  
中谷大臣ガァ 慰霊碑ヌ パナシィバー シィタァクイタバル バスニィ  
(中谷大臣への 慰霊碑の 解説してほしいとの 際に〈依頼があり〉)  
大臣トウ パナシィバー スルクトウ ナリィ。  
(大臣と 話〈面談〉を することに なりました)  
ウヌ バスウニィ「国境ヌ 島ヌ 産業振興ヤ 国防シィヤ ムスカァサァハン ナラヌ」  
(その 際に 「国境の 島の 産業振興は 国防では 難しくて できない〈困難である〉」)  
アマスナ スクリィ ウシ ピミィザァ スカナシィ  
(サトウキビの生産、牛・山羊を養い〈畜産等の第1次産業〉)  
ピトウ スマァ ミルン ピトウバー スケスン 観光シドウ ナルンター  
(人 島を 見る 人を 案内する 観光業でしか なしえないと)  
パナシィバー シィ シキヤタン。  
(話を し 訴えました)  
イクサチィ マラス ピトウヤ バイマンネール ピトウ ヤルン。  
(戦争で 犠牲になる 人は、私たちのような 人〈一般住民〉です)  
ウチナヌ イクサガラ ナラヒヤ ムヌヤ 「軍隊ヤ スマピトウ アタメエサヌ。  
(沖縄の 戦〈沖縄戦〉から 得た 教訓は 「軍隊は 島人〈住民〉を 守らない」  
スマピトウバァ ワーギィ ダッサギルンドウ スン」

(〈逆に〉島人〈住民〉を脅かし 破壊こそ する)

マナヌウ ウクライナヤ ガザシィディ ウギヤル クトウンドウ

(今まさに、ウクライナや ガザで 起こっている こと)

クリインドウ バイマーガラ ミリヤル イクサドウ ヤル。

(これこそが、私たち〈住民〉から 見た 戦争 です)

イクサヤ ヌーシャル ムヌン ダフツリィ モウナサンドウ スル マザムン ヤルン。

(戦争は 全ての 物を 破壊して なくしてしまおうと する 魔物です)

イクサユーガラ 80年 「シワスルコトウ ネヌ 日本」バァ ムチアル ムヌヤ

(戦争の時代〈戦後〉から 80年間 「心配することのない〈平和な〉日本」を 支えてきた もの〈根源〉は)

イクサバァ ミリヤル ミザシィ ピトウヌ ヘイワヌ キムトウ

(〈過酷な〉戦争を 体験した 大事な 人の 平和を 〈希求する〉心と)

日本国憲法ヌ 前文トウ 9条ヌ シムバ ムチアルグウ ピトウヌ ギバァリヤン ムヌ ヤル

(日本国憲の 前文と 9条の 精神を 保持し、行動してきた皆さんが がんばった 成果 です)

1992年 平成4年 波照間小学校ドウ 沖縄県教育委員会ヌ

(1992年 平成4年 波照間小学校が、沖縄県教育委員会の)

「平和教育研究モデル校」タァエシタ ギバリィ

(「平和教育研究モデル校」として指定を受け がんばり)

ゲンヌ ヌヌ プスプウタァ エシタァ

(翌年の 年の 研究成果として)

ウタマンジィ ムウルシ 歌詞バ スクリィ シンシィダーヤ 作曲 シィビヤル

(児童 みんなで 歌詞を 作り 先生〈教職員〉らが 作曲 しました)

「星になった子供たち」ドウ マァリィ バイマンメエナガ ピソギラリィタン。

(「星になった子供たち」〈の歌〉が出来上がり、私たちに 披露されました)

クヌ ウタバァ クヌ バスナァ ビリア ピトウ ムールシィ ウタイチィ

(この 歌声を この 会場に いる 人 皆さんと うたって)

バナウ パナシィバ ウワラスン。

(私のお話を終えます)

ニィハイユウ。

(ありがとうございました)

## 〈資料3〉

# 危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会

## リレーエッセイ

### 1. 『八重山毎日新聞』

#### (1)島の宝「すまむに」を次世代に

黒島健

(石垣市文化協会すまむに部会)

わが国における言語・方言のうち消滅の危機にあるものについて、2009年にユネスコ(国連教育科学文化機関)が発表した8言語(アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語)で、そのうち八重山語、与那国語は、危機の度合いとして「重大な危機」と分類され、保存・継承への取り組みは今や待ったなしの状況です。ユネスコの危機言語の判断基準によれば、言語が若い世代に引き継がれているかが重要な判断基準の一つです。八重山語を含む琉球諸語、および日本本土の方言も、ほとんど若い世代によって使われなくなり、消滅の危機にひんしています。

このたび、わが国における消滅の危機にある言語・方言を共通課題に、その調査研究成果や各地域の取り組み事例について、広く知ってもらおうとともに、次世代への継承を視野に入れ、石垣市では文化庁や国立国語研究所のご支援を仰ぎながら「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催します。

本サミットは、8言語・方言の地域の方々から全国から「ばがーすま」にお集まりいただき、消滅危機言語・方言を共通の課題として危機言語・方言の聞き比べや講演を行い、実際に各地域の言語・方言を聞いて体感し各地域が協力して取り組める活動について考え、危機的な状況を改善するきっかけにしようとするものです。

私たちは、石垣市文化協会です。「育てよう文化の心・文化のまちをスローガンに平成6年の設立から30年余の歩みの中、平成21年10月に結成された「すまむに部会」においては、「すまむにの普及・継承」への機運を高めることをテーマに、「すまむにを話す大会」を開催、迎

える13回大会は「言語・方言サミット」を通しての開催となり、全国からのサミット参加者と共に、自らの故郷の言葉に対する思いと私たち「八重山のすまむにの温かさ」にも触れていただきたいとのメッセージをお届けしたいと思います。

近年、地域の言葉に対する認識が高まりを見せる一方、「すまむに」を使う人たちは減少しており、生活の中から「すまむに」が消えつつある現状にあります。言葉は文化の代弁者です。地域の言葉がなくなるといことは、その地域に脈々と伝えられてきた文化が途絶え、その地域の固有の文化がなくなるといことです。

沖縄・八重山には「星の数ほど歌がある」と言われています。その歌や踊りなど、ばがーすまの内外に誇る独自の郷土文化を支え、その土台となっているのが「方言(すまむに)」です。

「失われつつある地域の方言を残していきたい」との思いをぜひとも共有したいと思います。うやばーふじう(先祖)から受け継がれてきた「すまむに」を八重山の「宝」として次世代へバトンタッチを。ケーランネーラのご参加をお待ちしています。

(10月3日掲載)

#### (2)危機的な状況にある言語・方言サミット

##### 八重山大会に向けて

ースイマムニは近くにありて思うものー

長田秀一

(ホームムニ伝承会)

中学を卒業して石垣島を離れ、退職を機に島に戻ってから2年が過ぎようとしている。「故郷は遠きにありて思あもの」とはよく言われるが、帰省の度に、島の風景が大きく変わっていくのを見て、複雑な気持ちを抱いた。そうしたなか、私の心を慰めてくれたのは、何よりもこの島で聞こえてくる昔ながらの方言や言葉のなまりであ

った。私にとって「スイマムニ(方言)はまさに近くにあ  
りて思うもの」と言える。言語は人の感情に直接働きか  
けるので、方言を聞く度にさまざまな思いが湧き上がっ  
てくる。

人の成長に伴うさまざまな学びや体験は記憶に刻まれ  
ていくが、時間という流れの中で、記憶はその人の心や  
生き方にまで影響していく。私の記憶の原点はといえば、  
石垣島、とりわけ中学までを過ごしたこの「大浜」とい  
う地にある。楽しかったことはもちろん、辛かったこと  
や悲しかったことも、懐かしい思い出としてよみがえっ  
てくる。そうした思いは方言を聞くと一層ましてくるから、不思議だ。

人はとても不思議な生き物である。子どもの頃の体験  
や育った環境(風土、食べ物、生活習慣等)は、単なる記  
憶としてではなく、まるで体内時計のごとく、体に刻ま  
れていく。帰省する度に、このことを痛感した。記憶に  
あるさまざまな事柄が言語とともに体の奥深くにまで染  
みこんでいるのである。方言に触れると、体が喜び、元  
気を取り戻し、また頑張ろうという気持ちで一杯になる。

私が言う「スイマムニは近くにありて思ふもの」とい  
うのは、まさにこういう意味である。人が生まれ、成長  
し、老い、死んでいくという過程の中で、生きる力、生  
きる意味を与えてくれる原点こそが方言(言語)なのであ  
る。方言には人との絆を強める力もある。地域に伝わる  
民謡や伝統芸能も方言と密接に関わっており、切っても  
切り離せない。まさにことばの力である。

故郷の大浜では「ホームムニ伝承会」(大浜方言)に入  
会させてもらった。方言に触れる機会も多くなり、地域  
の人々との絆が増していくことに、とても感謝している。  
大浜以外でも、地域の方言や伝統の継承に取り組むさま  
ざまな活動が行われている。今後いっそう多くの人たち  
がこうした活動の輪に加わり、郷土愛が深まっていくこ  
とを望んでいる。

幼い子どもが学習する言葉は「母国語」ではなく、保  
育者が話す「母語」、つまり方言やしゃべり方である。小  
さい頃から方言に触れてもらうためにも、私たち一人一  
人がこうした環境を少しでも整えていくことが大事とな  
る。私にとって「島の宝」とは、まさに私を育ててくれ  
たこの「方言」である。「方言サミット八重山大会」が開  
催されるにあたり、この宝が末永く残っていくことを望  
むと同時に、残していかなければならないとの思いを改  
めて強くしているこの頃である。

### (3)ハンガマ石の伝説

飯田あかね

(八重山探検隊)

ウガマナーラ。八重山探検隊又飯田あかねユー。  
昔、登野城村又天川家又祖先又ドゥ、羽釜石又近  
サンガ魚バ取りウダー。

さて、ここからは日本語で申し上げます(公的な挨拶の  
王道!)

八島小学校東の防波堤近くに、「ハンガマイシ」(羽釜  
石)と呼ばれる石があります。これは海中にあって、海水  
の浸食で二重のノッチが形成され、蓋をした「ハンガマ」  
(羽釜)に似た形からそう呼ばれたそうです。

しかし、この石を見て、ハンガマを想像できる人がど  
れだけいるでしょうか。そもそもハンガマとは何でしょ  
うか。年配の方ならともかく、子どもたちが知る由もあ  
りません。

ハンガマは一昔前に使用した炊飯用の釜のことで、周  
囲に羽のような縁のついたものです。その大きさは一升  
炊き、二升炊き、三升炊きと順に大きくなります。あの  
八島の海にある大きなハンガマでは、いったいどれぐら  
いのご飯が炊けるのでしょうか。

『石垣方言辞典』で、「ハンガマ」の言葉を引くと、「ハ  
ンガマヌ ハネー カツアメー ウティリ」(羽釜の羽を  
捕まえて下ろしなさい)という例文が載っていました。こ  
の例文から、ハンガマでご飯を炊くとき、釜の羽をつか  
んでカマドゥ(竈)から移動させる場面が目に見えか  
ねます。ハンガマイシを見ただけで、こんなことまで想像  
できたら楽しいですね。

また、ハンガマイシ周辺を中心とした伝説があります。  
その伝説は天川家の祖先とマジムン(魔物)の交流を語り  
伝えています。

ある日、マジムンが海の向こうから舟に乗ってやって  
きました。舟が干瀬の上に乗上げ、マジムンが困って  
いたところ、釣りをしていた天川家の青年が助けてやり  
ました。マジムンはそのお礼に、注連縄のつくり方を青  
年に教えて去っていきました。その注連縄のおかげで、  
村人は悪い病気にかからずに済んだというのです。それ  
以来、魔除けのために天川御嶽や家に注連縄をめぐらせ  
るようになりました。

暮らしのなかで使われなくなったモノの名前は、人々

の記憶から消えていきます。現在、機能性の優れたスマートな炊飯器が巷にあふれていますが、羽のついたユニークな形態のハンガマの存在を忘れたくありません。ハンガマイシは、ハンガマのみならず、それに付随するさまざまな記憶の再生装置でもあるのです。そして将来、私も「チビナーシナー ムヌヌキムヌ ドゥラー」(注連縄は魔除けなんだよ)と、低い声で子どもたちに凄むオパーになりたいものです。

- 参考文献/宮城信勇『石垣方言辞典』(2003年)、『八重山探検隊 石垣島民話めぐり バスツアー編』(2022年)

(10月7日掲載)

#### (4)第46回テードゥンムニ大会

石垣久雄

(竹富町史編集委員)

令和7年度「危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会」が10月25日・26日、石垣島で開催されます。島の言葉、地方の言葉が消えると、その言葉に込められた心や、文化的な背景まで無くなってしまいます。私たちにとって大切な島の言葉を失わないためにも、島々村々では「スマムニ大会」などを持ち、その保存・継承に心血を注いでいます。

竹富島で開催される恒例の「テードゥンムニ大会」も、今年で46回もの会を重ね、もはや伝統行事といっても過言ではありません。ここでは、9月19日に「竹富まちなみ館」で開催された「第46回テードゥンムニ大会」の様子を報告し、保存・継承活動の良き一事例になればと思ふ筆をとりました。

大会の主催者は竹富小中学校PTA、主管はPTA文化部、後援は竹富老人会・公民館です。舞台右袖には「ケーラシ テードゥンムニユ 守リオーラ クヌ子孫ユ育ティオーラ」、左袖には「ムニバッキッタ島バッキ 島バッキッタ親バッキルン」と大書された幕が垂れ下げられていました。プログラムは、「セレモニーの部」と「発表の部」で構成されていました。

セレモニーの部は、野底愛・鈴木祥浩の司会により進められました。「開会のことば」をPTA文化部副部長・漢那崇友、「PTA会長の挨拶」を前本賢二郎、「激励のことば」を公民館長・内盛正亀が行ないました。もちろん、これらはすべてテードゥンムニ(竹富島言葉)です。

座開きは保育園児10人による竹富島のわらべ歌。会場は一気に温かい空気に包まれました。そして、「発表の部」

へと移りましたが、その進行役はPTAのお母さん方(上勢頭恵里子、新田由紀、登野原さゆり、上勢頭詩穂子、井上邦子、上勢頭恵、石垣絵美)が担当しました。このお母さん方の進行もアットホームな大会の雰囲気醸成していました。

プログラムは、(1)「自己紹介・わらべ歌」、小学校1年生2人と2年生による発表でした。(2)「テードゥン言葉あそび」(小学校3年生3人・4年生3人)、(3)「朗読『星砂の話』・斉唱『きらきら星』」(小学校5年生6人・6年生1人)、(4)「竹富小中学校今年度新職員の自己紹介」(渡慶次良弥・仲間彩貴・石垣絵美)、(5)「岡崎心一校長挨拶」と進んでいきました。

岡崎校長は、1977年11月4日の新聞で報道された「初のテードゥンムニ大会」の記事を紹介されました。そこから大会が、①「正しい方言の継承」、②「郷土の歴史学習」、③「方言を通しての会話」を目的として開催されたことが確認できました。岡崎校長は、初心を忘れず、今なお継続するテードゥンムニ大会に敬意を表すると述べられました。

(6)「竹富島の例の狂言」は、種子取祭で演じられる狂言「鍛冶工」「組頭」「種子蒔」と、結願祭で演じられる狂言「芋掘狂言」を、中学生が挑みました。これらは「例の狂言」と呼ばれ、神への奉納芸能であり、正しい島言葉で台詞を唱える儀礼的な狂言です。

出演者は「鍛冶工」は中学1年生3人と2年生1人の計4人。「組頭」は中学1年生4人と2年生2人の計6人。「種子蒔」は中学1年生3人と2年生2人、小学5年生1人(太鼓役)の計6人。「芋掘狂言」は中学3年生3人で計3人が演じました。見事な台詞と演技に、拍手喝采が湧き起こりました。演じた生徒の顔も満足そうでした。

大会の感想を前公民館長・新田長男が述べたあと、テードゥンムニに訳した「ふるさと」を皆で歌いました。

「山羊<sup>びーざ</sup>ぬ草<sup>か</sup> 蒔<sup>ま</sup>りし あぬ丘<sup>むい</sup>/スル<sup>う</sup>ゆ追<sup>う</sup>いし コンド  
イぬ浜<sup>はま</sup>/夢<sup>いみ</sup>や今<sup>なま</sup>ん みぐりてい 思い出<sup>うむ</sup>し 竹富島<sup>てーどんじま</sup>」

その後、PTA文化部長・鶴丸明緒が閉会の言葉を述べ、意義ある第46回大会を終えました。いうまでもなく、テードゥンムニ大会は、開会から閉会まで、すべてテードゥンムニで進行することになっています。大会の回を重ねるごとに、先人から伝えられるテードゥンムニが蓄積され、それが日々の暮らしに浸透していくことを願っています。

また、誰が提唱したかは知りませんが、「まず国内で二重言語者になろう」、「標準語の他にもう一つの日本語(方言)を持とう」の提言に耳を傾ける必要があると思います。

(10月8日掲載)

## (5)ふるさと

大竹芳典

平成30年に石垣島を離れて気づけば7年が経つ。その間、頻繁に帰省する年もあれば、全く帰らない年が続くこともあったのだが、寂しく思うことはあまりなかった。島を離れたと言っても沖縄本島に住んでいるからだろう。本島だと、気候や文化も（本土に比べて）あまり違いがない。離れた石垣に住む家族や友達だって、何かの用事で定期的に本島に出てくるため会える機会も多い。よく恋しくなるものがあるとすれば、渋滞しない道路と移動距離の短い生活ぐらいである。

とは言ったものの、何故か僕は毎年8月がくると少し寂しくなって、石垣に帰りたくなる。ほんの少しだけね。見慣れた景色も恋しいのだろうけど、なんというか石垣には「いい空気感」がある。

しばらく石垣に帰らずにいると、目や耳が石垣の人を探すようになる。仕事の研修で、居酒屋で。研修会などの場所で、「宮良」や「大濱」などの八重山の苗字を目にしたり、みんな一柄のかりゆしウェアを着ている人を見たりすると同郷かと思いき嬉しくなるし、尋ねることもある。居酒屋では八重山方言を聞くと「声をかけようかな」そわそわする（実際に声をかけたことはない）。

「どこに（が）車止めた？」「誰と（が）くるって？」このような格助詞の「が」の使い方をする人は大体が八重山の人である。また、「お前遅い（ど）」「1時間も遅刻（ど）」のように終助詞の「ど」を頻繁に使う人も8割方八重山の人だろう。他にも、相槌で「そーばー（そうなんだ）」と言っていたり、皿の汚れをみて「あだらっ（汚い）この皿、誰か使ったば」と聞いていたり……。こうなってくるともう100%石垣の人で間違いない。

一度、国際通りの居酒屋で「あ、隣の席の人、さては石垣の人だな」と思ったものの、声をかけずに居たら（同じ島の人だったとしても、それだけで声かけるのも変だしね）翌日「昨日〇〇にいたでしょ」とSNSで連絡が来て、その人が小学校の時の同級生だと後から気づいたということもあった。とはいえ女の人って大人になったらもう別人だね。全く気が付かなかった。定期的に会っていたなら別だけど……。

話が逸れたね。失礼しました。話を戻すと顔も名前もわからなくても、耳で八重山の人を探し出すことはそれ

ほど容易だということである。

よく、本島では、「沖縄の中でも宮古島は方言が強いけど、石垣島の人は逆でほとんど標準語だ。」という人がいる。でも、それは石垣をよく知らない人の言葉か、訛りや方言を「田舎臭い」と思って本島に出てきて、少しでも“進んだ感じ”を出したい石垣の人が言い始めた言葉だと僕は思っている。だって、これだけ耳で見分けられるということは、そういうことさな。

ベトナムに日本語教師として半年派遣された後、石垣に一度帰ろうと那覇空港で搭乗を待っていた。すると、そばに座っているお婆さんから「〇〇はもうがーぶれてる（疲れてる）よ」とか「〇〇がやまんぐー（わんぱく）で、振り回されてがいたからね」なんて声が聞こえてきた。一瞬にして、僕は石垣に帰ってきた気分になった。まだ飛行機に乗ってすらいないのに。不思議だよ。冒頭で言った、「いい空気感」それがそこにあったわけよ。

言葉は故郷。こんなことがあるたびに思う。故郷は場所だけに感じるものではない。「大事な人」であったり「土地の言葉」であったり、いろんな要素が組み合わさって僕はそこを故郷だと感じているのだろう。景色はどんなにしても変わってってしまう。言葉もそうかもしれない。ただ、僕の故郷として、今も残る島の言葉だけでも大事に使われ続けていって欲しい。故郷を故郷として感じられる要素として、言葉はそれだけ大きなものだから。

（10月9日掲載）

## (6)二番座の記憶

白保椋之

（竹富町職員）

幼い頃から祖母と生活時間を共有していたこともあり、無意識のうちに島言葉を耳にすることは少なくなかった。祖母と母たちの生まれ故郷である波照間ではそれを指して「ベスマムニ（我らの島の言葉）」と言う。

今も昔も歳を重ねるにつれ、朝が早くなっていくと言うがバヒューパー（我が家の祖母）も例外ではなく、まだ暁の光が庭を満す前にお茶を沸かし、仏前へ供える朝茶の日課を欠かさなかった。線香の香りに包まれながら、寝ぼけ眼で眺める祖母の背中には自分にとっての幼少期を象徴するワンカットだ。

お茶をつけ、二番座に正座し手を合わせる祖母は、いつも決まってしきりに何やら呟いていた。幼い耳でその全てを把握することはできなかったが、そこには家族の無病息災や旅に出た者への安全祈願など、ヒーニンズ(家族)の平穩無事を一心に願う慈しみの言葉が並べられていた。

「キューンケンコーアラスマタポリチ(今日も健康であらせてください)」、「イイクトゥガサーアラスマタポリチ(良い事を齎<sup>もたら</sup>せてください)」、「ドージン、ミマムリタポリ(どうぞお見守りください)」。両手の腹を合わせて、円を描くように擦り合わせながら祖母が紡ぎ出す言葉たちが、祈りの「スサリグチ」であったことを知ったのはその死後のことだった。

各家庭においてウヤピイトウ(祖先)へ語りかけるスサリグチはその全てがベスマムニによってなされる。島言葉の母語話者だった祖母が担う大切な家族の役割であった。普段はやわらかい抑揚を持って会話のトーンを明るくする島言葉が、トゥク(仏壇)やブザスケ(床の間)の香炉の前では空間を引き締め、正座する子どもたちの背筋を自然と正してくれた。

成人後、暫く振りに島のコココー(焼香)へ出た折、その一族の長老が唱えるスサリグチに接したことがあった。「アー、トッチィー(尊く拝みます)」から始まるミーナンガヌコココー(三七日の焼香)では、供物であるコームチィを恭しく捧げるので受け取っていただきたいこと、今日出席したヒーニンズ(家族)、ウタマ(子ども)、ウツヌマー・フカヌマー(血縁のある孫達)みんなが元気でいられるように見守っていただきたいこと、マールイマールイヌコココー(廻り来る焼香・・・回忌)が滞りなく済ませられるように無病息災を叶えてほしいことなどが述べられた。

手を擦り合わせて故人へポツリポツリと語りかけるその姿は、幾重にも立て並べられた線香の煙と合わさりながら、いつかの祖母の背中を思い出させるものだった。暈を伝って来るやわらかい緊張感も、時折遺影へ向けられる懐かしさをいっばいに含んだ眼差しも、あの頃の二番座を映し出すかのようで、そこから沸き起こる不思議な感覚は、記憶が体に刻み込まれていた何よりの証であったと思う。

仏壇はどの家でも二番座に置かれる。フチィメー(戸口前の台所)から続く六畳足らずの空間には、いつも家族の集いがあり、会話があった。母語話者であったパー(祖母)が亡くなってからは、家の中でベスマムニを聞くことはほとんど叶わなくなってしまったが、島へ親類

を訪ねると「アベェー！スサポイヌマー！（白保の孫だ！）」の歓声を皮切りに、ブヤマー(じいちゃんたち)・パイマー(ばあちゃんたち)のベスマムニに触れることができる。思いをいっばいに湛えた少し強めのアクセントを耳にするあの瞬間は、亡くなった祖母と再会を果たしているようで嬉しい。二番座の記憶はウチィザマリイ(親類)の温もりを保ちながら、今もベスマムニの中に生きている。

ムニスアルバギン、イチィバギン

(言葉のあるまでも、いつまでも)。

(10月11日掲載)

## (7)「言語・方言サミット八重山大会」へ

### オーリ・トーリ

しうまむに伝承研究会

♪チウキヌー カイシャー トウカミーカー♪

八重山のわらべうたは「歌うための歌」、「遊ぶための歌」です。

私たちは、しうまむにの継承を目的に、言葉の発達段階にある子どもたちへ、しうまむに絵本を作成し、こども園等でわらべうたと絵本の読み聞かせ活動をしています。

「八重山語」は、ユネスコ(国連教育科学文化機関)で、消滅の危機にある言語として「重大な危機」にあると発表されました。

確かに、現代のコミュニケーションは、共通語が主流で、しうまむにを話せる高齢者は、ごく少なく、まさに危機的状況であります。

○しうまむには、地域の誇りやつながりを感じさせる。

○しうまむには、親しみや安心感を生み一体感を高める。

○祖父母と孫世代の会話で、しうまむにが使われることで文化的な継承が行われる。

しうまむにを通じて伝統や価値観を受け継ぐことで、世代を超えた理解や尊重が生まれる、等々いいことがあります。

私も幼少のころに祖母が居て、毎朝、隣近所のおばあさんたちがお茶を飲みながら話すしうまむにを聞いて育

ちました。

このままでは、私たちが大好きなしゅうまむにが無くなってしまうと危惧した仲間で、子どもたちへの伝承活動をすることにしました。補助金等で作成した八重山民話のしゅうまむに絵本『やえやまのわらべうた』『黄金の花』『猿の生き肝』『すずめの孝行』『かっこうどり』『やさしいしゅうまむに』の絵本と大型紙芝居の読み聞かせをわらべうたとセットで、毎週火曜日にこども園等で活動しています。たまに、小学校・高校・高齢者サービスから声がかかり出向くこともあります。

10月25日・26日に開催される「言語・方言サミット八重山大会」のオープニングアトラクションに、私たちが活動している「新栄町こども園」と「川平こども園」のかわいい子どもたちが、わらべうたを市民会館大ホールの舞台いっぱいに歌い踊ってくれます。

とても楽しみでワクワクしています。

デーजू サニシャーンユー(とてもうれしいです)。

言語・方言サミット八重山大会へオーリトリー(いらっしゃいませ)。

トゥズミュー(おしまい)。

(10月16日掲載)

## (8)『鳩間方言辞典』の未来

中川奈津子

(九州大学大学院人文科学研究院)

2019年4月、加治工真市先生が1963年から50年以上もの歳月を掛けて書かれた『鳩間方言辞典』のデータを受け取った。あまりの情報量とその歳月の重さに、ファイルをコピーするだけでも重圧を感じたのをよく覚えている。1文字もとりこぼしてはいけないという緊張感とともに辞書の編集をさせていただき、約1年後に無事、書籍版を出版することができた(2020年3月)。まだご覧になっていない読者は、ぜひ図書館などで手にとって見ていただきたい(同じ内容はウェブ上でも無料でダウンロード可能である <https://doi.org/10.15084/00002991>)。

仲宗根政善氏の「鳩間島の文化の総体を記録した方言辞典を残せ」(あとがき, p.1841)という言葉どおり、鳩間島の祭祀やそれにまつわる歌、農業・漁業などの用語解説、言い伝え、おまじないなど、まさに鳩間島の文化

の総体が記述された辞書である。

『鳩間方言辞典』は、印刷された紙の上での記録にとどまらない。全文がデジタルデータとして公開されており、見出し語・例文のほぼ全てに加治工先生の読み上げによる音声がついている(2025年9月25日現在「国立国語研究所デジタルアーカイブ NINDA」では見出し語音声のみ聞くことができる <https://ninda.ninjal.ac.jp/>)。NINDAを含め、デジタル化された辞典の使い方はまだ限られているが、今後はもっと幅広い利用が期待される。

例えば紙の辞書では方言を見出し語として、アイウエオ順に並んだ語の中から目当ての語を探し出すが、デジタル辞典では日本語から鳩間方言を調べることもできるだろう。また、島に伝わる歌だけを検索したり、農業や漁業に関連するキーワードをまとめて検索して調べられることもできる。万葉集などの古語との関連から方言を調べたい人はそのような使い方もあるだろう。調べるだけでなく、方言で歌を作ったり物語を書く人のためにも、デジタル辞典が助けになるだろう。

さらに今の技術では、意味的に関連した単語を自動で集めることもできる。例えば、「船」と意味的に関連した語(サバニ、櫂、帆、船をもやうための縄など)を集めることが可能である。表記法がよくわからない単語を、音声入力によって検索することも可能になるだろう。

このように、アイウエオ順に並んだ紙から飛び出して、縦横無尽に辞典を読むことができるようになる。鳩間島の文化の総体を記録したこの辞典を、より自由に、有機的に活用することができるのである。

本辞典のデジタルデータは「二次利用可」の条件で公開されているため、ここから一部を取り出して再配布することも可能である。著作権が放棄されたわけではないので注意が必要だが、例えば初学者向けに基本的な単語とその例文だけ取り出して鳩間方言の教科書を作り、それをインターネット上に載せることも、印刷して配ることもできる。ほぼすべての例文に音声がついているので、音声を聞きながら学習することもできる。このように自由な再利用を許す「二次利用可」の条件でデータ公開を許可してくださった加治工先生に改めて感謝を述べたい。

さらに、運用にかなり注意が必要だが、AIに学習させて鳩間方言で会話することもできるようになるかもしれない。AIによって生成された(間違っているかもしれない)方言と本来の方言が、どっちがどっちかわからない状態でインターネット上に存在するのは望ましくないの

で、技術的にもライセンス的にも可能だが、方言の自動生成は慎重に行っていただきたい。しかし鳩間方言の AI 対話システムは、言語の継承者・学習者にとって有意義な学習の機会となるだろう。

デジタル辞典は、うまく活用すれば八重山の言語・文化・歴史を総体として記録し継承するために有効な手段となりうる。読者の皆さんも、本辞典の独創的な活用方法をぜひ考案されたい。また、八重山にはまだ辞典を持っていない地域が数多くある。そのような地域の方言に触れる機会のある方はぜひ記録を取って公開されることをおすすめする。『鳩間方言辞典』の編集に関わらせていただいた 1 人として、また八重山の方々に助けていただいている方言研究者の 1 人として、私もそのような取り組みの力になりたいと願っている。

(10 月 18 日掲載)

## (9) 昔話をスマムニで

一子どもたちが大きくなっても、  
スマムニが聞ける小浜島に一

**花城正美**

(竹富町史編集委員)

八重山の島々村々では、古より人々の心をつなぐ言葉・スマムニが使われ、豊かな文化として昇華・発展させ、今日に至っている。私たちの先人は、方言禁止のような愚策に翻弄された暗い時代を潜りぬけ、スマムニを駆使しながら、お互いの絆、コミュニケーション、八重山の心ともいえる祭祀行事を脈々とつないでこられた。

しかし、八重山に限らず、日本の隅々まで共通語(標準語)が浸透した現在、ユネスコは日本各地諸言語の具体的な継承活動が行なわれない場合、琉球諸語、八丈語、アイヌ語を含む 6 つの言語が、今世紀中に消滅してしまうと指摘している。

このような警鐘が鳴らされる現状であるが、我が小浜島のスマムニもその枠内にあることは、早くから関心の方々のあいだで、「スマムニ忘<sup>バシ</sup>キカラ親忘<sup>ウキバシ</sup>キ 親忘<sup>ウキバシ</sup>キカラ島<sup>スマ</sup>バシキ」(島言葉を忘れたら親を忘れ 親を忘れたら島を忘れる)を合言葉に、その危機意識を共有してきた。

「今、何もしなければ失ってしまう危機言語」ならば、「今、何をすれば、スマムニを次世代につないでいけるのか」。この問いに自ら答えるべく、これまで私なりに考え、体現してきた。ここでは、そのうちの幾つかを紹介

し、諸兄の忌憚のないご指導を仰ぎたい。

1984 年、福田晃氏が主宰する「南島昔話叢書」の刊行に携わる機会を得た。採録された明治生まれの島の先輩方 15 名によるスマムニの語りを文字に起こし、それに共通語を付す仕事である。録音テープが擦り切れんばかりに何度も繰り返すうち、機材が故障したこともしばしば、今から思うとたいへんな作業だった。しかし、食事も忘れるほど作業に明け暮れ、これほどスマムニに触れる機会は得がたく、かえってスマムニに対する思いを高めさせていただいた。何にかえがたい経験に、むしろ感謝しているほどである。そして、『竹富島・小浜島の昔話』の発刊は、島の宝であると同時に現在、私の心の糧になっているといっても過言ではない。

このような感動を抱き続けるなか、最近紙芝居「神様とムッカラの鳥」の作成に取り組んでいる。幼少期に聞いた肉親からの教えや習わしは、スマムニと同時にいつまでも心に残るものである。なかでも小学生になったばかりのころ、祖母の登野サダ(1902 年生)から、神様と 6 羽の鳥たちの話を何度も繰り返して聞かされ、大人となった今でも、物語がふと口をついて出てくるほどである。どうにかしてこの昔話をスマムニで残したいという思いが、紙芝居作りに長じたというわけである。

スマムニは祖母の語りに近づけるべく、また物語の世界観を壊さないよう、場面にふさわしい言葉を選んでいった。もちろん、紙芝居に不可欠な絵も自分で描いて作成し、学校や地域の行事があるごとに披露してきた。

このような活動が、意図せず国立国語研究所に伝わり、それが現在は言語学者を中心としたチームを組織し、今度は絵本作りにまで展開している。しかもスマムニだけでなく、共通語訳、英訳、音声入りで仕上げる計画である。その資金もクラウド・ファンディングで浄財をいただき、計画は順調に進められている。

幼いころに聞いた祖母の昔話「神様とムッカラの鳥」が、スマムニで語られるだけでなく、絵本となって世界中で楽しむことができるのも不思議な気持ちである。さらに夢を語ると、『竹富島・小浜島の昔話』に記録した小浜島の昔話 50 話について、取材して得た音源を CD 化して保存・継承に供したいという思いがある。

(10 月 19 日掲載)

## (10)『西表方言集』の背景と意義

### —復権としての方言発掘の事業—

前大用裕

(西表島の復権プロデューサー)

『西表方言集』の「はじめに」と「むすび」を読むと、父・前大用安のままならぬ想いと、本書刊行を成し遂げた魂の偉業が伝わってくる。決意も固く思い詰め、自己を追い込むも挫折せずに来た。本書は方言消滅の危機感に裏打ちされて成就した一冊である。一本の道を貫いた強い意志なくして、2002年(平成14年)に上梓できなかったであろう。60才から発起し、75才で成し得た悪戦苦闘の連続が、そのまま村(シヒマ)の言葉(シヒムムニ)を後世に記録として遺り財産となった。

著者の方言集に至った動機を知るために「はじめに」を引用する。

本書は「シヒムムニ」を字引形式に記述し、誰にでもわかりやすく利用されると同時に、ふるさとに伝わる言葉がいつまでも愛されることを希って執筆したものである。私たちはこの世に生まれて以来、父母をはじめ周囲の人々のおかげで言葉(方言)を教えられ、人間として生きてきた。そしてそれによって祖先代々より伝えられてきた「シヒマ」の伝統文化をも現在まで継承してきた。これら方言のおかげを思えば感謝しなければならない。/しかしながら時代の趨勢で現在は方言を使う人も少なく、七十歳以上の年輩でないと使わない。従って、こども達は勿論使わない。今のままで推移すれば後20年、30年後には方言を使う人もいなくなり、方言は自然に消え去り、祖先の残した民俗の文化遺産も自然消滅となりかねない。それを考えたとき、ひとり哀しくやるせない気持ちになることもある。このような心境が動機となって私は方言集づくりをはじめようになつたのである。/しかしながら、方言集を体系的につくるには、相当の困難が予想された。それは第一に文筆作業に不得手な私には牛車に歯向かう「螻蛄の斧」のたとえで躊躇させられたが、今やらなければ悔いを千歳に残すことになるとの決意で浅学菲才をかえりみず敢えて驚馬に鞭打って現在に至った。/そうしてこの間、先輩諸賢をはじめ多くの友人たちの激励、指導のもとに何とか上梓までにこぎつけたことに対し、衷心より感謝を申し上げる次第である」と結んでいる。

「むすび」も引用すると、「普通簡単に使っている方言も文法的、体系的に記述するとなるとうまくいかない。幾度も試行錯誤の繰り返しで完全とはいかなかったが、

不満足ながらも一応まとめてみた。/本書の表題は『西表方言集』となっているが、内容的には祖納・干立の方言を主体として記述してあるのでご了承いただきたい。」「本書は甚だ未熟な著書であるが、これを叩き台に後輩諸氏が方言の発掘研究に精進していただくよう心から念願して、むすびの言葉としたい」としている。

奥付けには「大正13年西表島祖納に生まれる。/西表尋常高等小学校卒業。/竹富村立西表青年学校本科卒業。/西表島祖納で農業に従事」とある。

思うに、同方言集は学問のない父が自己の研鑽で学問を切り開いたのであり、奇跡かつ快挙である。またグローバルリストの著者・用安は戦後、東京へ一家4人で船出した。終戦後に島を出た西表島の先駆者でもある。東京の中で鬱屈して溜まっていた言葉(シヒムムニ)コンプレックスを西表島に戻ってから見事に花開かせたのであるまいか。西表島は、時代背景的に方言は西表炭坑の近代歴史の隅に追いやられていた。か細い環境の中でヤマト言葉が浸透して文化が破壊された。その中で復権としての方言発掘の難事業をやり遂げたパイオニアである。用安は「率先垂範」をモットーに生きてきた。言語学には諸種の問題を孕んでいる。だが、絶滅危惧言語を押し留めて記録化した足跡は高く後世に称えていく意義はあるのではなかろうか。

(10月22日掲載)

## (11)方言への苦手意識

宮城光平

(八重山博物館学芸員)

私は方言が苦手です。これは別に「方言が嫌い」とか、単に「上手く喋ることができない」ということではなく、方言で会話をする世界線は「自身が気軽に足を踏み入れてはいけない領域である」というような、漠然とした苦手意識が心の中にあるのです。

私は沖縄島中部の出身です。思い返せば幼少の頃より、身の回りにいる友人らは、純粋な沖縄方言ではありませんが、方言単語を多く含んだ所謂「ウチナーヤマトグチ」を駆使して会話をしていました。その輪の中に居れば私も彼らに染まり、同じように話をしておりました。

しかし、年齢が上がるにつれ、友人の話す微妙なイントネーションを自分が再現できていないことに気づき始めました。その違和感はやがて苦手意識となり、私は小学生時代から現在に至るまで、方言に対して何とも言い

難しい感情を抱きながら暮らしているのです。その背景としては、きっと私の出自と言いますか、家庭の環境のようなものに原因があるのだらうな、とは想像しております。

私の母は宮良村出身ですが、父は沖縄島中部、嘉手納基地に消えた屋取（ヤーどうい）集落にルーツを持つコザ出身の人です。父も母も、それぞれの親とはそれぞれの流暢な方言で会話をしていました。しかし、両地域の言葉の差異はあまりにも大きく、家庭では互いの共通言語である標準語で意思疎通を図るしかなかったのでしょう。私に物心がついてから、家の中を方言が飛び交った記憶はほとんどありません。そのような環境に依拠する形で、私の言語感覚は構築されるしかなかったのでしょう……と、己の身の上を切なげに訴えてみましたが、人の移動が激しい現代においては、大多数の家庭が似たような状況でしょう。ただ、私の場合は、宮良村愛が強過ぎる母の影響故、父方・母方のどちらの言語感覚の習得も困難となっているのではないかと責任を他に追求する甘えた想像に勤しんでいるのです。

そして、母の影響を強く受け過ぎた私は、大学卒業後に単身で宮良村に移住しました。宮良村と言えば、八重山でも方言が色濃く残った地域であると予てより聞いてはおりましたが、その実際の様子には胸を打たれました。道を行く人々は方言で声を掛け合い、青年たちは飲み会の会話でも所謂「ウチナーヤマトグチ」的ではない、正式な宮良方言で言葉を絞り出します。「長幼の序」を重んじる宮良村の気風がそうさせるのかもしれませんが。宮良村の友人から「宮良では、目上の先輩に話す言葉、対等の者に話す言葉、目下の者に話す言葉、三通りの表現方法がまだ残っている」と聞いた時の驚きは今でも色褪せません。

きっと、沖縄島中部と宮良村の両文化に中途半端に親しんだ私がそんな宮良村にどっぷりと浸かる生活を始めたことにより、冒頭に記した「気軽に足を踏み入れてはいけない」方言への対峙姿勢は決定付けられたのでしょう。

そんな私も宮良村で妻を娶い、その結果産まれた3歳になる娘は時折、私が真似できないような村の子の抑揚で言葉を発し、父を驚かせます。この子が方言をどのように自身の中で昇華して成長していくのか、静かに見守りたく思います。

宮良村では、平成20年頃から婦人会が中心となり「方

言を話せる嫁さんづくり」と銘打った取り組みがなされています。宮良方言の講座の開催や方言集の発刊などに代表されるその普及活動は、他地域から嫁いできた方が宮良村に根を下ろすための礎となるのでしょうか。

婦人会のその活動を見習い、私は、生粋の宮良人である義父に「ナマガラヤ バヌゲー メーラムニサーリ パナス ヒーホーリ（これからは私に宮良村の言葉でお話ししてください）」と、いつ言おうか、緊張する毎日を送るのです。

(10月23日掲載)

## (12)タラマフツは南琉球をつなぐ

下地賀代子

(沖縄国際大学教授)

先日、「しまくとぅば講師養成講座（八重山前期）」（しまくとぅば普及センター）の2コマを担当するため、2年ぶりに那覇から石垣島行きの飛行機に乗りました。行きの飛行機では前の晩に夜更かししてしまった疲れが出てフライトの間ずっと寝てしまったのですが、帰りの飛行機では、一面の青色の中にぽっかりと浮かぶ、多良間島と水納島を見ることができました。

琉球語（シマクトゥバ）の研究者には、多くの場合、“メイン・フィールド”（よく調査に行く場所）というのがある。私のそれは多良間島です。このエッセイは、方言のことであれば自由に書いてよい、とのことでしたので、多良間島方言のことを書いていきたいと思います。

多良間島方言は、島の言葉で「タラマフツ」と言いません。言語のことを「〜ムニ」と呼ぶ八重山諸方言（八重山語）とは違う言い方になります。琉球語は、まず北琉球諸方言と南琉球諸方言に二分され、さらに北琉球に3つ、南琉球に3つ、下位分類されます。南琉球には、宮古、八重山、与那国という3つの言語グループがあります。タラマフツは、宮古諸方言（宮古語）のグループに含まれるのが一般的な位置づけられ方です。実際、タラマフツには、宮古諸方言に似ている特徴がたくさんあります。例えば、「人」をプ<sub>ス</sub>トゥ[p<sup>s</sup>itu]と言いますが、この時の「プ<sub>ス</sub>」は、pの音と、舌先母音と呼ばれる少し特別な母音で発音します。この舌先母音がしっかり保たれているのは、宮古諸方言の特徴の1つです。他にも、カ

ク<sub>ス</sub>（書く）など動詞の基本の形が同タイプであること、形容詞の語幹と呼ばれる部分が様々な用法を持っていることなど、いろいろ挙げるができます。

その一方で、実はタラマフツには、八重山諸方言に似ている特徴も見られます。例えば、タラマフツでは、サキ（酒）などiの音で終わる語の後ろに～ヤ（は）という助詞がつくと融合してサケー（酒は（←サキ+ヤ））となりますが、このような変化は、石垣島の四箇や川平、鳩間島、黒島、西表島、小浜島、竹富島にも見られるものです。また、「サトウキビ」をスツジャ、「虹」をヌズと言うなど、八重山諸方言に共通する語彙も使われていること、形容詞の基本の形がサアリ型と呼ばれるタイプであることなど、やはり、いろいろ挙げるができます。

結局、タラマフツは宮古と八重山、どちらのグループの言語なのでしょう。私自身は、タラマフツのことを知れば知るほど、どちらか一方に位置づけることを難しく感じていて、まだその答えを持ち合わせていません。ただ、1つ言えることは、タラマフツの存在によって、南琉球の言葉たちは1つにまとまることのできる、ということ。最後に、宮古諸方言に似ている特徴と八重山諸方言に似ている特徴の両方が同時に見られるタラマフツの言語事象を紹介します。次の2つの文、

①シャケー ク<sub>ス</sub>ヌー ヌムタリ°。（酒は昨日飲んだ。）

②シャケー ナマドゥ ヌミッタ。（酒なら今飲んだ。）

タラマフツでは、「昨日飲んだ」と「今飲んだ」で、「飲んだ」の形が変わっています。①のヌムタリ°は宮古平良などのヌムタス°に対応する形なのですが、多良間以外の宮古諸方言には②のような形がなく、「昨日飲んだ」でも「今飲んだ」でも、同じ形（ヌムタス°）になります。一方、八重山諸方言では、「昨日飲んだ」と「今飲んだ」で動詞の形が変わります。例えば、石垣方言では、「昨日飲んだ」はヌンダ、「今飲んだ」はヌミッタになります。ヌンダはタラマフツの①ヌムタリ°に似ていませんが、ヌミッタはタラマフツの②の形と全く同じです。つまり、タラマフツの「～た」の形は、形は宮古に似ていて、しくみは八重山に似ているわけです。

宮古・八重山という2つの地域のことばを繋ぐタラマフツ。このエッセイをきっかけに興味を持ってもらえたら嬉しいです。

（10月24日掲載）

## (13)私とスマムニの軌跡

真久田絹代

（石垣市女性連合会会長）

「ワーヤ、スマムニアンズナ。（あなたは方言を話すな！）アースデイヨー。（あなたには似合わないよ。）」

大学生の頃、無理やり方言を使おうとしたら女性の先輩から言われた言葉だ。イントネーションが微妙におかしかったことは自分でもわかっていた。沖縄本島の大学に進学し方言を話すことの重要性を自分なりに認識した頃の出来事だ。それからは方言を話さなくなった。私自身の意思もそれなりに脆弱であったのだろう。以来、40年余の時間がたったが方言を話すことのためらいが抜けない。そんな折、現在、所属する石垣市女性連合会の歴史を振り返るとその中に方言を普及させる熱心な取り組みがあったことに驚きを感じた。

時を同じくして畳みかけるように、危機的状況にある言語・方言サミットの石垣市開催となった。不思議としか言いようのない巡りあわせであると思っている。

平成31年に発刊された『石垣市婦人連合会創立40周年記念誌』をひもとくと《石垣の方言を未来に残す活動》が平成26年から独自に展開されている。活動の際に発行された実施要項に次のような文章が掲載されている。

「衰退が危惧される方言『スマムニ』を話せる方々がいらっしゃる今のうちに、一人一人、島中の、いやすべての人々に、この機会に“宝ぬスマムニ”と対面させ高揚を図りたい。そして、この“宝ぬスマムニ”が我が島を愛し我が島に生きる誇りとなって、未来へのかけはしとなることを願いや思いを込めて実施する。」（原文のまま）

まさに石垣市婦人(令和5年度女性へ名称変更)連合会の時代の先を走る活動であったと自負している。

具体的活動は平成26年度から開始された方言採取(ききとり等)であり、6年間継続している。採取活動後の成果活動として平成27年度には掲示用リーフレット【あいさつ①】作成と配布、平成28年度には【体の名前②】作成と配布が記録されている。現在、石垣市女性連合会事務局にはそれが保管されており、大会当日は担当ブースにてリーフレットの無料配布を考えている。リーフレットの完成を機に活動の方向性を変換している。

平成31年度以降は方言の地域ごとの独自性に鑑み単位女性会の活動を推進する運動になった。しかし、時を

同じくしてコロナ禍が社会全体を席卷し活動が停滞した。

コロナ禍のおさまりを待って、令和6年から各単位女性会の活動が動きだした。令和6年9月29日には石垣婦人会が「第1回スマムニ講座」を開催し単位婦人会活動の口火が切られた。同年11月29日には宮良婦人会、大浜女性会、伊原間婦人会、平得婦人会、白保女性会、登野城女性会、新川女性会と次々に独自開催された。

40年前に私自身が口止めされたような状況は変化している。社会全体が方言を大切にし日常的に使用するという空気感にあふれている。方言サミットを通してこの流れがより強くなることを期待する。

(10月24日掲載)

## (14) 島をカタチづクルもの

那根真

(竹富町史編集委員)

マキウセー ヴァーナスッカー ウングリリバ タマンガリ (牧場で育った牛は、子を産むと気性が荒くなるので気をつけて)。

ずっしりと重みのある『黒島事典』という本がある。今年、逝去された黒島の先輩である當山善堂さんが著した本だ。黒島の言語、諺、歌謡、習俗を中心にまとめられていて、黒島で生まれ育ち、島を離れても島を愛してやまなかった善堂さんの黒島への想いが詰まった集大成の一冊。

『黒島事典』のページをめくりながら、黒島で牛飼いをしている者として、牛に関する言葉や用例を探してみた。冒頭の言い回しもその中の一つ。

放牧主体から牛舎飼いとなり、牛がおとなしくなったといわれる現在でも、子牛を産んだ母牛は、野生の本能として我が子を守るために気性が荒くなり、人を威嚇したり襲ったりすることもある。おとなしい母牛ほど気をつけて接するようにと先輩たちから教えられたものである。黒島では昔から、牛は農耕、荷役用として人の生活に欠かせない存在だった。現在は肉用牛として島の経済基盤の重要な柱となっている。本の中には、島の先人たちが牛と関わる生活の中で話していた言葉や諺などが出てくる。

パンタリゾーワー ミーウセー パルマヌン (肥り過

ぎの雌牛は、なかなか妊娠しない)。

1年1産をする雌牛を育てることが畜産経営安定につながるが、可愛がり過ぎてたくさん餌をあたえると妊娠しづらくなったり、繁殖障害を起こしたりする。今でも農家同士の会話でよく出てくる内容である。

ウシン ヴァーナ ムリッカー ハラッタナ ママリブー ユダンユ スベールワヤ (牛は子が生まれると、体に付着している粘液〔羊水〕を舐める)。

子牛が産まれると、親牛は子牛の全身を舐めて血行を良くして、子牛が立ち上がれるように促す。牧場で日常的に見られる微笑ましい光景。

ページをめくる度に、本の中の島言葉と日常の光景が気持ちよくリンクしていく。善堂さんが作り上げた『黒島事典』のおかげで、普段使わない島言葉が身近に感じ刻まれていく。牛が放牧地で草をおいしそうに食べる姿は島の風景に溶け込んでいるが、島言葉は少しずつ失われ変わっていく。

牧場を吹き抜ける風の音に共鳴しながら響き渡る牛の鳴き声、そして黒島の人々が話してきた優しい島言葉が過去をつないで、島の記憶を語り継いでいく。牛と島言葉どちらも、黒島という島をカタチづクル大切な存在である。フシマムヌイ (黒島語) が生活や唄、文化に生きづいていることは小さな島の豊かさを物語っている。

(10月25日掲載)

## 2. 『八重山日報』

### —未来へつなぐ、言葉のバトン—

#### (1) 汝の立つところ深く掘れ、そこに泉あり

吉村安史

(SSA—スマムニぬ シンシーぬ 集ツァーマリー)

「危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会」は、国連教育科学文化機関 (ユネスコ) が、アイヌ語、東京都八丈語、奄美含む琉球諸語を世界の消滅危機言語であると2009年指摘したことを契機に始まりました。文化庁が主体となり11年前の八丈島大会を皮切りに、北海道、東北、奄美、那覇、宮古島、与那国島で開催され、

今回で10回目となります。

SSA(東大濱剛代表・・会員16名)とは、石垣島における「スマムニぬ シンシーぬ 集ツァーマリ」の頭文字を綴り、沖縄県しまことば普及センター講師養成講座で3年間学んだ仲間によって昨年度に結成され、教育現場でのスマムニ普及を目的に活動しています。これまでに、石垣中学校で「とうばら一ま創作」授業、平真小学校で「親しもう八重山方言」授業を行ってきました。

「消滅する」と言われる方言には、方言を土台とした諺(ことわざ)や歌、伝統文化等の豊かな文化があります。そのため、方言を単なる「ことばの教育」として扱うのではなく、地域の文化や自然と結び付けた「地域教育」として拡げていく事が重要です。

また、BEGINの歌も伝統的なシマウタの世界が基になっているように、創作は無から生まれるのではなく、それ以前に存在した伝統を土台にして築かれます。まさに、「汝の立つところを深く掘れ。そこに泉あり。」です。

特に私自身は「スマムニぬシンシー」と呼べる程では到底ありませんが、スマムニの響きの心地良さや周りも和ませる楽しさに魅了されています。更に、スマムニを土台にする様々な八重山文化や旧暦・星空文化にまで学びが広がった喜びを伝えたく、SSAやスマムニ広め隊で活動し、一昨年は与那国大会、昨年は八丈島大会で学びと交流を深めてきました。

25・26日市民会館(25日懇親会あり)で開催される今大会は、アイヌから八重山各島々までの方言聞き比べ、八重山語の特性研究報告・表現披露・取組報告、スマムニを話す大会や様々な世界の危機言語ブースが準備されています。全国から方言継承に楽しくご尽力されている仲間が集まりますので、皆で多文化を感じ、「島人ぬ宝」をみつけてみませんか。

(10月5日掲載)

## (2)ベスマの響き

### 白保椋之

(竹富町職員)

波照間島出身の祖母たちに育てられたこともあり、幼い頃から身の回りにはいろんな「ベスマ(我らの島・・・波照間島)」があった。祖母が居を構えたのは石垣市新川の一角だったが、いつも玄関の先にある障子を開けば、

そこには島の匂いが満ちていた。まだ幼かった自分にとってはパー(祖母)の存在自体が、自分が知り得る「波照間」の全てだったのかも知れない。

水をほとんど使わないナビラ(糸瓜)のおつゆや、黄金色のもちきびご飯、病院で処方された薬を「苦くて飲みづらいから」と、サッタ(黒砂糖)とお茶で流し込む食後のお約束。そして日常の中にあった島言葉「ベスマムニ(我らの島の言葉・・・波照間島言葉)」はパーたち島の出身者にとって何よりの寄す<sup>よ</sup>処であったことだろう。

普段は寡黙だった祖母も、近くに住む長姉が時折訪ねてくると、決まって始まる世間話に花を咲かせた。明るく声高な長姉に対して、口調の穏やかな祖母が打つ相槌は、日本語教育に慣れ始めた耳にも不思議とやさしく馴染むものだった。幼い耳でその全てを捉えることは難しかったが、二人の弾む口調が醸し出す朗らかな空気が、畳の上を満たしていくあの感覚は、どの遊び場よりも居心地の良いものだった。

「アベェー！」と声を上げるのはいつも決まって長姉のパー。何かにつけてリアクションの大きいササボイヌボマー(白保家の長女・・・長姉)は、アベェの使い手。嬉しさ、驚き、悲しみ、心配など実に様々な感情をこの言葉ひとつで見事に表現する。言葉のシビ(お尻)についた抑揚を巧みに操り、一瞬の思いの丈を表してくれた。「三つ子の魂百まで」とはよく言ったもので、齢九十七を数えた今も来客があると「アベェー！」と再会の喜びをいっぱいに与えてくれる。

「エーナ(そうなのね)」は、祖母の声が馴染む相槌の一つだ。勢いよく発せられる「アベェー！」に比べて、やや緩やかに曲線を描くベスマムニ。短いフレーズながら、相手の話をしっかりと聞き取って畳の上に落ち着けるような響きを持つ。決して相手の話を喰わない祖母の相槌は、親しい姉妹の間においても目には見えない敬いの姿勢があることを教えてくれるような気がした。クルンズゾートゥ(心持ちこそ上等に)の表れであろうか。

歳を重ねるにつれて、祖母の死や長姉のパーの高齢化を経験し、二人の明るい語らいを聞くことは叶わなくなってしまった。それでも、コッコ(焼香)やマリドゥシブナー(生年祝い)の折に島を訪れると、回る先々であの頃と変わらないベスマムニの響きに触れることができる。同じ島に生まれ、同じ土を踏んできた共同体の中で育まれる結束力があればこそ、島言葉の持つ朗らかな響きは、時代を経ても尚一層の温もりを持って、この地に続いてきた血の記憶を思い出させてくれる。これもまた、ベスマのスムズレ(肝を揃える)精神へ通じていよ

うか。

「どんなにつまらない所でも、故郷よりうるはしい所はない」

伊波普猷が著書『古琉球』の中に記した一文は、全ての人にとってのベスマ（我が島）を言い当てているように思う。石垣島で生まれ育った自分が、ベスマムニの響きに懐かしさを覚えた体験は、パーたちの声と記憶を通じてスサポイ（白保家）の故郷であるベスマ（波照間島）を自身の根幹として認識する礎へと変わっていった。

文明技術の進歩著しく、様々な情報が可視化され日常に溢れる現代社会において、ともすれば自分の立っている場所を見失うことも少なくない。「つまらない」と見切りをつけるのではなく、足元の価値を見出してこそ故郷は「うるは（麗）しい」土地となる。郷土の言葉スマムニが持つ響きを今一度、噛み締めてみて欲しい。

（10月7日掲載）

### (3)琉球のフィールドワークを開始したころ

松森晶子

（日本女子大学名誉教授）

今から30数年前、大学院博士課程を修了して研究者としての職を得た私は、かねてから念願だった琉球調査を開始した。それはちょうど時代が昭和から平成に移り変わった1990年代初頭のころである。奄美諸島（喜界島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島）を皮切りに、沖縄本島に至り、次第に宮古、八重山へと調査の手を広げていった。

希望に満ちあふれて調査を開始したものの、その後の長い道のりは、けっして平坦なものではなかった。平成の初めのころはまだ各地に伝統方言が色濃く残っていたため、バスに乗って乗り降りする土地の人々の会話が、皆目理解できなかった。本土では、土地の人が何について話しているかは、おおよそ理解できる。しかし奄美以南では、それがまったく通用しない。まるで外国語を聞いているような気がして、国内にいながらも、まるで異国の地にいるかのような錯覚を覚えることもあった。そのため調査語彙ひとつとっても、本土諸方言を調べるときには役立つ調査票では不十分だった。琉球独特の語を、土地の人々にひとつひとつ教えてもらいながら、調

査語彙を追加・修正していった。

分析方法も然りである。日本語では有益だった方法ではとても歯が立たないような現象が、琉球には数多く見つけた。特に八重山諸島のアクセントの仕組みについては、調査のたびに理解が深まるどころか、かえって理解できない現象のほうが少しずつ増えていく、といったような有様であった。「海のものとも山のものともつかない」とは、きっとこのような状態のことを言うのだろう。それはまるで大海に、羅針盤もなく漕ぎ出した小舟に乗っているような心細さで、この研究が果たして実を結ぶ日がくるのだろうか、途方にくれた。

そんな私を力づけたのは、当時、伝統方言を教えてください、さまざまな便宜を図ってくれた明治生まれ、大正生まれの世代の方々の熱意だった。彼らは、それぞれの土地の珍しい語彙を自ら集め、それを調査に持参してくれた。なかには、大学ノートにびっしりと語彙を書き貯めている方もいて、驚いた。また、「本当は我々のほうが言葉を残す努力をしなければならぬのに、調査してくれてありがとう。」とまで言われて、面食らった。教えを受けに行っているのにもかかわらず、感謝されるとは…。

考えてみれば、言葉は文化の根幹にある。先祖代々の伝統行事もすべて方言で執り行われ、島唄や民謡も方言を通じて伝えられる。調査現場で私を助け、支えてくれた明治・大正生まれの先人たちは、けっして口には出さずともそのことを深く理解しており、先祖から引き継いできた言葉を、なんとか未来に継承したいと願いながら、尽力してくれていたのだ。

なんの成果も残せない状態のままだった私に、あきらめず、長時間にわたって土地の言葉を教えてくれた。その恩恵は計り知れない。そのことをいつも念頭におきながら、今後も微力ではあるが、言葉の保存と継承に全力を注いで取り組んでいきたいと思っている。

（10月8日掲載）

### (4)石垣方言の丁寧語

西岡敏

（沖縄国際大学教授）

『石垣方言辞典』（2003年刊）の著者、宮城信勇先生

から電話でご教示を受けたことがある。私は、2000年のとき、沖縄文化協会会長の仲原穰氏、首里方言話者・方言キャスターの伊狩典子先生、一橋大学名誉教授の中島由美先生と一緒に『沖縄語の入門—たのしいウチナーグチ』という沖縄語の教科書を出版した。首里方言をメインとした、沖縄文語も含む総合的なテキストブックであるが、宮古・八重山に全く配慮がない教科書（語学書）というのもどうか、という意見が出版途上で有り、八重山民謡の「鷺ぬ鳥節」も語義・解説付きで紹介したのである。

出版後、その部分を読んでくださった宮城信勇先生のお話はだいたいこういうものだった。「あなたがたは、「綾羽（あやばに）ば生（ま）らしょーり」の部分を生みなさって」と尊敬語で訳しているが、それは間違いである。確かにこれはオモロで尊敬語として使われる「おわる」（「〜おーり」の部分）が入った表現であるが、この部分、石垣方言では「生みまして」という聞き手を意識した丁寧語に転化している。」とおっしゃったのである。のちに、竹富町史編纂室の飯田泰彦氏から、このことにふれた宮城信勇先生の講演録があることを教えてもらったが、この先生のご指摘を電話で受けて、動詞「おわる」の変遷に更なる興味を掻き立てられたのだった。

実は、「おわる」という敬語動詞の分析は、仲宗根改善の研究によって、オモロでの尊敬語（尊敬動詞）から意味が随分と変化していることが知られており、沖縄語では尊敬語の地位が、オモロ時代の「おわる」から、「召し」の付いた「召しおわる」に時代的に移っていくのである。八重山では「おわる」の要素が、「おーり とーり」（おはり-あり たび-おはれ）の表現にも見られるように、比較的、尊敬語の要素が保存されている言語と思っていたのであるが、宮城先生の話聞いて、「おわる」の尊敬語から丁寧語への意味変化を考えるようになった。

これは私の考えであるが、石垣方言をはじめとする八重山語は、おもに終助詞で聞き手への丁寧な気持ち（すなわち、「丁寧語」）を表現している。たとえば、「ニーファイユー」の「ユー」、「ミシャーロールンネーラー」の「ネーラー」、「クヨーマナーラー」の「ナーラー」といった文末に付く要素である。これは、日本語（共通語）の「です」「ます」や沖縄語の「ヤイビーン」「ビーン」とは異なり、活用（変化）がない「不変化詞」である（なお、丁寧語は、宮古語には存在しないと分析されたりする。尊敬語や謙譲語は宮古語にもある）。八重山語におい

て、丁寧語化された「おわる」、そして、丁寧さを表す終助詞がどのように絡んでいるのか、私の研究課題の一つである。初対面の人が互いに会話で使用する言語が丁寧語であるとすれば、八重山語の教科書を作るときにも、丁寧語の使用法は念頭に置いておく必要があるだろう。

（10月9日掲載）

## (5)八重山合衆国

大竹芳典

僕は学生の頃、卒論を書くためによく八重山の文化や言葉に関する本を読んでいた。その時『「八重山合衆国」の系譜』という本に出会ったのだが、自分の家系を振り返るとさらに八重山の「合衆国さ」を感じさせられる。

僕の祖父母は大竹の祖父以外がみんな島外出身者であり、それぞれ、宮古、与那国、多良間から石垣に来たそう。以前観光ガイドをしていた際にも、原稿に「純粋な石垣島の人はいもうほとんどいない」と書いてあり、そのまま紹介していた。

母方の祖父母は元々多良間と与那国から来ていて、多良間も与那国も沖縄方言の区分によると八重山方言には分類されないのだが、それにしても僕の母は（父と比べて）八重山方言をしっかりと使う方だと思う。

幼い頃、母はよく兄弟も従兄弟も大勢（7人とか余裕だった）軽自動車に乗せ込んでバンナー公園や名蔵湾、荒川の滝などいろいろな所へ連れってくれた。その時、信号を無視して飛び出す子供がいると、「やなふぁーなー（悪い子）は、轢かれるのも分からない」と怒っていたし、途中で子供同士喧嘩して誰かが泣いたりしていると「なんでお前は、はーさされてるば（笑っているの）？」とよく茶化していた。

卒論のために八重山方言を調べ出して分かったことだが、子供を表す方言では、「ふぁーなー」が八重山独自のもので、よく聞く「わらばー」は沖縄本島からの借用語だそう（考えてみると母は悪い子に対して「くそわらばー」ともよく言っていた。母なりに何か使い分けがあったのかもしれないね）。また、「はーさされる」は伝統的な（昔の）八重山方言の「パーサザリルン（歯を見せて笑う）」が変化したもののように、学生時代にとったアンケート調査では、石垣の人でも使用率がそれほど高くな

かったから驚きだった。

そのアンケートは、石垣に住んでいる人73人を対象にしたもので、石垣でよく聞く方言が八重山独自のものなのか、沖縄全般で使われているものなのかを調べることを目的としていた。その際、対象者の両親、祖父母の出身地も同時に訪ねていたのだが、その結果では父方の祖父では八重山（方言の区分が違う与那国を除く）出身者が6割いたものの、父方の祖母、母方の祖父母では全て5割を下回っていた（そして、宮古出身者の割合が3～4割ほどであった）。ということは、僕の母のように両親共に移住者の石垣生まれの人はそれほどマイナーではないということになる。

言葉って不思議だなと、つくづく思う。元々は違う場所に住んでいた人同士の子供が、成長するとその土地の言葉を話すようになる。そして、元々違う土地に住んでいた人の割合がある程度大きくなっても、やっぱりその土地の言葉を話すようになる。

本当にそうなのか。う～ん……。でも、考えてみるとそうよね。アメリカ合衆国はいろんな言語を話す人が集まってるはずだけど、大体はアメリカ英語を話しているはずだから、そういう事なのかもしれない。うん。そういう事だ。

と、あえてお茶目ぶった、楽観的な意見（母はこう言うやつを見て「可愛いしーなーしてる」と言うでしょう）で、このつたない文章を締めくくりにしましうか。では。

(10月10日掲載)

## (6)スマムニ継承の工夫

花城正美

(竹富町史編集委員)

辞書を引くことは言語学習の基礎であろう。幸いにも、八重山には『八重山語彙』（宮良當壯）、『石垣方言辞典』（宮城信勇）、『竹富方言辞典』（前新透）、『鳩間方言辞典』（加治工真市）、『黒島事典』（當山善堂）、『西表方言集』（前大用安）、『波照間方言 パチラームニ』（加屋本正一）、『与那国語辞典』（池間苗）などの大著がある。

これらに学びながら、八重山の言葉の意味や使い方を確認し、言葉への関心を高め、理解を深めていくことが

できるのはありがたい。分厚い辞書は一見とっつきにくいですが、これらは島々にゆかりのある研究者によって編集されており、ページをめくってみると、やはり親しみを覚えるのである。

しかし、実際にスマムニで会話をしようとする、なかなか難しいものがある。その課題を解消するため、各地域におけるさまざまな組織的な取り組みが知られている。

わが小浜島では、小浜中学校の創立60周年に、次世代にスマムニを継承しようと目標を掲げた。そして、スマムニを日常的に使用する利便性を考慮し、便覧『ふるさとの味 しまくとうば』を作成した(2010年)。まずはスマムニでの挨拶を身につけることから始めることにし、章立てを「一、あいさつ」「二、日常会話の例」「三、小浜語彙」とした。

第一章では、年中行事、人生儀礼、その他の場面に分けて、数多くの用例を挙げ便宜を図っている。黒島精耕氏は巻頭言で、「挨拶をしっかり身につければ、これを基に、自信を持って島社会の第一歩を踏み出すことができる」と述べている。

また、会話は「習うより慣れろ」というように、会話のなかに簡単な短いフレーズのスマムニを、ところどころにはさみながら慣れると良いのではないだろうか。例えば、「ミシャンサー」（こんにちは）、「ベリワーリ」（お入り）、「サネハーンユー」（うれしいです）、「アラヌ」（違います）、「ノートウ ナリルカー」（どうなっているんですか）、「タボーラリンユー」（いただきます）、「ズマンゲカー」（どこに行きますか）、「マタ アツァナー」（また明日ね）などなど、これらを会話のなかに挿入しながら、小気味よく用いたいものである(第二章参照)。

第三章は、単語帳や覚え書きのような性格を有している。改めて数えてみると、約2000項目目の言葉が収録されている。これら一つ一つの言葉の背景に、昔からの良き習わし、自然・風土、信仰・祭事などが広がっているのである。

私はこれらを総合的に理解したい思いにかられ、一語ごとにイメージした挿絵を添え、オリジナルの五十音表を完成させた。そして、それを小浜島各戸に配布し、求める郷友の皆さんにもお届けしている。今でも公民館の入口や、各家庭の玄関などに貼られているのを見るとうれしくなるのである。

そして、なんとといっても「スマムニ・ラジオ体操」に

は思い入れがある。誰が始めたのか、ラジオ体操の放送中に挿入される解説、及び掛声を地域の言葉に訳すことが、全国的に波及してみられる。その煽りを受けて、同じようにスマムニでやってみようと思つた。スマムニの掛声が体操に弾みをつけるというよりも、思わず笑いがこみあげてくることも多々ある。いずれにしても朗らかに身体を動かすことは、まちがいなく私たちの健康づくりに寄与することであろう。ありがたいことに、このスマムニ・ラジオ体操は、在石垣郷友会、在沖縄郷友会へと普及し、郷友会の運動会でも活用されている。

スマムニに触れる機会は、このようなちょっとした工夫でできるのではないだろうか。スマムニを皆で楽しく学びたいものである。

(10月11日掲載)

## (7)82歳の義母はトライリンガル!?

奥平崇史

(テマリズム代表)

私は方言が話せないし、ほとんど意味も理解できませんが、ここではトライリンガルな妻の母、すなわち義母の背景となる人生をたどってみたいと思います。

義母の出自は宮古系ですが、祖父母が海人を生業としており、戦前は西表の白浜に住み、戦後は登野城へと移住したそうです。昭和18年生まれということもあり、終戦直後の混沌とした時代を生き抜いてきた世代にあたります。

細かい地域までは把握しておりませんが、驚くべきことに彼女は宮古方言、石垣方言、沖縄方言の3つの言語を聞き取ることが出来ます。正直私には衝撃でした。このトライリンガルな状態はどのようにして生まれたのか? 良い機会だと思ひ、私なりに分析してみました。

するとやはり育った家庭環境にそのヒントがあるように思ひます。まず第一に、両親共に宮古出身なので自宅では親が宮古方言で会話をしていました。第二に、結婚相手が生粋の石垣出身で、その姑が石垣方言しか話せなかったため、会話をするために必死に覚えたようです。第三に、移住してきた登野城エリアは糸満を中心に本島からの移民者が多く、周囲では沖縄方言がバンバン使わ

れていました。また父親は宮古出身だが、海人をしてきたため、仕事柄本島系の仲間も多く、宮古方言と沖縄方言の両方を使いこなしていたといひます。

このような環境下で育った義母がトライリンガルになるのは必然だったのかもしれない。驚くべきことに、各方言は聞き取れるけど話すことはできず、なんと普段は標準語で過ごしていたとのことでした。

令和の時代を迎えた現在、方言を話す人、理解する人達の間でも一括りにすることは出来ず、そのレベルもグラデーションの状態で存在するのかもしれない。別の方言話者同士で会話する時、理解し辛い時には潤滑的なツールとして、標準語を活用したそうです。

ここで、興味深い事例を二つご紹介します。戦前から戦後にかけて島民の娯楽の柱の一つに芝居鑑賞がありました。義母も幼少時より、登野城にあった大勝劇場へよく連れて行ってもらったそうです。しかしながら、有名な翁長小次郎や、沖縄喜劇の女王として知られる仲田幸子らの一座は沖縄本島からやってきて、主に沖縄方言で演じるため、観客はその言葉を理解できる本島系の島人たちが多かった印象があると話しておりました。

ちなみに、義母はその生活環境から比較的早い段階で沖縄方言を理解し、芝居を存分に楽しんでいたようです。この様な時代背景から、八重山において義母の世代では複数の方言を無意識下で習得し、操ることの出来る方も多かったのではないのでしょうか?

最後に取り上げておきたいのは「方言札」の話です。大正生まれの祖父母の生きた時代には、皇民化政策の一環で罰則としての「方言札」を使って方言を禁じた時代があったと聞きました。少なからず方言の継承にブレーキがかかったものと考えられます。

このように身近な歴史を紐解くことで、改めてもっと方言に対する理解が進むのではないかと感じました。これからは「方言」に対し、分からないからと突き放すことなく、丁寧に向き合っていきたいと思ひます。

(10月12日掲載)

## (8)三線の勘所と「薬指」の方言

新田哲夫

(金沢大学名誉教授)

八重山諸島のことばの研究のかたわら、八重山古典民

謡を勉強している。三線を弾きながら現地語の歌を覚えることは、地域のことばと文化の理解の助けになる。録音・録画された八重山古典民謡のお手本を聞くと、三線の「尺」(第二弦を小指で押さえる所)と呼ばれる音がずいぶん高く弾かれるので、いくつかの楽譜を見て、「尺」の「勘所」(かんどころ、ポジション)がどうなっているか確かめてみた。比較的新しい楽譜には、「尺」をやや高く弾くような指示がある。しかし、伝統的な石垣風古典民謡の大瀨安伴編著の「三絃勘所図」には、「尺」に特別な記載はなく、第一弦の「下老」の音と横並びの位置(上駒から五寸)になっているだけであった。勘所図の「尺・下老」には小指を用いる指示があるが、そのとき目を引いたのは括弧付きで「無名指」の名前があったことである。ムメイシとは「薬指」のことである。中国語由来の言葉だが、現代の本土では通じにくい言い方だ。三線では「薬指」は普通の演奏に用いないが、いつそれを使うかの疑問ではなく、その「無名指」の表記が非常に気になったのである。

ところで日本語の歴史研究のうち、語彙の歴史を研究する「国語語彙史」と呼ばれる分野がある。たとえば指の名前の移り変わりを調べるとき、奈良・平安から江戸・明治時代に至る辞書類、歴史書、実用書、文学作品など多くの文献を調べ、年代に沿って変遷をみる方法である。大阪大学名誉教授の前田富祺(とみよし)博士が昭和四二年に書いた「指のよび名について」という論文があり、「薬指」の名の変遷も明らかにされている。前田博士によれば、最も古い例は奈良時代の正倉院文書の一つにある「名无指」の表記で、ナナシノオヨビと読んだと推定されている。その後、ナナシユビになり、十三世紀に薬師信仰の関連でクスシノユビ、クスリユビが現れ、後の十七世紀にはベニサシユビ、ベニツケユビが生まれている。つまり、ナナシノオヨビ・ナナシユビは最古の呼び名だ。一方、方言地図の分布からもそれらが裏付けられる。全国二四〇〇地点を調べた『日本言語地図』の「薬指」の図によれば、琉球列島にナナシ類がまとまって分布し、本土には痕跡程度にしか残っていない。琉球のことばの古さを証明した形である。現に、黒島ではナーナーンウヤビ、石垣ではナーネンウビなどの語形が方言辞典で確認できる。古い文献であっても和歌や物語など文学作品を読み進めても、「薬指」に相当する語になかなか遭遇しないであろう。前田博士が用いた文献は、雅楽の口伝、作法手習い、武芸に関するものなど、実用的な本

が多い。大瀨安伴先生の勘所図で「無名指」を用いたのは、ナーネンウビの方言語形を日常使っていたからであろう。また、そうした実用的な三線の教本において、「無名指」に遭遇したことは私にとって衝撃的だった。前田博士が研究で用いた文献に類したものがここにも存在し、またその背景となった方言の語形に思いを馳せるとき、古代にタイムスリップした心地さえしたのであった。

(10月14日掲載)

## (9)「南風」を何と読む？

米盛恭子

(竹富町教育委員会)

高校生の頃、学生寮で同室の友人は、西表島東部の出身だった。同じ西表島でも、友人の出身地である島の東南部は東部、私の育った島の北西側は西部と呼ばれている(アメリカ映画みたい)。それぞれに港湾が整備され、石垣島からも2つの航路がある。当時の私にとって、東部は総じて「大原」、何となくだが古見、美原、由布は「古見」であった。何となくという感覚は、大原小学校、古見小学校など、学校の名前に由来しているのかもしれない。

その友人との会話で、「大原では…」と話した時のこと、「我が家は大富だから、大原とは違う」という返事。「なにになに、大富。え!!まさか!あなたの家、大原じゃなかったの?」。この時初めて、東部の住民の方々は「豊原」「大原」「大富」「古見」「美原」「由布」「高那」など、それぞれの集落を明確に言い分けていることを理解した(東部の皆さますみません)。

さらに、友人に「年賀状を出したいので、住所を教えてください」と訊ねたところ、「字南風見仲〇〇番地」。「え!!さっき、大富って言ったじゃん」「大富はどこにいったのよ」。行政区の住所によると、豊原・大原は「字南風見」。大富は「字南風見仲」。古見・美原・由布は「字古見」。高那は「字高那」。

ちなみに西部地区はというと、祖納・星(干)立・白浜・船浮(内離島・外離島を含む)は「字西表」。船浦・上原・中野・住吉・浦内(鳩離島を含む)は「字上原」。崎山(仲の神島を含む)は「字崎山」となっている。

さて、話題を本題の「南風」に戻したい。

西表島の東部、忘勿石のある海岸「南風見田」は、「ハイミダ」なのか、それとも「ハエミダ」なのか。どう読むかと何度も聞かれたことがある。竹富町の小字名では、南風見田（ハイミダ）である。

西表島には、その他にも「南風」が使われた地名がいくつかある。「南風見」「南風見仲」「南風見田の浜」「南風岸岳」などである。前述の小字名、及び郵便局の郵便番号検索では、「南風見」「南風見仲」は、それぞれ「ハイミ」「ハイミナカ」と振り仮名がある。

「南風」は日本語の読み方では「みなみかぜ」。故・平田一雄さんが、かつて大原集落で営んでおられた民宿「南風荘」は「なんふうそう」だった。その平田さんが生涯をかけて語り継ぎ、保存継承に尽力なさった忘勿石のある海岸が「南風見田」なのである。

竹富町の島々では、「南風」は「ハイ、パイ」と発音することが多い。小浜島では、南風川田ウナリ（ハイカータウナリ）にまつわる言い伝えや、南風田原遺跡（ハインダバル）の発掘調査がなされている。黒島には南保多御嶽（パイフタオン）があり、八重山の遙か南にあるという南与那国（ハイドゥナン）、南波照間（パイパティローマ）の伝説も有名な話。南ぬ島石垣空港（パイヌシマ）は全国区である。

古謡であれば、新城島に伝わる《ばいけだ》（上地島・南慶田と訳）がある。『竹富町古謡集』には、《ばいさこだじらま》（小浜島）、《ばいさくだあよー》（竹富島）、《ばいさきよだじらば》（波照間島）、《ばいがぶしゆんぐとう》（黒島・南風が星と訳）、《ばいさくだ》（西表島古見・南サクダと訳）、《ばいきキだじらば》（新城下地島・南側のと訳）などが収録されている。《ばいきキだじらば》の歌の中では、「ばいかじ」（南風）、「ふなばい」（船南風〈追い風〉）と謡われる。

一方、沖縄本島では、「南風」を「ハエ、フェー」ということが多い。本島南部の地名には「南風原」（ハエバル）がある。「真南風」と書いてマハエ、マハイカジということもあるように、南風は「ハエ」と読むことが多いようだ。

苗字に南風の付くお名前は、「南風原」（ハエバラ・ハエハラ・ハエバル）さん、「南風本」（ハエモト）さん、「南風見」（ハイミ・ハエミ）さんがいる。他にいらっしゃるのであれば教えていただきたい。

その他、沖縄各地に分布する棒踊りの「南之島」「南島踊」は、沖縄本島ではフェーヌシマ、八重山ではハイヌ

スマ、パイヌスマと呼んでいる。

郵便局の郵便番号検索で、地名に「南風」が付く場所を検索してみると、長崎県の地名に「南風〇〇」という場所が数カ所あることも興味深い。長崎県佐世保市白南風町（シラハエチヨウ）、長崎県佐世保市南風崎町（ハエノサキチヨウ）、奈良県奈良市南風呂町（ミナミフロチヨウ）、その他に福岡県糸島市南風台（ミナカゼダイ）の読み方を探すことができた。ここで「ハイ」の振り仮名は1件もなかった。

八重山方言の大部分では、日本語の e が i に変化した一方、日本語の i は中舌母音 i に変化しており、エ段とイ段の区別を保っているといわれる。このように日本語の「アイウエオ」が、八重山方言では「アイウイウ」に変化するというなら、日本語の「ハエ」が八重山方言で「ハイ」と発音するのは納得できる。

（10月15日掲載）

## (10)バガドゥんでい ばがいわるな。

村松稔

（与那国町教育委員会）

バガドゥんでい ばがいわるな。

（バガドゥって分かりますか）

ふーていんきぬ トカゲぬくとう

（巨大なトカゲのことを）

どうなんとうや バガドゥんでい んでいぶる。

（与那国島の人たちはバガドゥと呼んでいます）

だまとうぬ 名や

（和名は）

キシノウエトカゲんでい んどう。

（キシノウエトカゲといいます）

うるむないか° しや びぎバガドゥや

（春になったら、雄のキシノウエトカゲは）

どうあがんだりてい ぐてい すさくなるん。

（胸が赤く染まって、気性が荒くなります）

だぬ ぐしくがら とうんでいてい

（屋敷の石垣から出てきて）

どうみすいきるんでい どうぐ むんばいきぶる。

（メスを巡ってよく取っ組み合いをしています）

「んかちや ばやぬ みなながら

(「昔は私の家の庭から」  
うんにぬみゃつき かーばい ンなりたんど。」  
(そんな様子がよく見られたよ)  
ういとうんたや うんに ンでいわるん。  
(お年寄り方はそのようにおっしゃっています)  
バガドゥや みゃーぐぬ ちまでいまがら  
(キシノウエトカゲは宮古諸島から)  
だまぬ ちまでいまばぎん ぶんか°  
(八重山諸島まで分布していますが)  
ふがに ぶらぬん 国ぬ たがらんでい  
(よそにはいない国の宝として)  
天然記念物ぬ 指定うぎどうぶる。  
(天然記念物の指定を受けています)  
バガドゥや ちまぬかーでい 名かばいぶる。  
(キシノウエトカゲは、島ごとに呼び名が違ってきます)  
だまやバギィラ、  
(石垣島はバギィラ)  
たぎどうんやマンダラハブ、  
(竹富島はマンダラハブ)  
くまちまやキィネラ、  
(小浜島はキィネラ)  
ふるしまやビキラー、  
(黒島はビキラー)  
あらぐすくやイシミーゴザ、  
(新城島はイシミーゴザ)  
いりむとうやポーナチ、  
(西表島はポーナチ)  
はているまやバジラんでい ンどう。  
(波照間島はバジラといます)  
みゃーぐぬ ちまでいまや  
(宮古諸島では)  
バガギィヤんでい ンでいぶんか°、  
(バガギィヤと呼んでいます)  
パリエシュ、パリエカタカス〈久松〉、  
(他にパリエシュ、パリエカタカス〈久松〉)  
ハイヌグルクン〈佐良浜〉、  
(ハイヌグルクン〈佐良浜〉)  
パリエカタカス〈伊良部〉はでいみ、  
(パリエカタカス〈伊良部〉をはじめ)  
はたぎぬいゆんでい ンでいぶるどうぐる  
(畑の魚と呼んでいるところが)  
たいしく あん。

(たくさんあります)  
カタスんでい ンどうんすや  
(カタカスというのは)  
うとうんか° いに ンぎむいぶる オジサンんでい  
(あごにひげが生えているオジサンという)  
ンどう いゆぬくとうどう。  
(魚のことですよ)  
んかち みゃーぐぬ 'とうんたや  
(昔、宮古の人たちは)  
だみぶる ういとうんた あがみんたんき  
(病気のお年寄りや子どもたちに)  
くんでいむぬんでい ちみてい はみたんとうな。  
(滋養強壮食として捕まえて食べさせたそうです)  
いくつあぬばすやあとう  
(戦中戦後の)  
はいむぬみぬん まんぐるや  
(食糧難の時は)  
あたらぎぬ たんぱく源あたるんでい。  
(貴重なタンパク源だったそう。)  
うし はたぎぬ いゆんでい ンだりたんていら。  
(それで、畑の魚って言われたのでしょね)  
いるんか° ない  
(しかし、いま)  
かんとていぬ くらしぶる どうぐるや  
(彼らの生息地は)  
だんぶらし 'かつていらりてい、  
(破壊され)  
くるまんき ぴらんかり  
(車に轢かれて)  
とうちぬかーでい ひんないぶる。  
(年々個体数が減っています)  
だまに くにぬ ンかちうたか° あん。  
(八重山にはこんな古謡があります)

ヤーヌ マールヌ ポナチエマ  
(家のまわりにいるキシノウエトカゲが)  
ウブトゥウリ ザノナルケ  
(大海に下ってジュゴンになるまでも)  
バガケラヌ イヌティ  
(我々の命も)  
シマトウ トウミ アラシヨリ  
(島と共にあらしてください)

うやはぶでいんたぬ うむい いちばぎん

(先人たちの思いをいつまでも)

むてい ひーどうきらりるんでい うまりるん。

(持ち続けていきたいものです)

(10月16日掲載)

## (11)先島地方で発達した「カギ」「カイ」(影)

仲原穰

(沖縄文化協会会長)

八重山民謡の「月ぬ かいしゃ」(月の美しさ)の「カイシャ」について宮良當壯氏は『八重山語彙』で「美しさ。美しきこと。麗はしきこと。カギサの轉。カギは清く美しきこと。」のように「カギ」に「清く美しきこと」の意があるとしている。石垣方言では「カギ」とも「カイ」とも発音されるが「カイ」の使用例が多い。「カイクニ」(きれいな言葉)、「キヌ カイ」(木陰)のように「きれいな」「美しい」だけでなく「陰」の意でも使われている。宮古諸島・伊良部島でも「キヌ カーギ」(木陰)や「プットゥヌ カーギ」(影法師)のように「陰、影」の意で用いられるほか、「ナイ<sup>o</sup>カギ タイク」(響きのよい太鼓)のように「(音が)よい」の意で「カギ」が使われている(本稿で特に断らない場合、石垣方言の用例は宮良信勇『石垣方言辞典』、伊良部方言の用例は富浜定吉『宮古伊良部方言辞典』による。ただし、表記は沖縄県「しまくとぅば表記」に統一)。琉球列島の伝統的なことば(琉球諸語)のうち、先島地方には「宮古語」「八重山語」「与那国語」があり「南琉球諸語」と呼ばれている。まとめて呼称するのは似た特徴があるからである。

「北琉球諸語」では「沖縄語」の首里方言で「カーギ」、「国頭語」の今帰仁方言で「ハギ」のように語源の「かげ」(光、姿、影、陰)が沖縄本島の特徴に変化している。意味は「姿、容姿」「器量」「陰」の意などで用いているが「美しい」に特化した意を見いだせない。例えば首里方言では「美しい容姿」には「チュラカーギ」のように「カーギ」の前に「チュラ〜」(美しい)を付け、「悪い容姿」を表すときは「ヤナカーギ」と「ヤナ〜」(いやな)を付す。ここから「カーギ」そのものに「美しい」の意

がないことがわかる。このように地域ごとに単語の意味や用法を発達させている。

南琉球諸語では「かげ」は名詞の用法だけではなく形容詞としても発達している。宮城信勇氏は「カイシャ」が形容詞化した「カイシャーン」について「①美しい。きれいだ」「②状態が良好である。」「③良い意味にひろく使われる。」の意があるとし、②の例として「オーチキイ カイシャーン」(天気が良い)、「ナカ カイシャーン」(仲が良い)、③の例として「キム カイシャーン」(心が優しい)などの例をあげている。天気や人間関係などの状態の良さや内面の優しさまで表現できる形容詞にまで発達したことが分かる。さらに「サッティ シーラー サカイシャーツー」(本当に姿の美しいことよ)のように形容詞「シーラーサーン」(姿が美しい様)と重ねて用いた限定用法ではあるが、「容姿」の「美しさ」についても表現できる。

伊良部島でも「カギ」から発達した形容詞「カギカム<sup>o</sup>」があり、「クリン ツキーヤ カリガドゥ カギカー」(これよりはあの方がきれい)のように用いる。また、「カギグイ」(美しい声)、「カギズム」(きれいな心。優しい心)、「カギヤー」(立派な家)、「カギズン」(美しい着物)、「スズカギマミ」(粒が揃って立派な豆)のように声や心、物、着物、豆などについて「美しい」「立派な」「優しい」の意で後ろの名詞を表現している。さらに、「顔のきれい」などの容姿については「カギ」を用いないことも明記されている。なお、伊良部島では「カギタビ」(めでたい旅出)のように「めでたい」の意でも使用できるようである。同じ南琉球諸語でも地域ごとに「カギ」の意味用法の広がりには違いがみられる。

「令和七年度 危機的な状況にある言語・方言サミット 八重山大会」では、日本の危機言語・方言の代表者が集まり、各地域のことばの再活性化や継承の取り組みの紹介をするとともに、「危機言語・方言の聞き比べ」「危機言語・方言による表現披露」の企画もあって他地域と八重山語との対比を通して、ふるさとのことばの魅力や特徴を知ることができる。ぜひ参加してみてほしい。

(10月17日掲載)

## (12) どうなんむぬいし はなしきんだぎ

与那原マリサ

(与那国町教育委員会)

あぬや どうなんちまぬまりどうあい、はたちぬばすにちまんきかいしすたん(私は与那国島の生まれで、20歳で島に帰ってきました)。ない、ぬん いらぬか° しや、ちまくとうばや みぬんきなるんでい んだりぶる(今、何もしなければ、島言葉は無くなると言われてます)。くんにさびつつあるくとうや あいやならぬんえ(こんな寂しいことはあってはならないですよ)。まぎらぬんき勉強きらぬとうならぬん(負けず勉強しなければなりません)。すや、あか° うむい、ていーとうらしわり(今日は、私の想いをお聞きください)。

11年前、与那国中学校の郷土学習で「与那国語コース」を選択し、島の言葉を学んでいました。当時の講師は、崎原用能さんと与那覇有羽さん。その頃、「方言コース」は「与那国語コース」へと名前が変わり、有羽さんが「与那国の言葉は方言じゃなくて、ひとつの言語になったんだね、これからは与那国語と言っていこうね」と話されたことを覚えています。

2009年、島の言葉が「重大な危機にある言語」に該当し、島に住む私たちが少しずつ意識が変わっていった頃でした。コースでは、それまで取り組んでいたキングイ(狂言)の演目に代わって、普段から使えるように与那国語での日常会話を学びました。何度も練習したフレーズは、今でも覚えています。

そして島に戻って、2022年から与那国中学校の郷土学習で与那国語を教えています。郷土学習は、5月から10月までの週1回2時間の授業。8年経ち、講師もネイティブではない世代になりました。今の私たちの取り組みは「言いたいことを与那国語で言えるようになる」ことを目標にしています。

生徒が与那国語に変えて伝えたいことは、最近見ているアニメや漫画のこと、世界で起こっている戦争のことから、ふだんは話せない家族への想いなどさまざまで、それを『与那国語辞典』や『与那国ことば辞典』、『どうなんむぬい辞典』を使って与那国語へ翻訳していきます。名詞を調べて助詞をくっつけて、動詞は活用させて…一単語ずつの翻訳作業。直訳的な表現よりも与那国語らしい表現になるように、時折は国語辞典を使いながら、言

葉そのものの意味を深掘りすることもあります。

そうやって、自分たちで考えた表現をネイティブの方に添削していただき、原稿が完成。先輩方の与那人らしく言葉を遣った表現を、少しずつ自分のものにながら、私たちは与那国語のネイティブから直接言葉を学ぶことができる最後の世代かもしれない、と感じています。

郷土学習で生徒たちと学びながら思うことは、島言葉は古い言葉ではないということです。島言葉でも今の時代のことを十分に表現することができます。また、若者に関係ないものでもありません。島に住んでいれば、家にも道にも土地にも自然の中にも、祭事や芸能にも島言葉が溢れています。

言葉は人と人どうしが使うもの。言葉やその先の文化をたくさん受け継ぐために、汲む手はひとつでも多くあった方がいい。

ばがむぬんたか° きらりるくとうや

(若者にできることは)

まーしくあるはでい。

(たくさんあるはず)

でい、まどうん

(さあ一緒に)

どうなんむぬいし はなしきんだぎ。

(与那国語で話しましょう)

(10月18日掲載)

## (13) 与那国島の多言語社会

小池康仁

(Didi 与那国交流館・与那国フォーラム)

与那国町教育委員会には、与那国で過去に催された芸能発表会やシティブディなど、舞台芸能の記録映像がビデオテープで保管されていた。それらの映像をデジタル化するため、令和元年に、当時再生可能なビデオテープ35本を全て借用し、沖縄国際大学の田場裕規教授に依頼して、田場研究室で35本分を全てDVDにして頂いた。DVDは2セット作って頂き、現在、町教育委員会とDidi 与那国交流館で1セットずつ保管している。

令和3年には、狂言の継承支援を行う弊社事業の一環として、これらの記録映像から狂言の映像を抜き出し、日本語の字幕を付けることになった。字幕の原稿作成には、町教育委員会方言辞典編集委員会の委員の一人に映

像を見てもらい、セリフを翻訳して頂いた。DVD に収録されていた狂言の演目は、儀礼的な狂言や笑し狂言<sup>ばら</sup>を含めて24本ほど確認できたが、そのうち、字幕の原稿が作成されたのは、5本のみであった。なぜ演目の数が減ったかといえば、ご本人によると、自身は与那国生まれ与那国育ちだが、中学を卒業後、島を出てからは一時的に沖縄島に滞在していたものの、その後は長く関西で暮らしていたため、八重山方言や沖縄方言は苦手だから、与那国方言だけで演じているものに絞って翻訳した、ということだった。つまり、与那国の狂言には八重山方言や沖縄方言のセリフが混ざっているため、DVD に収録された狂言の中で、純粹に与那国方言だけで構成された演目は5本ほどしかなかった、ということになる。

与那国の狂言継承者の中には、狂言のセリフの6割は「うちなーぐち」だと仰る方もいる。また、DVD 作成後に、与那国方言話者の方と一緒に狂言の映像を視聴していたところ、セリフに八重山方言が入っていることを指摘されたことがあった。与那国の狂言は、少なくとも明治中期ごろからは演じられていたが、元々は琉球国時代に島外から赴任した役人など、士族から伝えられたものが始まりであるという。そのため、狂言では島外から持ち込まれた言葉が、与那国の言葉に置き換えられていった。例えば有名なディラブディも、沖縄の言葉を与那国の言葉に置き換えて作られたようだ。

このような狂言の発展を考えると、与那国への移住者と、特に戦後、人気を博した沖縄芝居の影響も見逃せない。戦前、植民地台湾の市場を背景に、与那国に糸満や鹿児島、宮崎などから多数の漁師が移住して来た。さらに鰹節工場が何軒も建てられ、そこには宮古・八重山の島々からも、移住労働者が集まってきていた。こうして、特に多様なルーツを持つ人々が住むようになった久部良では、終戦後間もない昭和23、24年頃には、既に翁長小次郎、大宜見小太郎といった沖縄芝居の一座が巡業に来ていたという。また、昭和40年頃には、祖納で公演していた芝居師に中学生の熱烈な「追っかけ」たちが付いていた、とも聞く。「うちなーぐち」や「すまむに」の言葉を残す狂言は、こうした島外からの人々や芸能の影響も受けていたのではないだろうか。

近年、与那国の狂言や組踊は上演の機会がほとんどなく、継承の危機に陥っている。継承を困難にする原因の一つは、子供たちが中学卒業後、進学のために沖縄や石垣へと移住し、島を離れてしまうことだ。しかし見方を変えれば、移住先の島々でも「うちなーぐち」や「すまむに」によって構成された、豊かな文化的世界が広がっ

ている。子供たちが「どうなんむぬい」を習得することは最も大事なことだが、仮にそのうえで、かつての与那国の人々のように、島の中で「すまむに」や「うちなーぐち」に触れ、理解する機会が増えれば、子供たちは与那国を離れた後も、このような個性豊かな島々の文化にアクセスしやすくなるだろう。その経験は生まれ島の良さを見直し、島おこしへと向かうきっかけにもなるのではないだろうか。そうした意味でも、与那国で狂言や組踊が演じられることは重要だと思われる。

(10月19日掲載)

## (14)ある郷土研究者の人生

—地域の歴史・言語・文化の継承を願って—

石垣直

(沖縄国際大学・教員)

私は石垣市大川の出身だが、正直なところ「すまむに」を流暢に話せるわけでも、その普及活動に携わっているわけでもない。それでも、せっかくの機会なので、情報提供と島外からの声援を込めて、小稿をしたためることにした。

2024年8月、87歳の誕生日を目前に天寿を全うした父・石垣繁には、1975年に発表した「失われゆく『八重山方言』」(『青い海』5月号)という文章がある。父は半世紀も前から、方言の消失を憂え、その継承の大切さを訴えていた。

白保で生まれた父は、教職のかたわら八重山各地の伝承や民俗を調査した。その出発点には、1964年に東京・神田の古書店で購入した『八重山語彙』(1930年刊)を通じた、郷土出身の研究者・宮良當壯との「出会い」があった。また、翌1965年には、琉球大学の仲宗根政善教授の許可を得て、波照間方言調査に参加する機会を得た。

「八重山郷土文化研究会」(1969~1971年)およびその後継である「八重山文化研究会」(1971年~)の立ち上げに尽力した父は、喜舎場永珣、宮良當壯、牧野清といった先達を師と仰ぎ、地道な調査と研究を積み重ねた。

父は1998年3月、県立高校を退職すると、それまでの成果を本格的にまとめ始め、後に『八重山諸島の稲作儀礼と民俗』(2017年)、『白保の民話』1・2(2018年)、

『白保村歌謡集』(2018年)、『八重山民話の世界観』(2019年)などを出版した。地域の方々のご協力を得てまとめられたこれらの著作の多くには、現地語の発音や音韻表記に関する詳細な解説が添えられている。こうした業績からは、現地語の音韻やその変化を丹念に記録しようとした、父の真摯な姿勢がうかがえる。

晩年の父は、「方言の重要性は昔から訴え続けてきたが、今の時代に方言を残すのはなかなか難しい」とも語っていた。しかし、方言はもちろん、郷土の歴史や民俗を記録し整理することの意義を、父が疑ったことは一度もなかった。

実際、父は80歳を過ぎても、精力的に『八重山・白保方言辞典』(仮称)の編纂に取り組んでいた。現在、私たち家族の手元には、白保方言に関する数百頁におよぶファイルが残されている。「はじめに」「凡例」「国際音声記号(IPA)表記」「おわりに」「参考文献」「索引」などは整えられていないが、家族としては、関係者の協力を得ながら、いつの日かこれを郷土の方々に還元できればと考えている。

父の影響を受けながらも、私は郷土研究を主とする民俗学ではなく、より広い視野から社会や文化を考察できる文化人類学の道に進んだ。留学で身につけた中国語を活かすため、私は台湾を調査地に定めた。そして漢族ではなく、先住のマイノリティである台湾原住民、とりわけブヌン(布農族)を対象に、彼らの現代的な生活や権利回復運動について調査を進めてきた。近年は、彼らの言語・文化の復興に関する研究にも取り組んでいる。

父がまだ元気だったころ、私はその研究成果として、台湾原住民社会では2000年代初頭から「族語」(各族の言語・方言)の教育や検定試験が実施されていること、2016年からは郷土の歴史・言語・文化を基礎とした各学校独自のカリキュラムによる「実験教育」が展開されていることを紹介した。また、言語と歴史・文化の教育は個別ではなく、「車の両輪」として進められるべきであること、そして父も関わった『八重山を学ぶ』の刊行には、台湾をはじめとする他地域の事例とも響き合う普遍的な意義があることなどを伝えた。

2025年10月25日(土)・26日(日)、石垣市民会館大ホールにおいて「危機的な状況にある言語・方言サミット 八重山大会」(主催・共催:文化庁、沖縄県、石垣市など)が開催される。両日には、八重山の言語・方言の現状に関する講演をはじめ、危機言語・方言の聞き比

べ、言語・方言継承に向けた各地の取り組み、各種パフォーマンス、「すまむにを話す大会」など、多彩なプログラムが予定されている。八重山で生まれ育った者の一人として、本大会が「すまむに」の保存・継承だけでなく、郷土の歴史・言語・文化に関する研究成果を踏まえた人材育成プログラムの構築に向けた重要な契機となることを、心から願っている。

(10月21日掲載)

## (15) 危機的な状況にある言語・方言サミット

### 八重山大会に向けて

～未来につなぐかけ橋となるために～

浦内克維

(メーラムニあんず会)

ケーランナローリ ミシャーロールンネーラー

今月、石垣市で「危機的な状況にある言語・方言サミット」が開催される。ユネスコの発表によると、消滅の危機にある方言として、八重山方言は「重大な危機」とされている。

今年、宮良地域において、地域の人々が誇るメーラムニ(宮良方言)を継承するために「メーラムニあんず会」(会長 石垣實佳)が発足された。

スマムニ(方言)を通して、先人の思い、地域の歴史や文化等、貴重な財産を未来へつなぐかけ橋となり、会員も学びを深め、子ども達にスマムニを身につける、スマムニ教育を目標に掲げた。

活動内容は、地域の子供達(保育園・こども園・小学校・中学校等)にスマムニの継承活動を行う。地域に伝わる口承文学(民話・童歌等)、ことわざ、黄金ことば等の継承を図る。スマムニ大会やスマムニ講演会等、学習を深める場を設け、スマムニに対する高揚を図る。公民館、老人会、婦人会、青年会、その他各種団体との連携を図り、月2回の定例会を公民館で開いている。

定例会の始まりは、全員で童謡のスマムニ詞替え歌をメーラムニで歌う。

心を整え、スマムニが飛び交う世界に入る。

誰もが知る童謡を歌うことを通し、幼い子ども達にもスマムニに慣れ親しみ、口ずさんで欲しいと願い、始め

ている。

又、会員の誕生日には「誕生日のうた」「マリビース ウタ」(ハッピー パースディ トゥユー)を歌う。

サニヘール マリビー、 マリビーヤ サニヘーン、  
サニヘール マリビーヤ、 ○○○ヌ マリビーと歌い祝っている。

会が進むにつれ、昔懐かしい話になってくる。昔話には笑いがあり、こっけいな話が多く、雰囲気と和ませてくれ、自身はその時代にいたかの様な世界に入っていく。人生経験、知識豊富な先輩達の話は、私の社会教育として、耳学問でしっかり学んでいる。

夏休み期間中、地域の中学生、保護者、婦人会を対象とした、中学生の方言学習会(とぅばら一まの歌詞を作ってみよう〜)と題し、学習会を開催し、多くの皆さんが参加してくれた。会員が講師となり「各村々での愛する民謡」「とぅばら一まの歴史と背景」「一行詩を読んで楽しんで感性を磨こう」「メーラムニを通して宮良村を知る」等の講話を行った。

中学生達が自分自身で、とぅばら一まの歌詞を考え作成した後、地域のとぅばら一まチャンピオンの皆さんに、生徒の作品を即興で唄いあげてもらった。

今年度とぅばら一ま大会作詞の中学生の部で、大会で発表される作品に、受講生の大浜中学校3年生、荻田陽理さんの作詞した、とぅばら一まの歌詞が、567点の応募の中から、見事に選ばれた。大会で歌唱された瞬間、嬉しくて涙した。方言学習会後、更に家族からスمامニについて深く学び、自身の思いを詞に込めた作品に仕上げたのだと思う。

「言葉は命」ともいわれる大切なコミュニケーションの一つである。

「スمامニ(方言)は、私のアイデンティティ」として誇りを持っている。生涯成長していく中で自分らしく生きる自己表現とし、幼い頃より聞き親しんだスمامニの奥深い表現方法等を学びたいと思っている。

幸いな事に、宮良地域の方言を収集、編集された、松原秀吉著「宮良村(むら)方言集」石垣實佳著「メーラムニ(宮良方言)用語便覧」宮良婦人会発行「方言を話せる嫁さんづくり」「宝の島言葉」がある。自身の学習を深め、次世代へ繋ぐ貴重な方言集、方言読本として、正しく継承する為に活用している。

地域には、スمامニを愛する先輩方、同世代の皆さんが多くいらっしゃる。若者を含め地域全体が方言継承の

機運を更に高まることを期待している。

方言の継承は、地域の文化を守ることと考えている。私達、市民の行動規範である市民憲章に「文化の町」づくりにはげみますと謳われている。言語・方言サミット八重山大会の開催を機に市民ひとり一人が、方言の継承について考え、行動すべきと願う。

皆さんのご参加を願いたい。

(10月22日掲載)

## (16) 私とスمامニの絆

荻堂久子

(びさいぶなりう会)

私には方言を話して褒められ感動した思い出がありません。一つ目、「ヤーヒサコ、ワー ジュンピサイムヌヒヤンラー・・・」「エツ?ホントウ?シッタイヒャー」いつの頃は忘れましたが、隣のおじさんと話した時に言われました。その喜びは今でも覚えており、「バナーピサイマリユー」としてひそかに誇りを持っています。私が島ムニ(平得では島ムヌと言う)に取りつかれたのは、40歳の頃、婦人会役員で旅行した際、役員の一人在港で出会った同郷の友人と流暢な川平ムヌで久しぶりに会えた喜びをペチャクチャと話す姿に見とれていました。たぶん「元気だった?久しぶりだね〜、今何している?」みたいなことだったと思う。故郷のなまりがこんなに人の心に沁みるとは・・・。私もびさいの人とピサイムヌで話ができたらどんなに幸せだろうか。

あれから私は、話せないけれど、聞きなれている島ムヌをひとつ、また一つと会話の中に入れて話すようになりました。“習うより慣れろと”言われるように、隣に年寄りがいらしたことも幸いに だんだんと島ムヌを話すことにも慣れてきました。

また、こんなこともありました。私が婦人会長をしていた年の公民館の敬老会に挨拶をするはずの来賓が欠席で、急遽代役の指名がありました。戸惑った私は、敬老会だし、相手は年寄りだし、と思い切って島ムヌで長寿のお祝いとあやかりの言葉を述べたと思う。そしたら、帰り際に大浜さんとおっしゃる方がとても喜んで褒めてくださいました。このように方言は人の心を和ませるんだと感じたものです。

石垣市長だって、あいさつの冒頭「バーヤイシガキシ  
チョウヌナカヤマヨシタカデドゥアノクユー、ドーディ  
ンミーシトーンナーラー」と言うだけで会場中が和やか  
になり続く言葉が楽しく聞けるじゃありませんか。これ  
ほどまでに方言は島の人の心を和ませるのです。

また私事ではありますが、八重山民俗舞踊をたしなん  
でおり、地謡は八重山古典音楽が全てと言っても過言で  
はありません。その、ほとんどが方言、島ムヌで歌われ  
ています。男女の愛、親子の愛、労働の掛け合い等々、  
中には悲しみや辛さを唄ったものもあります。先人は生  
活の中で歌を唄うことで、自分を励まし、喜びを感じ、  
子育てをし、村を築きあげて祭りを興ずるなどして今日  
があると私は思います。そして、その心は私の生活のク  
サテ（後ろ楯）として深い絆で結ばれています。なのに  
方言を話せない人が多い！無くなるかも知れない危機に  
あると言うことで、令和7年度、危機的状況にある言語  
を学習し、保存し、継承していくための方言サミット、  
八重山大会が文化庁主催で開催されます。

石垣市いきいき学び課と石垣市文化協会が主幹として  
準備を進めております。10月25・26日の2日間にわた  
って多彩なプログラムが用意されています。

私の楽しみは、30以上もあるという各グループのブー  
ス展示です。ぴさいぶなりう会は、ばがーしうまぬくが  
にむにの「かるた」を製作しました。絵、読み札、読み  
方のCDと出来上がったばかりです。

フカノウピトゥ ノーバヒードゥ ナライオールユー  
ケーラ ヤラビツケーリ ミーナライ シウキナライシ  
ウーナオーラージョ！！

(10月23日掲載)

## (17)ザーフアイシーチャンラー

佐藤仁

(みちくさ文庫)

「カラーバス」という言葉を耳にしたことはあります  
か？あまり聞き馴染みのない言葉だと思います。私自身、  
この数年で知った言葉です。Tシャツのデザインを仕事  
としていた時期に、アイデア発想法の一つとして知りま  
した。

朝、家を出るときに「今日はこの色に注目する」と決

めてから家を出る。例えば赤色。それだけで、脇道に小  
さな花が咲いていること。海沿いの柵がよく錆びて赤茶  
けた色になっていること。おそば屋さんの紅生姜がいつ  
もより薄い色をしていること。…普段だったら素通りし  
ていたであろう、色々なことが目に飛び込んでくるよう  
になります。「color (色を) bath (浴びる)」というのが、  
語源と言われます。

『翻訳できない 世界の言葉』という本があります。私  
が登野城・保安通りで営んでいる私設図書館において、  
老若男女問わずいちばん人気の本です。【「sgriob(スグ  
リーブ)】：ウイスキーを一口飲む前に、上唇に感じる、妙  
なムズムズする感じ。(ゲール語)」「【pisanzapra(ピサン  
ザプラ)】：バナナを食べるときの所要時間 (マレー語)」  
などなど、他の言語では言い表し難いユニークな言葉の  
数々が紹介されています。ちなみに、日本語からは「木  
漏れ日」や「積読 (つんどく)」などが載っています。

言葉というのは、ものさしについた目盛のようだ、と  
思います。目盛りが本来連続した「長さ」を区切るよう  
に、言葉も本来ひとつつながりである世界の「ものごと」  
に境目をつくります。日本語では「蝶」と「蛾」を2つ  
に分けるけれど、フランス語ではどちらも「papillon (パ  
ピヨン)」と呼ぶ。というのは、言語によって異なった世  
界の区切り方があることの、有名な例ではないでしょう  
か。

新しい言葉を知る、ということは、世界を測る「自分  
ものさし」の中に、新しくひとつの目盛が加わること。  
もっと大げさに言えば、世界の新しい受け取りかたを知  
る。ということなのかもしれません。この本を通じて「ゲ  
ール語ものさし」の一部に触れて以降、私は濃いめの島  
酒を飲む時に【スグリーブ】的な何かを感じるようにな  
りました。

「カラーバス」や『翻訳できない 世界の言葉』が教え  
てくれるのは、何かに特別な注意を向けてみることで、新  
しい目盛を手に入れてみることによって、「もう知っている  
」と無意識に過ごしていたいつもの世界が、暮らしが、  
生き活きと、驚きに満ちていて、愛おしいものだと感じ  
られるようになることです。

ところで、自己紹介が大変遅くなってしまいましたが、  
私は大阪から石垣島に移住して9年目の移住者です。ご  
縁があり2年前から地域行事に参加させていただいて  
いて、主に旧盆アングマの場でスマムニを教わっています。  
そんなわけで、初めて覚えたスマムニは【ジーピトゥ ス

シンタ】です。「地謡の後ろ」という意味の言葉です。アングマ以外ではほぼ使いません。…よね？

今年の夏に先輩から教わったスマムニのうち、私の「日本語にしきれないスマムニ」リストの上位にあるのが【ザーファイシーチャンラー…】というフレーズです。以降、それらしいシーンがあるたびに「今がザーファイシーチャンラーですか？」と先輩方に尋ねるようにしていますが、今のところ打率は3割くらいです。そんなわけで私はこの1ヶ月半ほど、カラーバスならぬ、【ザーファイシーチャンラー…】バス状態です。「おお、当たり！」と言われると嬉しい気持ちになります。外れても「あんな時は○○と言うよ」と新しいスマムニを教えてもらえるので、当分、【ザーファイシーチャンラー…】バスを楽しもうと思います。

言葉を知るとは、世界の受け取りかたを知ること。そうであるとすれば、私のような移住者にとってのスマムニは、この島に息づいてきたやり方で世界を感じられるようになるための入り口、あるいはゴーグルのようなものかもしれません。

まだ腑に落ちてない「日本語訳にしきれないスマムニ」たちは、この島での暮らしを新たな発見に満ちたものにしてくれるし、身についたスマムニの数だけ、「島ものさし」を自分の中に染み込ませることができているんじゃないかなあ。

もしも私と同じく、スマムニ初級者、あるいはスマムニを全くわからない方が、このコラムをここまで読んでくださっていたら嬉しいです。みなさまと一緒に、周りにはいるスマムニの先輩の助けを借りながら、【ザーファイシーチャンラー…】なシーンを探してみませんか？

(10月24日掲載)

## (18)シマムニと記憶と記録と

占部由子

(神戸市外国語大学講師)

ことわざや格言とは得てして、実感できるまでそのありがたみが分からないものようだ。ヤマトウピトウの身でシマジマのことばを習いに通ううち、「生まれ島のことばを忘れたら、島を忘れる」ということばを覚えてもらった。習ったときは「いいことばだな」という感想に

留まった。しかし、近年転居によって自分の生まれ故郷を離れ、周りの人が自分と異なることばをしゃべる環境に置かれてから、初めて真にそのことばの意味を理解できた。生来身に沁みつき話してきたことばを、ともに話せる相手がいることの、なんとありがたいことか。

筆者が初めてヤイマムニを習ったのは、西表島の船浮だった。30分もあれば集落を一周できてしまう小さなシマで、1人の女性に船浮のことば(フネームニ)を習いに通った。今思えば、シマ出身でもない人間相手に、フネームニで話すのは大変だったと思う。なにせ、本当に相手がことばを理解できるのかどうか、分からないのだから。それでも彼女は、何回も、様々な質問しに訪れる筆者に、根気強く付き合ってくれた。あるときは、「あたま」「家」「海」のような基本的な単語を、あるときは動詞の活用のしくみを理解するためにいろいろな文章を、あるときは昔の経験を船浮のことばで語ってくれた。ときにはマンツーマンで、ときにはほかのシマの人と一緒にじっくりと教えてもらう、とても贅沢な時間だ。

話は少しそれるが、八重山を訪れるたび、図書館や書店に並ぶ郷土資料の豊富さに感動する。膨大な語彙を収録した辞書や様々な専門書もあれば、いろいろな人が親しめるように工夫された図書、絵本、わらべうたもある。近年ではインターネットで古い映像資料や音声資料が公開され、八重山の各地のことばを聞くこともできる。こうした記録をきっかけとして、記憶の底にあるシマムニを思い起こし、幼い頃に聞かされたことばを、シマの人相手であれば話せる人や、今は出てこなくても聞いているうちに思い出して話せる人はいるだろう。

一方で、こうした記録が残りにくいシマムニもあるだろう。フネームニを習っているとき、彼女は何度も、「自分がシマのことばを言って聞かせ、残さなければならない」と言っていた。自分で書きつけて残したり、シマの人と記録をしておかなければ、昔のことが忘れられてしまうだろうと。筆者も習った記録の映像や音声を見やすい/聞きやすい形にしてお返しすることもあるが、教えてもらった量の膨大さになかなか追いつかない。

現在、八重山ではシマの人々や研究者がシマムニを習い、記録を残そうと活動している。時間はかかるかもしれないが、各地の音声・映像記録の公開に向けた取り組みもある。叶うならばそれらが、昔のことを思い出したり、新たにシマムニを習う助けになればと思う。生まれ故郷のことばが遠のいたときの切なさとともに、再び生

まれ故郷のことばに触れられたときの喜びを知った身の、ささやかな祈りである。

(10月25日掲載)

## (19)『竹富方言辞典』の思い出

上江洲儀正

(竹富町史編集委員)

『竹富方言辞典』の刊行から15年近く経過した。南山舎にとって大事業であったので強烈なインパクトが残っているが、15年前のことだから詳細を思い出すのは難しい。幸い『竹富方言辞典』に、著者の前新透先生の「はじめに」「あとがき」、編著者の波照間永吉先生の「跋」があるので、それらに拠りながら当時の思い出を少し記しておきたい。

ある日、透先生が30数冊の大学ノートを抱えて(透先生の家は南山舎の北隣だった)やってきた。「辞典をつくりたい」。親戚だし、大いに意義あることなので一も二もなく後先も考えず(悪い癖だ)引き受けた。

透先生はなぜ竹富の方言辞典をつくろうと考えたか。「はじめに」で次のように書いておられる。

「1985年、教職を退いて心身ともにゆとりが生じたので、かねてより考えていた竹富方言集めを始めた。スタートしてすぐに、竹富の各家庭では方言を話す家庭などはほとんど皆無に近く、方言消滅の危機は目前に迫っていることを知り、愕然としたものである」

続けて、「ムニ バッキター(言葉を忘れたら) シマ バッキ(生まれ島をも忘れ) シマ バッキター(生まれ島を忘れたら) ウヤ バッキルン(親までも忘れる)」と竹富のことわざを紹介している。

複雑な思いがあったのではないかとある人は言う。昭和30年代。本土研修を終えて竹富に戻ってきた透先生は、率先して標準語励行をすすめたという。学校を卒業したら島を出る宿命の子どもたち。本土にわたる子も多からう。その子たちにとって標準語は必要……。

30数冊の原稿は、「方言を手あたり次第書き出して整理」し、石垣在住の教え子たち7人に「分野別に分担して収集」してもらい、竹富島の長老たちとの153回の聞き取り学習会で収集した「竹富方言の個々について吟味検討して記述した」(あとがき)ものであった。

持ち込まれた原稿を、南山舎ではエクセルで入力整理

し、A3サイズでプリントすると約2100枚になった。辞典にするためには専門家が必要だと、波照間先生に監修をお願いした。先生は、「受け取った原稿を200枚ずつクリップで束にした。これが足掛け4年の苦闘の始まりであった」「石垣島に滞在しての作業は百日は超えるだろう」と振り返っている。

ホテルにカンヅメにされた波照間先生の仕事ぶりはすさまじいものだった。ホテルに持ち込んだ『石垣方言辞典』『沖縄語辞典』『今帰仁方言辞典』など数冊の辞典を机の上に置いて首っ引きで捲りながら、一語一句確認していく作業。ゲラは小さく丁寧な赤字でみるみる真っ赤になった。その早さに驚いて、赤ボールペンを1ダース差し入れたことを憶えている。

そんな日課の唯一の息抜きは食事タイムであった。八重山そばが大好きな先生にお願いして『やえやまGUIDE BOOK』に「私の好きなそば屋ベスト10」を紹介してもらったのは、今では懐かしい思い出になっている。

波照間先生の「？」の赤字の調査には、透先生の教え子7人のうちのお二人、高嶺方裕先生と入里照男先生があたった。ある日、入里先生がスキップをしている。聞くと、提出した原稿がOKだったので嬉しくて、と満面の笑みで言う。ところがそのしばらく後、うなだれていたの、聞くと、「再調査。スキップ損した」と。楽しく厳しい現場であった。

最後に、当時を振り返って思い出すこともう一つ。神様はいらっしゃるんだなあと思ったこと。

透先生は「あとがき」で次のように書いている。

「執筆中、狭心症や脳梗塞の診断を受け、まさに薄氷を踏む思いの日々であったが、諸先生方や多くの方々のご指導、ご協力、そして温かいお励ましのおかげで、念願の『竹富方言辞典』の完成をみることができ、感謝と喜びでいっぱいである」。

これは辞典刊行後に聞いた話だが、入里先生がいつものように方言の確認で透先生を訪ねた時、このように言ったという。「照男君、僕が死んであとに辞典が完成しても、僕はちっとも嬉しくないよ」。これを聞いたとき、ああ間に合ってよかった、と心から思った。神に感謝した。

『竹富方言辞典』は2011年2月に刊行された。前新透先生は11月に八重山毎日文化賞、12月に第59回菊池寛賞、翌年1月に沖縄タイムス出版文化賞を受賞された。

そして2012年4月天に召された。88歳だった。

(10月26日掲載)

## 編集後記

『竹富町史だより』〈第57号〉を刊行することができました。本号のテーマは「シمامニ」（島言葉）。2025年度の竹富町のシمامニの保存・継承の取り組みを概観して報告しました。

2009年、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が、消滅の危機にある8言語のうち、竹富町の島々のシمامニを含む八重山語が、「重大な危機」であることを発表しました。その後、沖縄県の取り組みもあいまって、八重山地域においてもシمامニの保存・継承活動の機運がにわかには高まってきたように思われます。

竹富町教育委員会では、竹富町の島々村々のシمامニ（島言葉）を保存と同時に、普及と推進をも視野に入れて取り組んでいこうと、2019年に「シمامニ普及推進部会」を発足しました。このシمامニ普及推進部会が中心となった「竹富町シمامニ発表会」も2025年の波照間島大会で4回を重ねています。また、発表の形式が自由であるのも良いと思います。

毎回、古見公民館は、「うさぎとかめ」「花咲かじいさん」「大きなかぶら」「十二支のおはなし」など、誰もが馴染みある話を演劇にして楽しませてくれます。波照間島大会では、当島から三つの演劇が発表されました。「東村のコンギ」「西村のコンギ」は、波照間島の旧盆行事ムシヤーマで毎年演じられる伝統的なコンギ（狂言）です。それに加えて、波照間中学校の1年生は、創作劇「波中的一天」を披露し、日常の学校生活をシمامニで演じきりました。演劇という形式を借りつつ、学校生活を方言で表現した試みはとても新鮮でした。また、「2025年度危機的な状況にある言語・方言サミット八重山大会」では、西表島祖納村が見事な「品取狂言」を披露し、万雷の喝采を浴びました。

こうした「方言台詞劇」は、保存・継承においても効果的です。劇にはその役柄にふさわしい適材適所の配役がある一方で、役を入れ替えできるという側面も持ち合わせています。役を演じるなかで、誰もが方言の話し手になれる利点があります。そのとき、演劇という形式は、生きた方言を保存する器ともいえるでしょう。

その他、サミットに合わせて地元紙上で全33回のリレーエッセイが行なわれました。そこから各地・各団体・各自の活動や、模索する多様な取り組みを知ることができたのも有意義でした。

2025年のトゥバラマ大会「作詞の部」において、佳作に選ばれた田安苗子氏の作品は、いみじくも「すまむに」（島言葉）を積極的に使っていこうと呼び掛けたものでした。

あつたらすまむに のーで いざばん かざめーつくカー とうみらるなー  
ンゾシーヌ とうりいだし いじはららー

歌詞は「大事な大事な『すまむに』を、どうして使わないの。しまっておいたら、なくなっても気づかないよ。しまっておかずに取り出して使っていこう」というものです。島言葉を記録や文化遺産として「保存」するだけでなく、日々の生活のなかで意識的・積極的に用いることも心がけたいものです。

（飯田泰彦）

2026年2月27日発行

## 竹富町史だより

第57号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-87-6257

e-mail : [taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp](mailto:taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp)

<p><b>たけとみじま</b></p> <p>こはま</p> <p>くろしま</p> <p>あらぐすく</p> <p>いりおもて</p> <p>こみ</p> <p>はとま</p> <p>はてるま</p>	<p><b>おとうさん</b></p> <p>イージャ イヤマ アーヤ イヤ イサ アーヤ アヤ イヤー</p> <p>アウジ イヤ アウチ アブチ ウフザ アブゼ フィヤー ファー</p> <p>おじいさん</p>	<p><b>おかあさん</b></p> <p>アンマ ジツチ アンニ シナ アブ アホ アネー アホ</p> <p>アッパ アッパ アーファ アッパ パー アッパ アッパパー パー</p> <p>おばあさん</p>	<p><b>ふうふ</b></p> <p>トッジフト トジフト トゥンツフト トゥズフト トジフト トゥジフト トゥスフト トゥンフト</p>
--	--	---	---

<p><b>おにいさん</b></p> <p>シーザ シザ シンジャ シンジャ セー シーザ シジャー シヤマ</p>	<p><b>おとうと</b></p> <p>ウトゥトゥ ウトゥド ウチト ウシト ウトゥトゥ ウトゥウ ウトゥドゥ ウトゥドゥ</p>	<p><b>おねえさん</b></p> <p>ホンマ アンマ アーマ シンマ ンナ ブナル アーマ アマー</p>
---	---	---

<p><b>わたし</b></p> <p>バナ バナ パン バナ バナ バナ バナ バナ バナ バナ バナ バナ</p>	<p><b>あなた</b></p> <p>ワヤー ワー ワンダ ウラ ダー ワー ダー</p>	<p><b>いもうと</b></p> <p>フナル フナル フナル フナル フナリ フナル フナル フナリー</p>
--	---	--

<p><b>おとこ</b></p> <p>ビドゥ ビキンドゥン ビキドム ビヒドン ヒドン ビキトゥン ビキドゥン ビドゥム</p>	<p><b>まご</b></p> <p>マー マー マー ンマー マー マー マー マー</p>	<p><b>おとしより</b></p> <p>ウイビト ウイビト ウイビス ウイビト ウイビト ウイビト ウイブス ウシト</p>	<p><b>こども</b></p> <p>フナー ヤラビ ヤラビ ヤラビ フア ヤラビ フア ウタマ</p>
--	--	---	--

<p><b>おんな</b></p> <p>ミドゥ ミドゥン ミドム ミドゥン ミドン ミドゥン ミドム ミドゥム</p>	<p><b>ともだち</b></p> <p>ドゥン ドシ ドゥス ドゥス ドゥン ドゥン</p>
--	--

<p><b>いも</b></p> <p>ン アコン ウン ン ウム アウコン ウン アガン</p>	<p><b>いぬ</b></p> <p>イン イヌ イヌ イヌ イン イン イン イン</p>
---	---

<p><b>きび</b></p> <p>シン シンジャ シンザ キサ キツア シンザ シンザ アマシヤ</p>	<p><b>たんぼ</b></p> <p>タ タ タ タ タ</p>	<p><b>あたま</b></p> <p>スブル ツフル スブル スブル ツフル サブラ ツフル スブル アマスクール</p>	<p><b>とり</b></p> <p>トゥイ グク トゥル トゥル トゥル トゥル トゥル コッカ</p>
---	--	---	--

<p><b>はたけ</b></p> <p>ハティ バテ ハタキ ハタキ ハタキ ハタキ ハタイ ヒティ</p>	<p><b>こめ</b></p> <p>マイ マイ マイ マズ マイ メー</p>	<p><b>ねこ</b></p> <p>マヤ マヤ マヤ マヤ マヤ マヤ マヤ マヤ マヤ マヤ</p>
---	---	---

<p><b>あさ</b></p> <p>ヒトムテ ストゥンティ シトムテ ストゥンティ シトタ ストゥムテ シトムテ ストゥムテ</p>	<p><b>ひる</b></p> <p>ピローン ビスマ ビスマ ビスマ ビスマ</p>	<p><b>よる</b></p> <p>ユル ユール ユナイ ユール ユル ユル ユール ユル</p>
--	--	---

# 竹富町の島々のコトバ

し ま じ ま

た け と み ち ょ う

島々のコトバ

竹富町の島々のコトバ

「島々のコトバ」

作成：竹富町教育委員会（2025）  
 転載：竹富町史編集委員会『竹富町誌』1974年（昭和49）  
 ◆1974年出版時調査の表記を転載しているため現在使用している  
 方言との違いや誤りがある場合があります。予めご了承ください。  
 ※「きび」は「きとうきび」のこと